
リリカルなのは伝勇伝StrikerS

佐藤洋 （変態）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは伝勇伝Strikers

【Nコード】

N7306V

【作者名】

佐藤洋（変態）

【あらすじ】

牢屋に入れられて二年近くがたつライナ・リュート。

ライナは監獄ライフを満喫していた。

まずい飯。看守のおっちゃんとの世間話。勇者の遺物関連の調べ者と、色々なことをして過ごしていた。

しかし、看守のおっちゃんがとある物を拾う。それは黒い数珠。その数珠はキチキチと音を立て、ライナを別世界へ連れ去ってしまつた。これは、伝説の勇者の伝説×魔法少女リリカルなのはのクロスSS

この世界で、

ライナは何を成すのか。ライナは救われるのか。君は生き残ることができるか！！

始まり（前書き）

しばらくは、ライナさんのダルダル日常を書いていこうと思います。
問い 恋愛？ ライナの恋愛ってめっちゃ難しくないか？

始まり

とある日の昼。

ライナは牢獄で本を読みなが、看守のおっちゃん和他愛の無い話をしていた。

「でさー今度はローランドの地方神話とき、それに関連する民謡とかの本持ってきてくれねえ？」

「はあ……たく、お前は本当にマイペースだよなー。ここに来てもう二年は経とうとしてるのに、
変わらな過ぎだよな」

と、他愛の無いと言うよりかは自分が調べている伝説の勇者の武器に関する本を看守のおっちゃんに持ってきてくれるようにお願いし、それに看守が呆れているという図であった。

看守が呆れているのはここ二年の間のこと。

そりゃ髪の毛と髭は、最初にあった時より、手入れできてない分伸び放題ではあるが、そんなことより看守の自分にこうも気軽に本を頼んでくることにも呆れている一つではある。

いや、別にそれはライナがぶち込まれた時に、もう、本当に最初の最初から気があっていたから別に良いのだ。

それで今更本を頼まれようが、別にいい。

どうせ今までも何度も本を持ってきてやっているのだ。
今更だ。

だが牢屋に、しかも一月もあれば凶悪な犯罪者でも狂うと言われる独房に二年もぶち込まれておいて性格がまったく変わらない上に、こつも飄々としていることには本当に呆れる、というよりかはむしろ尊敬する。

おっちゃんはやれやれと、溜息をついた後聞いた。

「んで、本のタイトルとか分かるのか？ 適当に珍しそうなものを見つくるくらいならできるぞ？」

お前のある意味お使いで色々本を見てきたからな」

「お。んじゃそれで頼むよ、流石に直接本を見れないからどんな本か分からないからな」

おっちゃんが選定眼を鍛えてくれた助かったよ」

「……………別に鍛えたくて鍛えたわけじゃないんだけどな」

「あはは、いいじゃん別に。あつ、それより奥さんの機嫌はどうよ？ 直ったの？」

「……………それがさう聞いてくれよ」

と、ここから他愛もない、おっちゃんからしたら深刻な話をしながら、ライナは監獄ライフを楽しんでいた。

主に昼寝とか調べものとかおっちゃんの話とか牢獄の不味い飯のこととかである。

ライナはおっちゃんの愚痴を半分聞き流しながら、眠そうに欠伸をしていたらあることに気付く。

看守のおっちゃんの足元に、何か落ちているのだ。

「んあ？ なあおっちゃん。それ、なんだ？」

「つてちゃんと聞けよ！　　ったく、で？　　なにが……ん？　　——
——なんだろ？　　これ、変な黒い玉が連なった輪だな」

と、おっちゃんは、黒い水晶のが数珠になったようなものを、足元から持ち上げ、
じーと見やる。

そして、よく分からなかったのか、

「これ、何か分かるか？」

と、おっちゃんはライナを信用しているのか何かの武器などと思わず、数珠をライナに渡し、見せてみる。するとライナは首を傾げ、

「んー……よく分かんねえ物質でできてんな……。なんか見たことない物質だ」

と、数珠を上に掲げて下からのぞきこむように見ていると、カチツと、何か音が鳴り、

数珠がなにか、チキチキと、規則正しいリズムを奏でながら音楽を鳴らした。

それは、ライナ達が聞いたことも無いような、綺麗な音楽だった。恐らくそれは、見るものが見れば、オルゴールのようなものなのだと分かるだろう。

だが、ライナの世界にオルゴールなど存在しない。

むしろ、物が単体で音を鳴らすことが不可解である。

ライナは驚いて数珠から顔を離し。

「なんか音がなりだしたんだけど……これってなんなんだ？」

そうライナが言うと、看守のおっちゃんも首を傾げ

「いや、俺も知らないな……。なんか貴族のおもちゃとかか？」

「いや、貴族がこんな所にこねーだろ」

「そりゃそうだな」

「んーじゃこれはなんだろうな————ってなんか光りだしたんだけど!？」

ライナの言うとおり、数珠をぺたぺた触っていたら、光りを唐突に放った。

玉の一つ一つから強烈な光を放ち、目をつぶすかのごとく閃光で、牢屋中を照らし始める。

音楽は耳をつんざくレベルで展開中だ。

ライナは、何が起ったのか分からず混乱するも、片腕で、強烈な光から目をふさぎながら、言葉を漏らす。

「うお!？　んだよこりゃ……」

とライナが呟くとおっちゃんも同様に

「おいライナ!？　なんだこりゃ!？」

「俺が知りたいわ。おっちゃんこれに、本当に心当たらないのか!？」

「無いに決まってんだろ!？　むしろこんなん初めて見るよ!」

「だよね、俺も初めて見るもん」

などと、緊張感なくそう呟いていると。
数珠が、今度は急速に光りを弱め始めた。
キチキチと、音もゆっくりと弱まっていく。

ゆっくり、音の終わりを迎えるかのように、ゆっくり、ゆっくりと……。

それをライナは不可思議に思っていると、

「んだよこりゃ、もしかしてこれ、勇者の異物とかか？
いや、ここにある意味が分からないしな——ってまた光り始めた」

そして、数珠はまた唐突に強烈に光り始めた。

今度の音楽は、つんざくような音ではなくなにか、聞くものを安らかにする神々しい曲を流している。

しかしそれに反して光りは、先ほどより強烈に発光し。

先ほどの調子を確かめただけの光なのだとするのならば、
今回は本気を出すかのごとく、圧倒的な光りで光り始めた。

そして光りは、更に強さを増しながらより不可思議な現象を巻き起こす。

うおーんと、一瞬だけ音が鳴った。

そして

「……んあ？」

ライナは怪訝な顔で、音に反応する。

まるで、今までの音楽とは反して、まるで、本当に機械的な音がしたのだ。

しかし、そんな音よりも厄介なことが怒った。

空間の光がねじ曲がっているのだ。

「んあ？　なんか、光りが歪んで……　つておわあああああああ
あああああああ」

いきなりの浮遊感と、強烈な落下の感覚と共に、光が爆発するかのよう
に強烈に光った。

光りは音と共にライナと——　落ちた。

そう、落ちたと言えない感覚。

ある意味では浮いているともいえる感覚。

それがなぜ起きたかなどライナには分からない。

意図不明、意味不明。

しかしライナは、何故か急に落下していると言えない浮遊感に戸惑いを覚えながら——

「うご！？　いたたた……　んだよ、一体何が……　つて、どこだよ
ここ？」

尻をおもいきり打ち、そして——　何故か、どことも知れない森の中にいた。

見たことも無い、森。

見たことも無い木。

自分の知っているローランドの森でも木でもない。

それに、周りには、何かよく分からないもの点在している。

なら、自分はどこにいるのか？

そう考えていると、ライナは、気付いた。

空に、何かいることを。

「つてうえ！？　んな馬鹿な、空に人が飛んでる！？　おいおい、
現代の魔法技術じゃ空なんて飛べるはず……　んあ……　もしかし

てここ未来か異世界か？ …… いや、まさかねえ」

とライナは、空に飛んでいる複数人の人間を見て、適当にあの数珠が起こしたであろう現象を想像する。

とりあえず、未来か、異世界かと思つた理由は周りの光る――

電灯――灯。

あんなものはローランドにもそのほかの国にも存在しないであろう。

アレーツ見るだけで文明の違いが分かる。

そして空をとんでいる者たちの、妙に未来的な武器そして可笑しな服。

それらを見て、適当にそう結論を出したのだ。

「しかし……まあ」

と、ライナは呟く。

正直、数珠の巻き起こした現象については、いまいちよくわからないから仮説の立てようは無い。

しかし、空に浮く魔法。

そして、おかしな格好の少女達。

それらは、何か面倒なことを起こしそうだ……と思う。

ライナは、そんな考えをまず頭の隅に置いておいて、項垂れながらとりあえずもう一度空を見る。

そこにいるのは、白い服を着た茶髪の少女。

そして黒い、露出がちょっと高くない？　なんて思わせる金色の髪の少女。

それから剣を持ったピンク色の髪をした女性。

見た目おっとりとした緑の服を着た女性。

そして、紅い服を着た子供。

そんな個性豊かな面々に目を見やり、ライナはなんだよコリヤ…
…と呟こうとしたらそれを遮るかのように声をかけられた。

「こちらは時空管理局です、貴方は次元漂流者ですね？ すいませんが…大人しく連行されてくれませんか？」

そう、金髪の少女がすまなさそうにそう言った。

それにライナは、時空管理局がなんなのとか、なんで空に浮いてんの？ とかここはどこだよ？ とか色々置いておいて、思う。

「はあゝなんかもうめんどくさい」

そう言つて、その場に寝転び、そのままライナは適当に横になつて寝た。

もちろん少女達は堂々といきなり寝始めたライナに動揺したと言
う。

始まり（後書き）

答え——ライナの恋愛は凄く難しいです。

何故なら原作でもライナが恋していたり女に興味を持っていたりする所を見たことない。

別にホモってわけじゃないのにね

取り調べ（前書き）

ライナへのはっちゃけはたぶん次くらいから
今回はライナツツコミ役じゃないので。

ってかライナの周りにはボケ役ばかりだからライナの存在が濃くて、理不尽に殴られたり理不尽な目に会うライナのツツコミもキレがよかったんだよね。

あれ？　なのはそんなキャラいねーよ？

問い2　……あれ？これ、少し難しくない？

取り調べ

side フェイト

模擬戦の途中、少し……いや、とっても困ったことになった……。

私達は管理局に入局してからもう8年たつ。

その間に私達には色々な立場ができた。

例えばはやては二等陸佐に。

私は執務官に。

なのはは戦技教導官に。

皆にも、色々な立場が。

そのせいで皆が皆、色々な用事が出来たりで、全員が一か所に集まれることはそうそう無かった。

今回はとある任務がえりではったりと——はやて以外——全員と久々に集まれたからお互いの实力を知ろうって話になって、模擬戦をしようとしていた最中だ。

そうして今にも模擬戦が始まろうとした瞬間に、次元の歪みもとれる反応がでて、目の前の男の人が現れた。

別に……それに対しては冷静に対処しようとしたんだけど……

困った原因はそうじゃないんだ。

それは……目の前の人が急に私たちの前で寝始めたから……。

「ええと……あの……起きてくれますかくれますか？」

そう言って、私はユサユサと肩をゆするけど起きる気配が全くしない。

もしかしてナルコレプコシーとか急に寝ちゃう病気かな？
なんて私が思っていると、シグナムが模擬戦を邪魔されたからなのかな？

ちよつと怒ったような顔で声をかけてきた。

「こいつはなんでこうも堂々と寝始めてるんだ」

「あはは……それはちよつと分らないかな……」

「それに、突如現れたこいつはなんだ？」

「たぶんだけど……次元漂流者じゃないかな？ 服装もそうだけど、私達を見て驚いていたようだよ？」

と、そう答えていると目の前の男の人は寝がえりを打った。
なんか涎たらしてる……寝たふり……じゃないのかな……？
そう思っていると……

「むにゃ……あゝ一日50時間……むにゃ」

なんて寝言を呟いていた……。
ええ！？ この人、本気で寝てる……。

「ふえええええ。寝たふりとかじゃなくて本当に寝てるよ、この人！？」

なのはも目の前の男の人の不可解……というよりは豪胆さ（？）に驚きを隠せないでいる。

うん、なのは。

私も寝たふりだと思っていたからその気持ちは分かるよ。

正直ナルコレプコシーとかの想像は例として取り上げたただけだし……。

……まあこうして放置しているわけにもいかないだろうし……無理やりにも連れていくしかないかな？

それにこの人からデバイスの反応もないし。バインドを掛ける必要もたぶんないかな？

でも、どうやって運ぼう……。

なんて思っていたら、何故かヴィータがすでにバインドを掛けて肩に、まるでマグロを持つかのようにかっついていた。

「速くこいつをさっさと連れて行こうぜ？　こうしてここで戸惑っててもしゃーないだろ？」

なんて言って、ヴィータは連れて行ってしまった。

行動力ありすぎだよ……。

少しは警戒とかした方がいいんじゃないかな？

なんて思ったけどまあ安全そうだし、いい……のかな？

そう思いながらも私達は管理局へと目の前の男の人を連れていった。

目を覚ませば、そこは独房の様な所であつた。

周りを見渡せば、以外にも綺麗な部屋で、本の棚に数冊の本。

そして少し離れた所に小さなトイレと、自分の今寝ているベット、というある意味一個の家の様相を呈していた。

まあ檻の中じゃなければ……の話だが……。

そこで、今更ながらライナは目をこすりながらなんかあつたの？
と思ひながらのつそりと、寢癖そのままに起き上がる。

「んふあ……ん……んあ？　ありや……俺つてばまた牢屋に入れられてんの？

ふあ……まあいいか、どうせ今までと同じ……っつゝなんか頭が痛いんだけどなんで？

まあ大したことないからいいか。

……つと、そついやおつちゃんどうなんだろう？

ちよつと心配だな。おつちゃんも変な所に飛ばされてなきゃいいけど……もし飛ばされたらあんま力の無いおつちゃんじゃ逃げるにも逃げれないだろうしな……。

しかしまあ、おつちゃんみたいな話し相手がいないから牢屋にずつといるとなると結構暇になるだろうな……。

まあいつか。飯は来るだろうしそれまでもう少し寝とこつと……」

と、ライナがおつちゃんを少し心配し、しかし速攻忘れて呟き。

なにもかもめんどくさくなつてもうひと眠りしようとした所で――

――足音が聞こえてきた。

それは二つの足音だ。

足音はそれぞれにそれなりの自信があるような音。

歩法の音は初心者からそれなりの実力のものでそれぞれだが、各々に実践を積んできたような、そんな足音であつた。

それにライナは気を使わずどうでもいいや、と寝ようとした所で其の足音はライナの牢屋の前で止まった。

その足音の主は一度息を吸い、そして言葉を投げかける。

「あの……起きてますか？」

「んにゃ、寝てるよー」

と、ライナは寝ぼけ眼でそう返す。

すると金髪の少女の声の主は、驚いたように一瞬を息を止め、少し怒ったように返す。

「って起きてるじゃないですか！？ あ、いい加減私たちの取り調べに応じてください！」

「んあ？ いい加減取り調べを受けろっていたって……ふあ……あー……俺ってば今起きたんだけど？」

「へ？ あ、今まで何回も揺すったり、ヴィータが殴ったりしたのですか？」

それにもうあれから20時間たってますよ？」

と、金髪の少女が管理局にライナを連れていてからの経緯を説明する。

ちなみにライナが牢屋にぶち込まれているのは一向に起きないライナに怒ったヴィータやシグナムの仕業である。

少女の言い分的にライナが上手く寝たふりをしていると思っていたと言う事も言外に含まれていた。

それにライナは、頭を押さえながらへーと一つ呟いた。

「んあ？ あーどうりで頭が痛いわけだ。寝すぎとかじゃないのね。

んーまあそんなことより飯っていつくんの？

俺ってば昼食べそこなったからお腹へってんだよねーって、そいやあれから20時間たってんだっけ？ 昼ごはんどころか――

――

「いい加減にしろ！！」

「んあ？」

ライナは、金髪の少女の隣にいるいきなり怒声を浴びてきた、ピンクの髪の女性に目向ける。

その女性は、目をつり上げいかにも怒っていますという雰囲気で、ライナを睨みつけていた。

それにライナは眠そうな目を向けて、それから金髪の少女に目を向けて

「えっと……なんで怒ってんの？」

「えっと、不真面目だからじゃないですか？」

と、金髪の少女は困ったようにライナに返した
それにライナは

「えー俺ってばいつも真面目だぜ？ 昨日だって牢屋の中にいながら本読んで調べ物したり看守のおっちゃんと奥さんの機嫌をどう直すか、とか人助けしたりしてたんだぜ？ あと……」

というライナの言葉を遮ってピンク髪の女性は言う。

「もういい」

「おっ、じゃあ俺をここから出して……」

と、さらに遮って

「そこまで不真面目でいるのならば少し痛い目を見て貰おう」

と、女性は腰の剣を引き抜いた。

その剣はなんかどういいう仕組みか喋っていて、その剣はちょっと落ちつくようにとか喋っていたが、女性には聞こえてないようだった。

どう見ても頭に血が上っている。

それにライナも、少し嫌そうな顔で言葉を返す。

「……うえ。俺ってば痛いのは勘弁してほしんだけど……」

「なら真面目に受け答えろ」

「……はあ。めんどくさいけど仕方ないか……痛いよりはマシだし」

そう呟くと金髪の少女はやっと話ができると、笑顔になり。

「では、ここから出しますので少し待ってて下さい」

と言ってどこぞかに連絡を取るかのように黙ってから牢屋の格子の扉を開ける。

そして少女は

「では、行きましょうか」

と声を掛けるがライナはだるそうにのっそり起き上がり、

「はあくめんどくせー」

「一応取り調べが終われば元の場所に返すようにしますので、頑張ってくださいえつと……」

「んあ？ なに？」

「その、お名前は……」

「ライナで良いよ」

「あつ、はい、ライナさん。私はフェイト・T・ハラオウンと申します。」

彼女はシグナムって言って私の同僚です」

「ふん」

と、ライナはどうでもよさげに返答する。

そう、ただとにかく面倒くさいのだ。

牢屋に二年ほどいて体を動かす機会もあまりに無かったため、体がだるいし、色々と凝り固まって動きづらい。

だからか、ライナはだるそうに、猫背ぎみの背で、のろのろ歩き出す。

それにシグナムは

「シャキツとせんか」

「うえゝ」

と、シグナムは怒るも、ライナは嫌そうな声を出して、そのままゆっくりとあるくので会った。

フェイトもフォローが大変だったと言う。

side シグナム

「で、お前は何者だ？」

そう私が目の前の、寝癖でぼさぼさの髪と、あまり風呂に入っていないだろ体臭に少し眉を動かしながらも、そう問うた。

すると、目の前の男は、面倒くさそうに、頭を掻きながらこう言った。

「牢屋にぶち込まれていた万年昼寝男？」

「ふざけるな!!」

「シグナム、落ちついて」

と、テストロッサが私を落ちつかせようとする。

私もついかと頭に血が上ってしまった。

こうういうなよなよとしたものを見ると、無性に腹が立つのは生来のモノだろうから、治すに治せん。

ここにテストロッサがいなければ、あるいは殴っていたかもしれないな。

そう思っていると、目の前の男は面倒くさそうに、そして困ったように

「いや、結構まじで言っただつもりなんだけど……はあ、じゃあ他になんて言えればいいんだ？」

そう、目の前のライナとか言う男は本気で悩んでいるような顔で、面倒くさそうに考えている。

何なんだこいつは、ただ自分の出身世界と自分の身分を言えと言っているだけなのになぜこつも悩む。

そう思っていると、唐突に取り調べ室の扉が開いて高町がはいってきた。

「どうした？ お前は仕事があるんじゃないのか？」

そう聞くと、高町はテストロッサの隣に座り、

「あはは、仕事は終わらせてきたよ？ でもまさか仕事が終わる

まで、ああ、さっき読んだ資料に書いてあった名前のライナさん？
でいいんですね？ ……ライナさんが、寝てるとは思わなかったよ」

「あはは、それは私もおもったよ……」

と、高町とテストロッサはそう言う。
しかしそれは私も同感だ。

私も仕事はあるが、しかしそれも片手間で処理できる程度のもの
しかなかったのでここに残ったわけだが、——ちなみにテスト
ロッサも仕事を終わらせてきた——どうしてこうも、あんな場所
で落ちついて寝ていられるのか。

こいつはある意味では大物なのかもしれんな……。

まあしかし、この取り調べに高町がここにいる必要はないのだが、
恐らく見つけた責任の問題だろう。

高町は責任感が強いからな。

それに仕事も終わらせているようだから得に言う事も無い。

そうして、高町が目の前の寝癖だらけの男、ライナに向き直り。

「えっと、貴方はどういう人なのか、お話してくれないかな？」

そう聞いた。

まあ私よりかは質問に向いているだろうから私が口を出す必要は
ない。

私はそちらにあまり向いていないだろうしな……

……ふむ、ならなぜ私主導で取り調べしていたのか……、正直
私よりテストロッサがすればよかったのではないか？

……もしや私は強引に取り調べをしていたのか？
つくづく私には向いていないな……。

……まあ今更そんなことを考えた所で今は栓無き事か。
そう私は若干の冷や汗を流しながら考えていると、ライナが言った。

「はあ、一から説明とかめんどくせえ……あーまあ兎に角ローランドって知ってるか？」

「ローランド？ フェイトちゃん知ってる？」

「ううん。私は知らない。シグナムは？」

「私も聞いたことはないな」

そう言つと、ライナは嫌な顔をした。

というよりは面倒くさそうにもしかして、なんて呟いて頂垂れる。

「えつと……どうかしました？」

と、なのはがライナに質問すると、ライナはめんどくさそうに、

「はあ、めんどくさいけど説明するよ……えつと……」

と、ライナは自分の起きた現象を話し始めた。
どうも、変な光りにつつまれてこっちに來た。
と言っているらし。

それはあまりにも荒唐無稽で、ほら話のようだったが、黒い数珠の話を聞いてロストロギアの可能性を考え、あまり深く突っ込まなかった。

ただ、その黒い数珠のことを深く聞くと、

「んあ？ 変な音楽が流れてきたな。なんか綺麗な音楽だったよ
うな……ってなんか俺ってば取り調べ疲れた。もう寝ていい？
…だめ？」

「駄目に決まっているだろう」

「はあ……めんどくせえ……」

本当にこいつは、やる気を根元からそいだような人間だな。
やる気のかけらも見えん。

と、そうこうしながら、取り調べは続いた。

sideなのは

そうこうしながら、取り調べは終わりを迎えた。

聞きたいことは聞き終えたし、ざつと40分程度かな？ 普通の取り調べにしては結構短い方だし、普通の人にしても短い方だとは思うんだけど、ライナさんはすごくぐったりしている。

ライナさんの口から出るめんどくさい、って言葉通り、本当に相当倒くさかったのかな？

まあ、とりあえずライナさんからの話を整理するならば、こうだね。

1 彼は変な数珠——恐らくロストログア——のせいでこちらに飛ばされてきた。

2 飛ばされてきたというのはおそらくどこかの次元世界から飛んできたという事だ。

3 しかも、その次元世界は恐らく管理局も未開拓なものだと思う。

4 ライナさんは普通の人

5 ライナさんは行く宛てがない

6 ライナさんと話をする限り相当に面倒くさがり

ということだね。

前の生活環境を聞いてみたんだけど、あえて独房に入って三食昼寝付きで牢獄生活を謳歌していたらしいし……相当にめんどくさがりなんだねー。

この人に、この人の世界が見つかるまで仕事を与えて放置しても、

そのうちどこかで野垂れ死にそんな気がする……。

管理局で面倒見ても良いけど、少しはなにかの手伝いや仕事をしてもらわなきゃいけないし、でもしなさそうだし……。

さて、どうしようかな……。

あつ、そうだ、はやてちゃんに相談してみよう。

ライナはめんどくさげに考えていた。

取調室は四角く、机と、部屋の片隅に小さな机、そしてその上に変な人形が置いてあった。

取調室ってこんななんだっけ？　と思ったが、ライナは口に出さない。

その前にシグナムに怒られたからだ。

とりあえずは、証言にある程度虚偽——独房にあえて入ったこと——を交えながら質問に答えた。

そしてライナは思う。

これからの身の振りを。

どうにもこちらの世界に住むことになるかもしれないからだ。

とりあえずこちらに来て取り調べ中の話とかで世界の仕組みをある程度は知った。

次元世界だとか、魔導使いだとか、管理局だとか、生活水準が元の世界よりも凄く高いとか、元の世界よりも悲劇は極端に少なく、とりあえずは表立っては、ローランドなどよりは悲劇の少ない国だと言う。それは、とてもいいことだと思う。

そうライナは思っていた。

（まあでも、俺の様な化物は受け入れてくれないだろうな……）

少し、悲しげな、瞳を手で軽く押さえ、どこか遠くを見るような顔で、ライナは天井を見る。

そこは見たことも無い、材質で作られた天井。

知らない世界に放り出された孤独……はとりあえずライナには無かったが色々と考えてしまう。

とりあえずはレポートとか無駄になったなとか、おっちゃん大丈夫かなーとか、キファ大丈夫かなーとか、シオンのこととか、自分の複写眼で、アルファステイグマ誰かが死なないように、とりあえず友人を作らないでおこうとか色々考える。

が、あまり考えても意味がないってことで考えるのをやめる。

恐らく、自分は元の世界には帰れないだろう。

そう思っているからだ。

数珠が何だったのかは、このさいおいて、恐らくこの世界に来たのは偶然。

たぶん、其の偶然に導かれてここに来て、それで、偶然元の世界に帰る。

なんて虫のいい展開なんてないだろうし、期待もしていない。

それに、自分は恐らくこの世界では異端なのだろう。

聞く限りこの世界の魔法には二つの主流があり、ミッドとベルカその二つだ。

しかも、科学の粋を集めて強力な魔法を実現する。

といった、自分の世界とは全然違う法則で魔法を使うのだ。

そして、自分の自然を使い自分の力、自分思考、自分の指、自分の演算でつかう強力な魔法は、恐らくこの世界に、次元世界を合わせて存在しないだろうと、直感する。

たぶん、次元世界をひっくりくるめて自分は異世界にきたのだと、ラ

イナは思う――

（とりあえずはめんどくせえ――ことになりそうだし、魔法のことは伏せとこ）

――がまあ、そんなことを置いておいても面倒くさい事が嫌いなライナは異端とかどうでもよく、めんどくさくならないように努めるのであった。

それにこのさき、自分の身の振りは恐らく管理局とかいうのが決めるであろう。

保護されるかもしれないし、しないかもしれない。
が、その前に、

（ほんと、なんか色々すげーものがいっぱいあんな
なんかスゲー気になんな）

ライナは初めて見る機会に若干の研究者としての血が少し騒いだ。

机の上に置いてある変な機械に、天井に張り付いている変な機械と、色々気になったがとりあえずライナはそこらの取調室にしてはどうしてか置いてあった変な人形を持ちあげ、その人形も何らかのモノでできてるんじゃないか？　なんて思いながら手に取り、少し固まる。

ここは、取調室とはいえ、次元漂流者のための取調室だ。
子供も来る可能性があるので其の配慮として人形を置いてあったりするのだが、それを手に取り、ライナは固まった。

人、魔法少女の様な人形で。

その目に五芒星を持っていた。

それに一瞬だけ、複写眼と重ねてしまったライナは……人形を元の場所に戻し、溜息をつく。

「……………」

ライナは黙って、少し、遠くを見るような、寂しい瞳で、天井を見た。

sideフェイト

少し、ライナさんが眠そうな目から寂しそうな、自分を責めるような目をした……。

ここに来てやっぱり不安なのか、それとも何かを抱えてるのかわからないけど。

どうしてこうも、空虚な目ができるのか……私は気になった。

彼は眠そうな顔に、いつも泣きそうな顔を併せ持っている気がする……。

それは今日、初めて牢屋で顔を見て話した時から薄々感じていた。寂しさと、孤独と、誰にも心を開かないような瞳……。でも、誰にでも優しくそんな瞳……。

色々な矛盾を抱えた瞳だった。

本人の性格がちよつといい方悪いかもしれないけど……アレ……だから……ちよつと分かりづらいけど、そんな瞳をしている。

それが分かったのは、たぶん、エリオやキャラコを見てきたからだ。だけど、エリオや、キャラコとは違う絶望を感じる。

あまりに深い絶望。

キャラコは能力の制御が不安定で沢山の人を傷つけてしまった。

エリオは酷い扱いを受けてきた。

エリオもキャラコもすごく悲しかっただろし、心の傷はまだ埋めれないかもしれないけど、それでも私が、慰めてあげれた。

けど、ライナさんの場合はだれにも慰められずに、傷つけられるだけ傷つけられたかのような傷の上にさらに傷をつけたかのような瞳。

でも優しい瞳。

孤独で、優しい、自分の命に価値など無いような矛盾だらけの瞳……。

それは、さっきのライナさんの、人形を持って、それを見た時の瞳でそう感じた。

私が踏み込むべきことじゃないんだろうけど、少し気になった。

一体どうなれば、そんな空虚に優しい、矛盾だらけの瞳になるのか。

私は、それが少し気になった。

取り調べ（後書き）

答え——難しいね

困った。ボケ役が欲しい。ライナを理不尽な目にあわせる役が……
はやてちゃんがいたぜ！！　そうだよあの腹黒さんがいるじゃんか！！

うむ、これからははやてちゃんバンバン出して、シグナムさんもぶん殴り役として出して、ヴィータもそんな感じの約として出そう。
なのはさんも以外に行けるかも。
あれ？以外に行けるじゃん？

さてあとがき。

ライナさんはあれだね、エリオとキャラの二つの絶望を持っていますね。

エリオの様にクローンじゃないけど。

まあとりあえずその二つの絶望を持っている上に、さらに爆弾を抱えている。さらにさらに、複写眼を認めて貰える人間もごく少数。その上で自分を慰めて貰える人間もいない。

いやー俺ならこわれちゃうよー。

さたでーないとふいーばー（前書き）

シグナム崩壊色々

さたでーないとふいーばー

ライナは今、何故か宴会の席にいた。

場所は普通の居酒屋。

どうにも、模擬戦後に行われるはずの宴会だそうだと。

そして、次元漂流者として、監視対象になってしまったライナを、あのまま放置するわけにもいかず、ライナさんも来てくださいと、なのはとフェイトに無理やり連れて来られたようだ。

シグナムは不服だったそうだが。

ちなみに髭は剃らされ、風呂に入れさせられた。不潔、だそうだと。

まあ普通に飯が食えるならいいかとライナは普通に言われたとおりし、ライナはついて行ったのだが。

今、ライナの周りには管理局の女局員しかない。

そう、女局員しかない。

しかもそれは全て美人で……その上で皆、管理局では有名な人間であった。

まずは、もう知っているシグナム、フェイト、なのはと言った取り調べをしてきた面々だ。

この三人は、見た目もさることながら実力が群を抜いているということで有名だ。

次に、会つてすぐに名前を交換させられた、ヴィータ、シャマル、そして何処かたぬきというか腹グロなイメージを感じさせるはやての三人も加わっていた。

こちらと同じく実力が凄く、見た目も可愛い。

そんな、管理局のモテナイ男連中が見れば崇め奉る光景にライナはいる。

まあ眠そうに欠伸をしてどうでも良さそうにしているのだが、恐らく枯れてるのであろう。

あと、ザフィーラという仲間もいるらしいのだが……何故か来たがらなかったらしい。

来たがらない、ということにライナは微妙に引っ掛かるが、まあいいか、と持ち前のマイペースで目の前に置いてあるいい臭いのする焼き鳥をつまみ口に入れる。

そしてライナは目を見開いた。

「んお！？　なんだこりゃ！？　うめえ！　こんなのローランドじゃ食ったことねえぞ！？」

このうまさは、もしかしてこのタレか？」

そうライナが、焼き鳥に驚愕していると、突如横に誰かが座り、話しかけてきた。

「あはは、そうか？　ならもつと食べえや？　確かライナでええんやんな？　うん、今日はライナの歓迎パーティーなんやからじゃんじゃんいつときよ」

と、はやてという茶髪の少女が、優しい瞳で言う。
噓。

優しい瞳というか……怪しい瞳だ。
そしてライナは、その歓迎という言葉に物凄く引っ掛かりを覚えた。

「……んあ？ 歓迎……？ なんだよそりゃ？ 俺ってば邪魔者扱いされても歓迎されるいわれは……」

「ん？ 何をいつてるん？ 今日からライナは管理局の職員やで？」

「……………はあ！？ なんだそりゃ！？ 俺ってばそんなの聞いてねえぞ！？」

「あはは、当たり前やん今決めたんやもん」

「いやいや、ちよつ、ちよつと待て、所在も身分も不明な俺をなんで管理局に……」

と、ライナの言葉を遮りはやては言う。

「そんなん決まってるやろ、ライナのリンカーコアには凄まじいものがあるからや」

と、はやては言った。

それにライナはリンカーコア？

なんて頭に？を浮かべるがそれにはやては答えずにんまり笑って言う。

「ちよーとライナが寝てる間に体を調べさせても貰ったんよ、そしたらビックリAAAの才能の塊！ ってことでライナをゴリ押しで入局させることに決めたんよ」

「AAAってのが何だか分かんねえし、それって俺の意思がねえだろ……」

と、さらにライナの言葉を遮ってはやては言う。

「あはは、大丈夫大丈夫、ライナの世界が見つかるまでの時間を働いてもらうだけや。

でも、ちょーとライナの世界が見つからへん可能性があるけど、まあその時はその時やしね」

「あ！ あ！ お前、それは無いんじゃない！？ それって結局見つからなかったらずっと管理局で働くって事に……あう」

と、またはやてはライナの言葉を遮った。

「大丈夫大丈夫、管理局も日々技術の進歩で搜索範囲を広げていきよるんや、たぶん。

ただちょーと見つかったても連絡が遅かったり、ライナの世界の様な場所を見つけても無視するように根回しは……あつ、何でもないよ？」

「いや、今確実になんでもあつただろ！！ それって絶対俺を逃がさないようにしてしようってうおおあああああああ」

ライナがはやてに文句を言おうとすると、突如すぐ横で剣が頬をかすめた。

そのかすめたものはシグナムの剣だった。

それに、ライナは、視線を向ける。

なにをしゃがる！ 的な視線で見るとライナは絶句した。

「うおおおおシグナム推参！！ 悪はどこだ！！ ただちに断ち切ってやる！！……………ひっく」

そこには顔を真っ赤にしたシグナムが、何故か宴会が始まって間もないと言うのに酔っ払っていた。

しかもシグナムのすぐ後ろには何故か十升くらいの酒瓶が転がっている。

ラムとか、日本酒とか、色々書いてあったがとりあえず洋酒と日本酒をチャンポンした上に一気飲みしたのは明白だった。

シグナムはさらに暴走を続ける。

「ひつく……何故お前はしゃきつとせぬ！！ だらしない寝癖！ だらしない顔！ だらしない姿勢！！ どれも気に入らん！！

……ひつく」

と、ライナに剣を向けて酔っ払ないながら、手を酔いでカタカタ震えさせながら怒鳴ってくる。

凄く、達の悪い酔っ払いです……。

シグナムの周りの女性陣は何故か苦笑いでシグナムを見ている。

何か諦めた表情だった。

それにライナはしんどそうに顔を歪め

「なああれは何とかなんねえの？」

「ん？ ああ……ちよつと飲ませすぎたな……めっちゃ壊れてもうつる……」

「ってあれやったのお前かよ！！」

「ん？ いやーこんなこと言うとアレやけどシグナムを寝かせてからライナに色々話そうとおもったんよ。ほら、シグナムライナのこと嫌いやない？」

……でも、ほら、シグナム凄い酒ぐせ悪いから全然寝てくれへんかった」

と、はやてはてへっ、と舌を出して笑う。

それにライナは

「いや、分かってんじゃん！！ 酒癖悪いのわかってんじゃん！！
じゃあなんでのました……」

と、ライナは言っていて気付く、この女、すごいタヌキだと。

酒を飲ましたのも、酔いが悪いのも、色々とはやての言葉がシグナムより高いのも

そう、この女は

「シグナムはお酒に弱くて寝てまうか暴れるかのどっちなんよ。
で、シグナムは酔うと私に従順になってくれるや」

そう、この女は

「なあシグナム？ ライナを管理局に入れてこっ、バシッ！ と
鍛え直したいんやけど中々首を縦に振ってくれへんねん。どうにか
ならへん？」

そう、この女は強かで……

「む？ そうですか……。分かりました！ この私シグナムがライナ。リユートを鍛えなおしゅでござる！！」

仲間を利用してまでおいしい所を持つていくタヌキであった。

ライナは、恐ろしい敵に出会ったことに恐怖する。

正直あれ、シオンの顔が思い浮かんだが、あいつも相当に強かった。

そう、それもたぶん、目の前の少女と同等かそれ以上に。

腹の黒さは段違いでシオンのアホだが、近い何かを持っているはやて。

腹の黒さがシオンの様に成長した時を考えると恐ろしく恐い。

そして今自分は、その管理局に入局させられそうだ。

ライナは 寒気がした。

入局すれば口車と権力で無駄に仕事回ってきそうだし、恐らくローランドの時のように任務放棄やサボりをすれば、実験材料や観察対象としての価値がないこちらの世界では、恐らく自分はたれじぬ。

めんどくさい事に事になったな……と思いながらライナは冷や汗をかくとともに、寒気のもう一つの要因に顔を向ける。

そう、シグナムだ。

てかシグナムの顔とか口調とかがもはや酷い勢いで崩れている。目を回しながら剣を振り回す姿などもはや恐怖で……

「ってぎゃああああああああ、っておい！ はやて！！

今頬が擦ったぞ、おい！！

こいつお前の友達だろ！ 「友達ではなく守護者だ！！」 なんとかってぎゃあああああああ

そう言いながらライナは紙一重でシグナムの剣を避ける。

何度も何度も、鋭い剣線が来るが、それをライナは避ける避ける。

それにはやては驚いたように見て

「おお、すごいライナは、体捌きも一流のそれやな。
まさかこんなにもひよいひよいシグナムの剣を避けれるなんて驚いたわ。なんかやってたん？」

「ってそんなこと言ってる場合じゃねえ ええええええええええ
えええええええ

死ぬから！？俺ってば死んじゃうから！！」

そうライナが悲痛の叫びをあげるとはやては笑う。

「あはは、大丈夫やで？　こう見えてその武器は非殺傷設定であつたつてもしなへん……あれ？」

そう言っていると、シグナムの剣がライナをはずし、偶然はやての頬に剣がかかる。

そして、微かに頬が切れた。

それを見て、ライナは最初から、そして斬られた本人は冷や汗を流す。

「あつ、あかん。なんか非殺傷設定やない……ちよつ、シゲナム
剣振り回すのやめやめ!!!」

「ぎゃあ あああああああああああ」

こうして宴会は恙無く続いた。

はやてはシグナムを止めるために奮闘し、ライナは斬られないように避けまくる。

これには居酒屋の店主も苦笑いだ。
主に、いつも通りという事で。
立場がザフィーラから誰か知らない男になっただけだった。
ザフィーラが来なかったのは、恐らくこれを予想していたからであろつ。

sideはやて

「あはは、大丈夫やった？」

そう私が言うと、ライナをこっちに涙目で睨んできた。
あはは、ちょっとやりすぎたな……。
そう思って声を掛けたんやけど。

「……………もうしてこないよな？」

と、少し震えながら、こちらを睨んできた。
あつ、なんか小動物っぽくて可愛いな。
ってアカンアカン、わたしこれじゃSやんか。
自重や自重。

「大丈夫や思うで？ シグナムあのまま寝てもたし」

そう言って机の宴会の席の端っこの方を見る。

そこにはさっきまで暴れまくったシグナムが剣を抱いて丸くなるように眠とる。

こっちもかわええけど、まあ自重やな。

とりあえずはライナや

「で？ 入局考えてくれた？」

「誰が入るか！！」

あはは、当然やな、私もあんなことされたら嫌や。

まあ勧誘はやめへんけどね。

「あはは、でもそれじゃあ、露頭を彷徨うことになってまうよ？
ほら、そのライナの性格やと面接の時点で落ちるの目に見えとる
で？」

「う……」

と、ライナが言葉に詰まる。

ここは後もうひと押しやな。

そうおもとつたらなのはちゃんか声が掛けてきた。

「さっき凄い暴れてたけどなんの話してたの？」

そう笑顔で聞いてきた。

あはは、暴れとつたん見とつたんやつたら止めてくれてもええや
んか……。

私も死ぬかと思ったんやから……。

まあいつものこと過ぎてとめるのも面倒くさかったんやろうな…。

まあシグナムのために念のために言うけど。

ああ見えてシグナム、酔っ払っても危害を加えるのはザフィラとか何でか私だけやし、一般人には手を出したこと無いんやよ。

まあライナには相当危害加えとったけど。

そこまで気に入らんかったんかな？

まあそんなことより今の話や。

「ん？ ライナを管理局にいれようっちゅう話しや」

「ふえええ？ ライナさんをいれるの？ どうやって？

次元漂流者で一般人だよ？」

「そらゴリ押しや、無理やったら何らかの形で協力ってことで手
伝わせる

それに次元漂流者が管理局に勤めるってのも前例に無いわけやないしな。

いけると思うで？」

「あはは、結構本気なんだね……」

と、なのはちゃんは若干ひいてた。

まあ止めへんだけマシやけどな。

ここで止められたら……なのはちゃんとも戦争や……セクハラの嵐飛ぶよ？

とかおもったたらライナはなんかうえーて顔をゆがめながらしんどそうにしまった。

「なあ、何がなんでも入れるきかよ？」

「それはライナの自由やで？ 流石に強制はできへんからな。ほんで入らんのやったら外で探す。

入るんやったら仕事の斡旋、というよりは私の簡単な命令を聞くことやな」

と、そう言うときライナは何か考えるような顔になる。

なんやろ、何を考えとるんやろうな。

面倒事やなかったらええけど。

そうおもったらライナが口を開いた。

「んじゃ、民間協力ってことでどうよ？ そうしたら仕事は極端に減るだろうし」

あゝそう来たかゝいつでも抜けれるってことやもんなゝ

そう来るよねゝ

意外に頭回るんやね、ライナは。

「んゝ出来れば入って欲しいんやけど……まあ高望はできへんか……それに（今は戦力が少しでもホシイシナゝ）」

そう、はやては最後何かをぼそつと言った。

それにライナは顔をしかめ、

「ん？ なんか言ったか、はやて？」

「んゝん、なんでもあらへんよ、どうせなら管理局に入りたいと思わせる内容にしようかな、とか全然おもつとらへんよ？」

そう言ったらライナは

「……………はあ」

ライナは心底疲れた溜息をついた。

なんや失礼やな、溜息は見目麗しい少女の前でするもんやないで？
ん？ なんや？ 文句ある？

……まあええわ、そんなことより、仕事内容どないしよか。
と、おもったらフェイトも話に入ってきた。

「ねえはやて、仕事の話はいんだけどライナさんの寝どことか
ってどうするの？」

「あ、何も考えとらへんかった……んーどないしよかな……」

しもたな、そこ考えて無かった。

うーんどないしよ……。

そう考えとったらフェイトちゃんとがなのはちゃんとなんか相談
してる

「あつ、じゃあ……………で、なのはどっ思う？」

じゃあはやて、こんなのどう？」

そんで提案してきた。

二人とも笑顔や。

たぶんこの展開はあれやと思う。

「じゃあ私達の家を……………」

「それはアカン」

「貸したら……って早いよ！」

何をいつとるんやろか、この子は、ライナとかどう見ても同年代かー、二個は上の男やんか。

この歳の男はあれ、肉欲の虜やよ？

すぐにオオカミの本性あらわすんやよ？

フェイトちゃんみたいな子は襲われるんや！！

的なことをフェイトちゃんに言っと、ライナは不満そうな顔しながら襲わねえよ！！とか怒鳴った。

分からへんよ、何かの拍子に理性が外れるかもしれへん。

フェイトもなのはもかわええからな。

……でもまああれやね、管理局でも皆に憧れられる美女に囲まれてるのに何の反応もしないライナは意外に大丈夫かな？

とか思ってたうけどあかん。

男はオオカミや。

でも、大丈夫そうな気もするけどな……。

でもアカン、考えるのが面倒くさいけど女の子と一緒に部屋なんか……

「でも……管理局の寮も仮眠室もいつでも満員だし……他に場所なんてないよ？」

「あう」

そうなんやけど、どないしよかな……。

人手不足な管理局は常に管理局に居る人も多いから仮眠室はいつも満員やし、寮も直で仕事場に行けるちゅう事で、大抵は寮に入ってるから、もうあいてる部屋とか全然ないし……。

とはいっても普通のマンションに住まわすこともできへん。

一応ライナは次元漂流者で、暫くは監視対象でもあるからマンシ
ョンを借りるとしたらそれが解かれるまで無理や。

これ、ほんまに誰かの部屋に同居させなアカンな……。

どないしょ……。

困ったわ……。

さたでーないとふいーばー（後書き）

数少ないこの小説ファンの君へ、アンケート

？なのは達の部屋へ泊める

？八神家へ

？どうにかして寮へぶち込む

？自由意見

ライナ、家が決まる（前書き）

前衛芸術的発想

クロノ×ライナでいこう

もしくはファイーラ×ライナ

ねーよ

アンケート結果

1が三票

わーぱちぱち

2が2票

イヤッハー

2が一票

にゃんにゃらりん

4 牢屋で寝泊まりが一票でございます

アンケートご協力感謝でございます

問 結局ライナって受け身なんだね

ライナ、家が決まる

side はやて

うーん……私の家って言っても、皆おるし無理やな……。
フェイトちゃんの案は……確かに願ったり叶ったりなんやけど……
……、ほんまにええんかな……。
主に男女が同じ部屋における的な意味で。

「ねえはやて、やっぱり、他に案も無いんだし私たちの部屋でいいんじゃないかな？」

「……………だめ？」

「うーん……………まあ、じゃないな。なんでかフェイトちゃんも乗り気な見たいやし、頼むわ」

「うん、任せて」

ほんまになんでそんなに乗り気なんやろか……。

顔も、どこか遠くを見るかのようにライナを見とるし。

フェイトちゃんはライナに何か見たんかな？

それとも惚れた？

……………それは無さそうやな……………たぶんそうやったらもっと分かりやすい反応しとる思うし。

うーん……………でもまあこれで何とかなるやろうけど……………まあ心配ちゃ、心配やな。

て、あつ！ 大事なことわすれとつた！

「あつ、ライナ？ ライナは魔法とか見たことある？」

「……………ないけど？」

何やその間は。

「でもそうかあ。ほんならライナに魔法を叩きこまなアカンな。やないとAAAが無駄や。

で、頭の方は……………まあ回りそうやな……………意外やわ……………」

「えー特訓させられんの？……………つて、んあ？なんで俺が頭いいってそんなことがわかんだよ？」

ライナが不思議そうに言うてくる。

そんなん……………きまつとるやん……………。

そう思いながらライナを私は見る。

とりあえず今のライナは、なんや機械とかコンピュータの類が珍しいんか分からんけど、すごい勢いで空中に浮かんどるモニターに触って将棋しとる。

しかも、その将棋は

「そんな激難将棋を圧倒的勝利で飾つといてなに言うтонねん。それ、管理局でも難しいってので有名な将棋なんよ？」

そう、管理局でも頭の凄くいい人間にしかできない類の、ものごとつ難しい将棋のゲームをライナは勝利でかざつとる。

それ見て頭良くないとかどうせえゆうねん。

そうおもとつたらライナは物凄い言葉を返して来よつた。

「んあ？これ初心者用とかじゃねえの？さっきお前らが話しこんでる時間暇だったから、シャマルとヴィータに教えて貰って今

ルールしたばっかなんだげど？」

「……は？」

え？　なんていうたん？

そうおもとつたらシャマルとヴィータが驚いた表情で私にいうてくる。

「え、えつと……頭が良いのは確かなんじゃないでしょうか……？」

「うん、普通に頭はいいと思うぜ？」

と、ヴィータとシャマルは若干引き気味に驚いていう。
そんでなのはたちも

「凄い……頭いいんだね、ライナさん」

「ふえええええ！！　それ、できちゃったの！？」

画面を見て驚いてた。

なのはは特に驚いてる。

何回も挑戦して負けまくってたもんな……。

しかしこれは……ライナは実はもの凄い人材やないの……？
AAAつても十分すごいんやけど……。

……これはあれやな

「当たりくじ買ったら、一等、二等を連続で当てた気分や……ふ

つ
ふ
つ
ふ。

これは……ええ買い物したで……。やっぱり私の目に狂いは無かった!!」

まさに一挙両得や。

これは何としても管理局に入局して貰わんとアカンな!!
そんで私の課に……。

ってそれよりどうやって民間協力から入局まで持っていくか……
それが問題やな……

主に公的とライナ的に。

ライナ的にはどうにもでもなりそうやけど……公的にはどうしよ
……学校からはじめるのは流石にな……ってあ! こうすればええ
やん!! 　　ふ
つ
ふ
つ
ふ

そうして、はやては、色々思いついたのか、黒く笑った。

「ふ
つ
ふ
つ
ふ」

はやてが黒い顔で笑い、なのはやフェイト、シャルヴィータが
ライナに驚いている時。

とりあえずライナは、それらを見無視し、シャルとヴィータに、
PCについて、この空中に浮かんでいる画面はいったなにがどうな
っているのかを聞いてみた。

「これってどうやってんの？　ってか、これは何でできてんだ？」

と、ライナは、多少ある研究者としての血が騒いだのか、そのモニター、PCについて聞いてみた。
するとシャルは

「えっと……機械にも色々と分野があるので私には触りくらいしか分からないです

デバイスならそれなりにいけるんですが……」

と、困ったように答え。

ヴィータは、目を泳がせながら

「ああ……ちょっと分かんねえ……今度技術班紹介してやろうか？」

などと言って逃げた。

とりあえずライナは二人の言葉に、シャルには「別に良いよ」と、ヴィータには「今度頼むよ」と答え、とりあえず画面を触り、コンピュータがどうなっているのか、わくわくして調べながらインターネットを利用している。

当時、ライナが魔法を習う時も、こうだった。

とりあえず先に一つ言おう、ライナ・リユートは魔法の天才だ。

孤児であったライナが六歳の時、軍に無理やり連れいかれた場所は、とある施設であった。

そこにジェルメと呼ばれる女軍人——先生——がいた。

ライナ、そして、その施設にライナとは別の理由だが、同じく入れられたペリア、そしてピアが、その女軍人、ジェルメに、訓練と言つ名の地獄（愛）を持ってしばかれた。

子供であるなしは関係ない、文字通りの血反吐を吐く身体能力、魔法展開技術、魔法の数量上昇の訓練、そして一日一五分の睡眠だけという極上の愛を持って叩きあげられた。

まあそのせいでライナは反動でめんどくさがり＋眠たいがりになったのであった。

話を戻そう。

そしてそういった訓練の、唯一の休憩時間といってもいい、魔導書を読み習熟する時間。

寝れば殴られ無理やり本を読まされる時間だ。

同じ仲間のペリアは寝てしまい、ジェルメに殴られていたが、いい思い出……とは絶対にいえないが、それなりの思い出だ。

とりあえず彼、ライナ・リユートは、その時の魔法を学ぶ時間が一番楽しく、わくわくする時間でそして——魔法の才能が開花

した時間であった。

ライナは見るそこには自分が見たことも無い理論があることを。

ライナは覚える、自分が知らない魔法を。

ライナは知る、自分の知らない魔法の知識を。

それを見るだけで、学ぶだけで、わくわくする。

知識を貪欲に、そして楽しみながら蓄えていった。
それが6歳のころである。

そこからだ。

魔法の勉強を始め、圧倒的な知識と血反吐吐く訓練による魔法使用のなれ。

どのようにすれば簡単に魔法を出せるのかという想像。

そこからだ。

ライナは魔法の天才としての花を開かせたのは。

血反吐を吐く訓練による術式展開速度の圧倒的向上。

魔法を覚えれば覚えるほどあがる実力。

半年もあれば、一般の軍人程度ではライナには勝てなくなった。

そして半年もあれば、ライナの魔法を弄る技量は日々の魔道書の勉強で超がつくほどの天才になっていた。

その天才である理由。

それは、単に魔法の構成が読め、人よりはやく習熟できる複写眼だったからではない。

それだけでは、魔法の構成が読めてコピーができて、パソコンで言う単に文章をコピーするだけの作業にすぎない。

だが、ライナは、純粹に天才で、そして、自分で弄るだけの知識を蓄える学者の様な頭、研究熱心さがあった。

まあ、施設には模擬戦で負ければ睡眠時間が削られるという恐怖もあり、これ以上睡眠量を減らされると死ぬレベルなのでがんばったともいう。

そしてライナは今も、魔法に関してだけは暇があれば、というより起きていてやるのがなければ適当に魔法を作ったり、弄ったりしている。

それがライナだ。

そのライナが、機械技術というものに興味を持った。

そして、今、それを学ぼうとしている。

一年で魔法の、魔法使いの業界における技術を、ほぼ体得したライナだ。

機械技術も、下手をすれば一年で身につけるかもしれない。

ライナは、画面を見ながら、モニターを弄る。

まるで幼児がおもちゃに触るかのごとく楽しそうに。

そうして、そうこうしている間にもライナは

「へえー良く分かんねえけど、文字がこうも簡単に打てるのは便利だな

んーちよつとこれ、欲しいな」

どんどん知識を溜めていきながら、PCの魅力というより機械の魅力にはまっていく。

そうして、ライナが、のめり込んでいると、声が掛かった。

「あはは、そんなに興味があるなら今度買ってあげようか？」

と、なのはが笑顔で言ってくる。

それにフェイトも

「うん、そんなに楽しそうに触ってたら、なんか、プレゼントし

たくなるね」

と、こちらと同じく、まるで弟を見るかのように、微笑ましく言う。
まあ、どちらかと言えば、ライナの方が二人より一つ年上なのだが、二人の方が大人に見える。

まあ言わずとも分かる通り、性格的な成熟の違いだろう。
主にライナのめんどくさがりと、わがままなだけだが。

そしてライナは、二人の言葉に

「うおっ、いいのか？ ラッキー！。

って言ってもまじにいいのか？ 俺ってば居候だぜ？
そこまで世話になるのも悪い気がするんだけど……」

「いいよ、新しく仲間になるんだし。ある意味就任祝いかな？
民間協力だけど、にやはは」

そう言っただけは笑う。

それにライナは

「そうか？ そりゃ悪いな。んじゃ遠慮なく貰うよ。フェイトも
ありがとな」

「うん。別にいいよ。あつそれよりライナさんの服とか買わなく
ちやね。明日、なのはも私も、なんかちょうど非番だし、三人で服
買いに行こうか」

「んあ？ いいのかよ？ 服なんて別に良いぜ？ 高いだろ？」

と、ライナはローランドにいたところの感覚で、服の価値を考える。
ローランドでは、服は圧倒的に高いのだ。

庶民の娯楽にはなりえない。

金持ちの、貴族の娯楽なのだ。

だから、庶民には服を着まわしたり何日も着るのは当たり前。

だから、そうライナは気を使って言った。

すると、なのはと、フェイトは、ライナの世界を事情聴取で聞いていたのか、それにたやすく想像が行き、すこし苦笑いして。

「大丈夫だよ。男物ってそんなに高くないのも多いし。それに、ライナさんがそんなに着飾ると思えないもんね。だからスーツと、適当な服とか下着とか買っただけでそんなに高くつかないと思うよ？」

「うん、だから安心するといいよ」

と、フェイトとなのはは言う。

それにライナは、この世界では確かに高い服はあるのだろうが、安いのも沢山のあるのか、と思い。

それに、この世界は清潔に煩そうだし、服とか沢山あるべきで、色々綺麗にするものなのかな？

と思い納得する。

そしてフェイトは

「それに、ライナさんを買ってあげるパソコンの方が高いよ？」

「んえ！？ そうなの？ ーでもそうか、こっちのがこっちゃんもんなー。んーそりゃ悪いことしたな」

と、ライナは価値観の違いに驚きながら、しかし感謝しながら遠慮なく貰う事にした。

ライナは図太かったのだ。

そして、色々と家のこととかの話をしていると、

「あーはいはい、そう言うのは後、後、今日はじゃんじゃん飲む日やで」

「そんな話は後や」

と、はやては宴会の空気を戻すようにお酒を進めてくる。
未成年……ってのは通用しないようだった。

ローランドの世人年齢的にはライナは平気ではあったが。
はやては、ライナにビールをぐつと押しつける。
それにライナは

「んーまあ、ちよつとならいいかな」

と、飲む。

「へーこりゃ、ローランドの酒より全然うまいな」

そう言っただけでライナは感心した。
すると、はやてがまたビールを押し付ける。
それにライナは嫌な顔をした。

「いや、俺ってばそんなに飲めないんだけど……」

そう言っただけで、はやてが、怪しい笑顔で、

「なに言ってるん！　こういうんは、ほら、焼き鳥とビールで一緒にやってみい」

と、焼き鳥とビールを押し付ける。

それにライナは嫌な顔をしながらも一緒にぐいつとやると

「……はあ、俺ってばそんなに飲めないのに……おお!? こりや凄いうめーな。
なんだこりや」

「ふふん、これぞビールと食べ物物の魔力や」

「これならいくらでもいけそうだな」

と、ライナは嬉々として、とりあえずもう一杯のビールを呑みつつ焼き鳥を食べる。

そして

「んーおいしいけど、俺ってば酒弱いからこころ入んで……」

「あはは、なにいつとんねん。まだまだこれからやで……ひっく。じゃんじゃんいこか!」

「うえ?! お前よ酔ってんじゃんか!」

「あはは、よつとるでーやから、ほら、じゃんじゃんいこつ!」

「はやて、そこまでにとこ?」

「そうだよ、ライナさんもそんなにお酒強くないんだっていつてるし……」

と、フェイトが加減するよつに言つが、
飲んだくれは顔を赤くし笑いながらコップを持ちながらビシッと

フェイトに

「なに言っとんねん、なのはもフェイトも全然飲んでへんやん〜！」

それにヴィータもシャルもほら、ついだからどんどん飲みや〜！」

『あう』

と、結局ライナ達はやての絡み酒に付き合わされた。
そして、長時間、皆が皆、はやての絡み酒に付き合わされた。
そして、

「うえっぶ。だから俺ってば酒はそんなに強くないんだって……」

「あはは、私も結構きついかも……」

「……もう、むりだよ」

「はやれーむりー」

「あはは、はやてちゃん、テンションが上がっちゃってますね。
ライナさんを捕まえたのが嬉しかったのかしら。え？ 私ですか？
まだまだお酒はいけますど……？」

と、上からライナ、なのは、フェイト、ヴィータ、シャルの順に酔い潰れ……いや、ひとり平気なのもいるが、酔い潰れかけていた。

そうして、当の潰しかけた本人は、

「すー……すー……」

潰れていた。

そんなにはやてはお酒には強くなかったのであった。

そうして、宴会は、死屍累々の様相を呈しておわった。

「はやてちゃんが迷惑かけてごめんね」

「少しは世話になったかな、それでいいよ」

「にやはは、大丈夫ですよ。足取りがふらふらになったただけですから……」

「それって……あんま大丈夫じゃないね……うう……」

「すー」

「すー」

と、ヴィータも潰れたのか、可愛らしい寝息を立てて寝ていた。そして、シャマルがはやてとヴィータを見て。

少し困った顔をして、

「このままザフィーラが来るのを待ちますので、お先に帰っていただいて構いませんか?」

と、シャルが言い。

それに、なのはが、頷き。

「そうさせてもらおっかな……。ちょっと飲みすぎちゃった」

「うう……もう飲みたくないよ……」

「ん……ふわぁ……俺も眠たくなってきたしね」

そう言って三者三様の言葉で立ち去ろうとし、
フェイトは机に突っ伏しながら呻きをあげた。
つらそうな顔で、

「うう……なのはぁ……なんか立てない」

「あらら、じゃあライナ君。お願いできる？ 男の子だもんね」

「んぁ？ ……めんどくさいけど、まあ色々借りもあるし仕方ねえか……」

と、ライナはフェイトを持ち上げ、おんぶする。

大きな胸が、ぎゅっと、ライナの背中に当たるが、ライナは少し
気になっただけで無反応だ。

そして、当のおぶられたフェイトは、顔を赤らめ……なく。
余裕がないのか、呻きながら謝った。

「うう……ごめんね、ライナさん……」

「ああ……まあ別に良いよ。んじゃ、さっさと行こうぜ？」

とライナが言い、なのはが頷いて

「うん、そうだね。それじゃあ家はあっちの方角だよ」

と、ライナはなのはに連れられ、飲み屋から立ち去る。

そして、出ていく時に、店の入り口でライナがなのはに何か言われていた。

「さわんねえよ！」とか言っているのが聞こえるが、話の内容がなんなのかは、分かりやすすぎるな、とはやては、薄目で見ていて苦笑いしながら思った。

そして、はやては、薄目でライナを見ながら思う。

少し、目つきを鋭くして。

（AAAで戦力が欲しいってのは本音やけど、建前や。

ライナを調べた時に、一瞬だけ、リンカーコアの数値がSランクオーバーを軽く上回った。

それが、なんなのか、興味あったからや。

それに……）

と、はやては、酔いで、眠くなる眠気を、受け入れながら思う。
ゆっくりと瞼は落ちる。

（らい……なの……あの薄い……五芒星の瞳は……なん……
なん……？）

と、はやてはそこまで思って意識を手放した。

はやてが偶然見つけたライナの瞳。
瞳の奥の、微かに見える五芒星。
見つけたのは偶然だった。

シグナムに斬られかかる時のライナの瞳は、その時微かに輝いた。
まるで何かに反応するかのように。

そこに見たのは、五芒星。

瞳の奥に淡く光る五芒星。

あれが一体何なのか、と思う。

とりあえずシグナムに、そのことに気付けたことを感謝しながら、
はやてはシャルムの腕で寝た。

そして……

「あはは、シグナムとヴィータちゃんを任せちゃってごめんない」

「まあ、こうなることは予想できてた」

と、シャルははやてを背負い。

ザフィーラは、シグナムとヴィータを、マグロのように抱えて持ち帰ったのだと言う。

ザフィーラは、心底行かなくて良かったと思った。

主に、酔い潰れると言う意味で。

ライナ、家が決まる（後書き）

答え 受け身だね。このころは。

まだまだ人を信用しきれないライナ。

人を信用し過ぎるのを恐れるライナ。

裏切られ、蔑まれ、侮蔑されるのに慣れ、しかし、孤独だと、寂しいと叫ぶ。

複写眼のせいで人を傷つけるのを恐れるライナ。

しかし、孤独は苦しいと、一人は寂しいと、誰か助けてと。

一人で叫ぶ。

そんなライナ。

ですね、今のライナ君は。

さて、ライナの心を開くのはどのヒロインか！！

それとも全員で開くのか！！

それともハーレムの意味で全員になるのか！！

いや、ハーレムは無理だな。

ライナの的に。

絶対そんな器用じゃない。

いや、ライナは心が広いし、優しいからいけるかも……

一つ言えるのは、ヒロインはまだ決まって無いつてことだ。

皆可愛くていい子で決められないってのが一番だけどね。

クロノ……

ない

番外話 君といるはずの友（前書き）

シオン・アスタールの物語

あ、質問があれば受け付けますので遠慮なく聞いてくださいね。
今回からの話ではなく前話のもおkです。

あと、今回の話、今までよりすんげえー短いです。

ご容赦を

あつ、あとP V 1万超えました。皆さんには感謝です！！
今後ともよろしくお願いいたします。

稚拙な文ですが、皆様を満足させられるよう頑張らせていただきます。

問 シオン・アスタール

番外話 君といるはずの友

冷や汗が止まらない。

息が乱れる。

心臓が、締め付けられる。

どこの牢屋を見ても、国中を部下に搜索させても、どこにもいない。

彼、シオン・アスタールは、泣きそうになる気持ちを抑えながら、ライナのいたはずの牢屋を見て、呆然とする。

ライナ・リユートが失踪した。

その話を聞いたとき、ライナのやつは何を自分で立場を悪くしてるんだと、そう思い、見つけたとき、どんなお仕置きをしてやろうかと、フェリスと話し合った。

フェリスは、剣で叩き切ってやれといい、それにシオンはいいね、と無駄に話を盛り上げていた。

シオンは思い出す。

伝令が入ってきて、自分が顔を渋くしたことを。

どこにもライナらしき存在はないと、そう報告が入ってきたからである。

そして、もうひとつ、報告が入ってきた。

ライナのいた牢屋の看守も、失踪していたことを。

……していたというのはどういうことだ？ と、伝令に聞いたところ、

その看守がルーナの国から帰ってきたのだという。

そこからどう失踪に繋がるのかと聞くと、その看守はライナが消えた日に、番をしており、その日、ライナと一緒に消えた、というのである。

それを聞いたとき、シオンはその看守を急いで呼び寄せた。

呼び寄せた看守にライナのことを伝え、事情を聞こうとしたところ、その看守はなみだ目でライナのことを語った。

自分を、王を前に怖がっているのではなく、ライナが見つからないことに悲しみを覚えているのが、よくわかる。

あいつは、こんな身近な存在にもすかれる、馬鹿で、良い奴で、優しい奴なんだと、そう、シオンは思うと同時に、看守の言葉を聴く。

看守はなにか、おかしいことが起きたという。

黒い数珠が、なぜか牢屋に落ちており、それを拾い確かめても何かわからず、ライナにも見てもらうと、するとライナが持った瞬間に、なにか、数珠に異変が起きたらしい。

その数珠は妙に綺麗な音楽を鳴らし、そして強烈な光を放ったという。

その光は一度は収まったものの、また突然光り始め、今度は牢屋全体を照らし始めたらしい。

その話だけでもう、わけがわからないのに、看守は次に驚くべきことを言う。

そして気づいたら、看守はルーナにいたのだという。
そこが、まずわからない。

空間転移の魔法など、存在しないし、今の時代ではできないとい
われている。

空を飛べる魔法がないのだ。
空間転移など、夢のまた夢であろう。

しかし、その空間転移が看守が言うには、起こったのだという。
そして、そこからライナの行方も知らないのだという。

そこまで聞いて、シオンは必然的に思った。
ライナもどこかに飛ばされたのではないかと。

しかし、同時に思う。
手で触れていない、若干距離のあった看守ですら、ルーナに飛ば
されるほどだ。

なら、直接触れていたライナは？ と、そう思う。

この大陸のどこかにいるのならば、いつかライナはもどってくる
かもしれない。

だが、もしかしたら、あの女神たちのいる世界のようなところに
飛ばされていたら？

もしかしたら、この大陸ではなく、あの砂漠を越えた場所に飛ば
されていたら？

そうシオンは思い、恐怖する。

そして、それとともに安堵もする。

確かに、友を失うのは、恐ろしく怖い。

自分が一番の友だと思っているのはライナのだ。

だから、それが消えるのは、とても怖い。

だが、それと同時に、いつか、そう、いつか、自分がライナを喰

らうかもしれない。いつかがなくなったことに、安堵する。

シオンは見る。

ライナのいたであろう、牢屋を見つめる。

顔は、悲しみと、喜びで、ぐちゃぐちゃだ。

シオンは、どこか道化のようで、どこか、壊れた人形のようであった。

そして、足取り重く、牢屋から立ち去ろうとしたとき、シオンは牢屋の隅に置かれている紙の束を見つけた。

それをとると、シオンは目を見開いた。

そこに書いてあるのは、ライナの願い。

ライナの思う、みんなの幸せ。

そして、優しいライナの、叫びだった。

それを見て、そして、文章を読み進めて。

シオンは決心する。

ライナが、いればいるに越したことはない。

友達がいないのは、苦しいから。

でも、いないのなら、もし、帰ってこれないのなら……。

「ライナの……夢をか叶えられるような、王に……」

その瞳には、まだ、ない交ぜの心が宿っていたが、しかし、その瞳は曇ってはいない。

前に進む決心はした。

勇気を、ライナからもらった。

なら、進むしかない。

ライナの搜索はやめないが、固執すぎて、前に進めなくなるのはいやだから、前を向く、前へ進む。たとえその道が、終わりのな

い苦痛の道でも、人を、皆を救えるのなら、それでもいいと、そう
思う。

だから、シオンはその紙束を持って自室に帰る。

その足取りは、重くはなかった。

番外話 君といるはずの友（後書き）

答え

シオンはあれ、強いけど弱い人間ですね。

人を切り捨てれる王ではあるが。

切り捨てるのに、必ず悲しみを覚える、優しき王です。

ここからはネタばれですが。

彼がいろいろな国に戦争を起こすときも、最小の犠牲ですむように圧倒的速さと圧倒的力で征服しました。

戦争のときすら、人の命を軽んじない、王たる王ですね。

ちなみにガスタークとかの王は、あれ、あのグローヴィルが無ければただの雑魚だよね？ と、なんかいか思ったけど、レファルの性格は嫌いではありませんね。

ただ、殺し方が派手ですが。

なんだよ、一振り何十万の人間が死ぬとか……。

の割には代償小さいし……。

あの剣強すぎね？

ライナのすべての式を解くものとか一番大切な人の死とかなのに。

代償小さくね？ とかすげー思いましたが。

それがあの剣のメリットなんでしょうね。

すげーつえー

でも剣を復活させるのに自分の村の人間を何十人と生贄に捧げなければいけないのは悲しいね。

まあ悪く言えば、それだけであれだけの力を振るえるわけだからすごいね。

つてか今回の話、シオン全然しゃべってねええええええええええええええええええ

ええええええええええええええええええええええええええええええ

迷子の迷子のライナ君（前書き）

足音が聞こえる。

どこからか、足音が聞こえる。

それは大きな音で、ただどこここではない、どこか違う世界の音。終わらない足音に青年は怯え、前を見ない。

瞳に忌み嫌われた魔眼を持ちし青年は、前を見れない。

そして、いつしか足音は、すぐそばに迫り、そこには――

問 見つからないもの

迷子の迷子のライナ君

「———っはぁ！……はぁ……はぁ」

ライナは、朝、窓から光が顔を照らしあげる中、あまりの息苦しさに目が覚めた。

それは、暗闇で嘆き、身動きの取れなくなる夢。それは、前を向けずに、何かが向かってくる夢。

それが怖くて、目が覚めた。

「はぁ……はぁ……っんだよ……あんな夢、最近じゃ見なかったはずなんだけどな……」

そういつて、ライナは冷や汗で濡れた服をそのままにし、ベットから起き上がる。

ライナは窓の外を見て、一度ため息をつき、

「はぁ……こうだもんな」

外には、見たこともない建築仕様の家。

見たこともない鳥。

見たこともない服を着る人。

見たこともない、機械と呼ばれるもの。

それらを見て、ライナはもう一度ため息をつき、

「はぁ……夢なんかよりこっちのがめんどくせえよな……」

これからどうすんのよ？　って管理局ってところで働くんだっけ？
めんどくせえ……」

そうライナはため息を吐き、この家に来た経緯を思い出す。

ここはなのはとフェイトの家だ。

昨日、居酒屋と呼ばれる酒飲み屋でなにやらいろいろと話があり、
なんやかんやでこちらの家に来ることになり、なんやかんやで酔い
つぶれたフェイトを背負ってこの家に来たのだ。

ちなみにライナの部屋はフェイトとなのはとは当然違う部屋だ。

それでも結構な広さがある部屋なので、不便はない。

むしろ居候に、しかも怪しいやつを扱うのにはやりすぎじゃねえ
の？　と思うくらい、扱いのよさであった。

ライナは部屋の隅においてある、リモコンを触る。

最初見たときは、驚いたものだ。

モニターに動く人が映し出されている。

インターネットを触ったときには、たまたまそんなものを見る機
械がなかったライナはたいそう驚いた。

「でもまあ……ここじゃ普通なんだよねーローランドとの違いが
すげーよな、ここ」

と、ライナはひとつ苦笑いし、

「あゝ久々に早く起きちゃったから俺ってばまだ眠いんだよねー
もっかい寝よつと」

まあ早起きといっても普通の会社員ならとっくに皆出かけるような時間だが……。

そうしてライナが二度寝をしようとする、そこに待ったをかけるものがきた。

扉をコンコンと、ノックする音が聞こえる。

そして、すぐにライナさん起きてる？ と少女の声が、扉の向こうから聞こえてきた。

それにライナは眠そうに答える。

「んにゃゝ寝てるよゝ」

「って起きてるじゃないですか!?!」

少女は、突っ込みながら扉を開けた。

そして、その少女は、黄金の髪を目を反射させ煌かせながら、

……もう』、と、若干のため息を混ぜながら、入ってくる。

「どうしてそう、嘘をつくのかな……」

そうため息をつきながらいうと。

ライナはさあ？ と首をひねり答える。

「めんどくさいから?」

「今のどこにめんどくさい要素があつたの!?!」

と、金髪の少女フェイトは、朝から疲れた顔をする。

どうにも彼女はライナを前にすると反射でつつこんしまうようだ。主にライナの標準が天然ボケ属性つてのもあるのかもしれないが。

とりあえずフェイトは、気を取り直してライナに昨日言ったことを言う。

「そろそろライナさんの服とか買いに行こうと思うんだけど、どうかな？」

「んあゝ？ 早くねえか？ 俺ってば昼迄寝ときたいんだけど」

「ダメ、そういうと思ったから朝にしたんだよ。ライナは最初に会ったときから怠惰だったから、ここで少しは直しとかないと。」

それに私もお酒のせいで頭痛いんだから、お相子だよ」

と、フェイトはメツと、人差し指を立てていう。

それにライナは直されんの？ めんどくせえな」と頭をかきつつ思いながらも、フェイトの言葉にしぶしぶ従った。

ただ、その顔は睡眠が不足しているせいかあまりに見るに耐えない。

しかしフェイトはそんなことは気にせず。

「それになのはも、もう用意してるんだから、あとはライナさんだけだよ？」

といい、窓の外を指す。

それにライナは、外の光景を見て、なにやら変な四角い物体になのはが乗っているのを見る。

あの四角いのが何なのかはわからないが、昨日外を見て、あれが移動するものとわかってるライナは驚くこともせず、めんどくさそうに。

「はあ……俺は一日50時間寝てなきゃいけないのになんでこんな朝早くから……」

「文句は後で聞くよ。あと一日は24時間。ほら、いくよ」

といい、ライナはフェイトに引きずられるように外に連れ出された。

車の乗り心地といえば、馬車よりは何倍もマシで、早かった。景色は流れるようで、馬車よりぜんぜんはねない。道が整備されているのもあるのだろうが、車の性能のおかげでもあるのだろう。

とても静かなエンジン音に、走行音。そんな静かなドライブだ。もちろんライナは……

「うん……むにゃ……」

寝ていた。

あまりに普通に車の座席が柔らかくて気持ちよかったのだろう。入ってすぐに寝た。

この程度予想は流石に会って間もないのはたちにもいくらでもできたが……。

まあ流石にくっ笑した。

そうこうして、この調子で30分。

管理局員達もそれなりに使う、デパートについた。

このデパートの名前は『アストラル』。

名前の由来は魔法使いが、魔法使いらしくあるためとか何とか言われているが、結局は誰も知らないなぞのデパート。裏では魔道師のレンタルをしているとかどうかの噂もある、陰陽師の格好とか巫女の格好の少女がいるとか、噂もあるが、まるつきり噂の域を出ないので、誰もその噂は信用しないよう。

そんな、話だけ聞くとへんてこなデパートに、三人は着いた。

「……………むにゃ……………」

「あの、ライナさん。 つきましたよ?」

そう言って、ライナに声をかけるが、無反応。
それになのはは苦笑いする。

「あゝやつぱ起きないね……………予想はできてたけど……………」

そう言って、なのはは後ろの後部座席に回り、ライナをゆする。

「ついたよライナさん。 起きて」

と、ライナの首がぐんぐん揺れるが全く起きない。
なので仕方なく、なのはは強硬手段をとる。

その名も

拳骨

——ゴッ

.....

.....

.....

『アストラル』は、中々の盛況振りであった。

今日は一般的に言う休日であるためか、人は沢山おり、少しでもお互い目を離せば、見つけ出すのに苦労するほどの人の多さであった。

そんな場所で、ライナは頭をさすりながら、だるそうにフェイトとなのはの後ろについていく。

デパートがどういふところかわからなかったり、勝手が分からなというのもあるが、ただ単純にだるいし面倒くさいからだるそうにしているのである。

それになのはは、笑顔をライナに向けて。

「もう、なんでそうめんどくさがりかな……怒るよ?」

「まあまあ、なのは、落ち着いて。ライナさんも……あんまり擁護する言葉が見つからないけど、悪気があるわけじゃないし……」

「……それでフォローしてるつもりなの?」

「……あうう」

と、なのはとフェイトは仲良く漫才していた。
流石9歳の頃からの親友である。

……別に関係ないな。

そして話の中心人物といえば……。

「……あれ? ライナさんは?」

「……居ない」

迷子になった。

ライナは、だるそうになのは達に付いていつていって、いつのまにか人の流れに飲み込まれ、離れ離れになった。

ただまあ、ライナは別段困ったような顔はしておらず、眠そうに適当に歩いているのだが……。

「んふあゝ……んーなんか面白いものでもないかなー……ってお？　なんか面白いもの発見」

といって、ライナは電気屋を見つけた。

そこには、多種多様の電化製品が売られていた。

小型の空中にモニターを浮かばせる携帯電話のようなもの。

冷蔵庫。掃除機。マッサージチェアと、色々興味をそえられるものはあったが、ライナの目に付いたのは、その電気屋の隣、一般販売されているデバイスショップである。

リンカーコア自体、才能によるものがあるせいかな、デバイスのコーナーはそれほど広くはなかったが、しかし、品揃えはよいようだった。

なぜなら自分で自作できるようにパーツがおいてあったり、店に依頼を出せばメンテナンスや、デバイスの作成、取り寄せ（パーツも含む）など色々できるようになっている。

これが、管理局員がこのデパートに来るひとつでもある。

まあ普通に買い物したいというのが8割だが……。

とりあえずライナは、寝癖でぼさぼさの髪を、少し掻いて、欠伸をしながら店に入る。

店の店員は、そんなライナを見て、買う気あんなのかこいつ……てきな視線をするが、ライナは一向にきにしない、むしろ気にするの

が面倒くさい、といった風だ。

「おっなんだこりゃ」

そう言つて、あるコーナーの前で、ライナは興味深そうに止まる。それは、インテリジェンスデバイスのコーナー。

そのデバイスの横にあるテロップ——なぜか別の世界なのに読める——を見る。

そこには、こう書いてあつた。

『あなたのサポートをする人工AI。

あなたの性格を読み、あなたの考える行動をいの一番にサポートする必須アイテム!!』

などと書いてあつた。

それをみて、ライナは人工AI？ と、首をかしげる。

そして思い出す。

サーポーと……機械が？ なんだそりゃ？ と考え。

そして思う。

そついやシグナムの剣が喋つてたな、と。

「ふーんあれみたいな感じか？ 今度聞いてみるか……ってうおおく！」

「あう！」

と、ライナがその説明文を読んでいると、何かにぶつかった。

ライナは勢いよくすぐ横の壁に顔をぶつけ、何故かすぐそばで少女もこけていた。

おそらくぶつかったのはこの少女であろう。

「あいたた……んあ、わり……」

と、ライナが言おうとしたところでぶつかってきたほうが慌てて謝る。

「うわわわわ、ご、ごめんなさい！！　ちょっと興奮して前、ちゃんと見てなかったから！！」

そういつても聞いてないのに勝手にぶつかった経緯を話し出す少女。

そう、ぶつかってきたのは少女だった。

それも、中々に豊満な胸を持つ青の髪の少女だ。

しかし、ラフな格好をしているのでは？と見は男の子のようにも見える、ボーイッシュな少女だった。

それにライナはピンとくる。

そして

「んにゃ、別にいいよ、じゃね」

と、ライナはなんでもなさそうにそういい離れようとする。

嫌な考えが頭をめぐったからだ。

そう、考えはこうだ。

なんかめんどくさくなりそう、だ。

だから、すぐにでもそばを離れようとする、が、

——ガッ

服の袖をつかまれた。

「……なんで掴むのよ？」

「えっと、その、謝っていないので」

「……謝ったじゃん」

「あつ、いや、その、謝礼を……」

「別にいいよ」

「いや、そういうわけにも……」

「いや、だから……」

「でも」

「だか……」

「でも」

「あう……」

ライナがあまりのしつこさに、もむ半ばあきらめて仕方なしに謝礼でも何でも受け取ってさっさと逃げるか、と思っていると、別の女の声がかかった。

それにライナは助かったとそっちに顔を向ける。
するとそこには新たに少女がいた。

「スバル。その人困ってるじゃない、無理やりは相手を困らせるだけよ」

「あつ、ティア！」

と、スバルと呼ばれた少女は、パツと顔を太陽のように明るくし、ティアと呼ばれた少女の場所に行く。

おそらく彼女の中で、一瞬ライナ存在は忘れ去られたであろう、と考えられるくらい喜んだ顔である。

それにライナは、今のうちにと、移動しようとする

「あつ、ちよつと待ってください」

と、今度はティアと呼ばれる少女がこちらに声をかけてきた。それにライナは仕方なしに顔を向ける。

「……………なによ？」

「いえ、連れが迷惑をかけたようで、すみませんでした」

「いや、別にいいよ。んじゃ、俺はこれで失礼するね」

「あつ、はい」

と、ライナはそのままデバイスの店から出る。

なんとか面倒なことにならずにすんだと、ライナはため息をつく。謝礼とか面倒だからどうでもいいのに、あそこまで強引だとなにが起きるか……とか思いつつ外に出る。

まあ出たところで、行く場所はないので、隣の電気屋に入るだけ

だが。

30分後……ライナは電気屋から出てきた。

一番よかったのはマツサージチェアと、ライナは満足そうに出てきた。

そのまま寝てもよかったのだが、店員の目が激しくびしびし刺さり、寝ずらかったので出てきた。

流石にライナの格好は——ジャージ（ピンク）——金を持っているようには見えなかったのか、何も買わないなら出て行けという視線にをぶつけてくる店員に耐えられなかったようだ。

どうにもサービスの悪い店である。

とりあえず、こんなにも時間がたってんだしもうあの二人はいないだろ、とおもいつつ、またデバイスのコーナーに入ろうとする、が。

そのデバイスのコーナー入り口付近に、あの二人組がいることに気づいた。

そう、ティアと呼ばれる少女とスバルと呼ばれる少女だ。

どうにも、何かもめているようだった。

その二人の目の前には変な男供がいた。

管理局の人間と思われる服を着た男が5人。

特徴は禿とロングと眼鏡とデブと濃い眉だ。

それらにスバルとティアは怒りを含ませた嫌そうな顔をしている。

それを見て、ライナはどうにも分かりやすい絵だな…… と思いがら、すぐそばでそれを傍観している幾分か年をとった一般人に話しかける。

「なあ、あれ何してんの？」

「ん？ ああ……あの譲ちゃんたちをナンパしてる管理局の男共が断られたとかなんとかで無理やり連れて行こうとしてるんですよ」

「へえ……そりゃ面倒だね」

「へえ……って……あなたは助けに行かないのですか？」

「えゝなんで俺が？ あんたがたすけりゃいいだろが」

「あはは、私じゃ無理ですよ。管理局の局員に勝てるなんて思いません」

それに、私に声をかけたのは助けにいくためじゃないんですか？」

「へえゝ何で？」

「何でって……そりゃ魔法でも使われたら一発ですし、それなりに鍛えてるでしょうから私じゃとても勝てるとは思いませんよ。まあ言い訳ですけどね。」

それに、普通ああいう場面を見れば助けに行くのが普通じゃない

いんですか？ で、あなたは行かないんですか？」

「めんどいからやだ」

「あ、あはは……そうですか……めんどいから……」

と、ライナはつまらなそうにいい、仕方ないからあれが終わるか、隙あらば店に入ってしまったおうという魂胆で見守る。

本当に、なんでそんなつまらないことで揉めんのかな、俺じゃ考えられないな

と、ライナは考えながら見る。

ちなみに一般人のおじさんはそんなライナの発言に引いていた。

事態が進む。

スバルが、ライナの目の前でティアちか呼ばれる少女の前で明るい顔をした顔とは違い、怒りを顔に含ませた顔で、言う。

「だから行かないってば！！ もう、行こうよティア！！」

そういつてスバルはティアの腕を掴み、そのまま突っ切ろうとする。

が、その態度が気に入らない男共は下卑た笑顔で

「おいおい、そこでちょっと遊ぼうって言うてるだけなのにその態度はないんじゃない？」

と、チンピラのようにスバルの行き先を通せんぼして言う禿げ頭の男。

それにスバルは

「どこが！ さっきから逃がさないように周りをかっこつて
！」

と、怒る。

それにティアナがひとつため息をつき、スバルに言う。

「スバル、話し合うだけ無駄よ。馬鹿みたいに女の子に話しかけて強引に連れ去ろうとする連中よ……関わり合うだけ私達に特なんてないわよ。時間無駄」

そう言つて、ティアナは同じように顔を怒らせて男達を突っ切つていこうとすると。

禿がティアナを通せんぼして弾き飛ばす。

「きゃっ！」

「ティア！」

禿の男が、下卑た笑顔で、ティアナたちを見下しながら、言う。
まるで、この場は自分が主導権を握つてんだからおとなしく言うことを聞け、とでも言つように。

「おつとと、いかせねえよ？ ほら、痛い目にあいたくなかったらさっさと俺達とこ——」

「だからいらないよ！！ ここまでされていききたいやつなんているもんか！！」

と、禿の男の言葉を遮ってスバルが言う。

ティアを傷つけられて、腹が立っているのか、眉間に眉がよってこぶしを震わせている。

今にでも殴りかかりそうな気配だ。

それに禿の男は、いつまでたっても言うことの聞かないスバルに少しイラついたのか、

「いいからこいつて!!」

と、スバルに拳を食らわせようとする。

ブン、と拳が、あろうことがスバルの顔にがあたりそうなり

それをライナは見て、

「あ……」

突然驚いた表情で、声を上げた。

それから急に真剣な表情になって、

「まじかよ！ やばい!？」

飛び出した。

瞬間。

ライナの体は、いままでやる気なさそうに脱力していたものとは思えないほど素早く、滑らかに動いた。

そのまま男女の仲にあっさり割って入り、拳を止める。

それに、禿が驚いた表情をするも、それをライナは気にせず

「ほい」

と、ライナは跳びながら禿の男の側頭部に蹴りを食らわせ管理局員の男の一人を一発で気絶させる。

禿げは泡を吹いて倒れた。

すると周りの男共が呆然とライナを見る。

当然だ。

いきなり見知らぬ男が自分の仲間を蹴り飛ばし気絶させたのだ。

そして、しばらく時間がたち、男達は何が起こったのか、理解できるように冷静になったのか、すぐに顔を怒りの色に変える。

「てめえなにもんだ！」

「あ……………しまった……………つい体が動いて……………あゝあ、俺
つてばこいつら助けちまったことになっちまったのか……………ってこと
は邪魔しやがるならてめえもぼこにしてやるとかそういうめんどくさい展開に……………うめんどくさ……………あっ！そ
うだー！」

と、ライナは名案が浮かんだと、ぼんと手を打った。

そして、無駄にさわやかな笑顔で男どもに言う。

手をひとつあげ、宣教師のように、すばらしい笑顔で

「ほら、俺つてば蹴ってないぜ？ そいつがたまたま俺の足に当たっただけで……………それで気絶した。

じゃ……………だめ？」

『ダメに決まってるだろうが！！』

男共全員の声がかぶった。

そりゃそうだと、スバルとティアナもそう思う。

これがシンクロというものらしい。

汚いシンクロだ。

とかどうでもいいことを考えながら、ライナは目の前の男達を見る。

装備はどうやら何もない。

そう考え、ライナは相手の肉付きを見る。

どうやら鍛えてはいるようだが、あまり実践に対応できる体つきには見えない。

自分にはいざとなったら魔法もある、なら楽勝かな……なんて思っている

ロングの男がカードのようなものを取り出した。

「んあ？　なんだありゃ」

そうつぶやくとティアが

「ちょっと！　一般人に、それにこんな所でデバイスを使うつもり！？」

「うるせえ！！　管理局員に暴力振るっただ！　逮捕だよ逮捕！！」

「そんな、ひどいよ！！」

と、ティアとスバルが男と言い合う。

が、ライナはそんなことをおいて置いて、デバイス？　と首をかしげる。

なぜなら相手はカードしか持っていない。

どこにそれを持っているのか。

基本型は杖と聞いている。

色々と剣とかもあると聞くが基本は杖。

もしかあのカードはあいつのオリジナルか？

と、ライナが思っていると、男の持っていたカードが杖になり、バリアジャケットをまとう。

「はあ！？ んだそりや！？」

そうライナが驚くと、目の前のロンゲの男は、鼻を鳴らす。

「はっ！ 何を驚いてやがる！！ 今更怖がってもおせえよ！」

と、男がすごむが

「いや、その変形すごいなって思ってた」

そうライナは余裕そうにいう。

それにロンゲは顔をゆがませる。

ライナが恐怖していたのではなく、ただ単に感心しているという
余裕が許せないといったふうに。

ロンゲは、歪めた顔のまま言う。

「てめえ、余裕ぶっこいてられんのも……ぶごぼっ！！」

「はいー。余裕こいてんのはお前だよ」

そう言うライナは腹と顔面に蹴りを叩き込み男を落とす。

そして、眠そうに欠伸をして、だるそうに次の準備をしていると

「ばか！ よけなさい！！」

ティアナの焦った声が聞こえる。

それに反応して周りを見ると、するとデブと眼鏡と濃い眉がデバイスを取り出していて、魔法の弾を躊躇なくライナに撃とうとしていた。

それにライナが反応した瞬間

弾は――放たれる。

いくら非殺傷設定といっても怪我をしないわけではない。
むしろ骨くらいなら折ることだってある。

それが、ライナに迫る、が。

「おっと、危な――！」

ライナは目の前から来た弾をすべて、ひょいひょいとよけた。
それも、すべて余裕で。

それに、この場にいる全員が啞然とする。

なぜなら、今の弾は150近くは出ていたのだ。

しかもそんな弾を目の前で一人最低4、5撃たれて平然とよける、
考えられないほどの身体能力であった。

しかしライナは思う。

（稲光^{いすち}よか遅いしまあ避けられねえほどでもねえな……）

と、管理局員達の魔法の弱さを考えながらそう思う。

ライナの世界の、ローランドの魔法、稲光は、雷を打ち出す魔法。
圧倒的な速さを持つ魔法だ。

それをライナは避ける。

なら、それより遅い球など簡単なものだった。

そしてこの魔法について、とりあえず一個いえるのは、流れ弾は後ろのデバイスショップに突っこみショップを破壊して店員を涙目にしたことだ。

とりあえずこの男共が出入り禁止になるであろうことは想像に難くない。

「はあ、めんどくさいけど、そうも言ってらんねし……」

ライナはそう呟き、自分が逃げたら、この男共は一般人関係なしに自分を撃ってくるかもしれない、少なくともローランドはそうだった。

だから、ライナは逃げずにとりあえずさっさと制圧しておくか、という気持ちで倒しに走る。

まずは眉毛が顎^{あご}殴られ気絶した。

ライナの動きが早すぎたようであるで何をされたかも分からないような表情だった。

続いて眼鏡が同じように顎を殴られ気絶。

同じく何をされたか分からないような顔。

最後にデブも顎を殴られ気絶する。

同じく。

ライナは、とりあえず全員を気絶させた。

バリアジャケットは肉体の耐久力も上がる。

そう、昨日の居酒屋でシャルに聞いていたので、全員耐久力など関係なさそうな顎などを殴って人間の脳を揺らして気絶するようになった。

めんどくさい戦法である。

だが、こうして、男共は一切魔法を使っていないライナに軽く制圧された。

普通に弱すぎるのである。

そうしてライナは、倒した男共を見て……………店を見て。

その……………破壊されたかわいそうな現状を見て。

「俺知くらねつと」

走って逃げた。

決して弁償とかが怖かったわけではない。

男共による被害が、自分にも来ることを怖がったわけではないのだ！ そうなのだ！！

そして、しばらく走っていると、偶然にもエスカレータというある意味ライナには新鮮な乗り物で、交差するようになるのはと合流た。もちろんライナはこってり怒られた。

迷子になっちゃいけないでしょ！ と。

周りの一般人には子供かよ……と苦笑いされていたのはご愛嬌。

s i d e スバル

どつかいっちゃう寝癖でぼさぼさな男の人の背中を見て、私はつぶやいた。

「いっっちゃったね」

「あれって助けてくれたのよね？」

「でも逃げちゃったね？」

「そうよね？ だから釈然としないというか……事後処理を全部押し付けられたというか……」

うん、それは思った。

なんか面倒ごとを片付けてもらっただけど面倒ごとを置いていかれたって感じた。

「でも今度あったら御礼を言っとこうよ。名前……聞き忘れちゃったけど……」

「まあ確かに一応助けられたんだから御礼言わないのも、ね。名前は……どうとでもなるんじゃない？」

それに会えるかどうか分からないのに名前を知っていても意味ないわよ」

「あつ、そうだね。でも今度会ったら名前聞いとこつと」

うん、聞いておこつ。

流石に名前を知らないのは気持ち悪いしね。

それにしても、あの眠そうな顔の人、すごい動きだったな……。こっぴゅんびゅん！ って飛び回ってる感じで。

あつという間に倒しちゃった。

しかもあのデバイス使ってるように見えなかったし……すごいな……。

ああいう風になれるかな？

side ティアナ

「そうだね、でも今度会ったら名前聞いとこつと」

そうスバルは言う。

うんまあ聞かなかつたのは私も悪かつたけどそこまで聞きたいかな？

まあすごい動きだったしバリアジャケットもデバイスもなしに無力化したのは凄かつたつけど……。

しかも結構余裕そうだったわよね……。

あれが才能ってのかしら……。

努力で、私もあれくらい、になれるのかしら……。

こうして、二人は同じようなことを思いながらも、憧れと嫉妬という、反対の感情で、ライナを思う。

どう進もうと、必ずライナに会うことになる二人は、こうして一回めの邂逅を終えた。

「どうしてライナはこう勝手にいなくなっちゃうのかな？」

いつの間にか『さん』付けがなくなったのは、ライナに怒る。どうも『さん』をなくしたのは、こちらが怒ってますよ！ という意思表示のようだ。

それにフェイトも便乗する。

「そうだよ、ライナはこころ辺のことを知らないんだから、本格的に迷子になったら大変だよ？」

フェイトは、そう言って心配するそうに怒る。
当たり前だ。

ただでさえこの世界に不慣れなライナだ。
文化圏も、文明も違いすぎる。
だから、当然心配する。

フェイトは、そんな起こり顔のまま、ライナに指を立ててビシッ

と怒る。

「もう、そんなライナにはおしおきだね」

「うんうん」

「へ？ おしおき？」

何故か、お仕置きなんて話になった。

「そうお仕置き。ライナの場合すぐに破りそうだからね」

そう、なのはがいう。

それにライナは……

「……ちなみにお仕置きってなんなのよ……」

そうライナがいうと……何故かフェイトとなのはは、二人とも怒り顔から——笑った。

それにライナは嫌な予感がした。

どうにも薄ら寒い、何かが。

先ほどの戦闘で、ここ二年間ろくに体を動かしてなく急に動かした反動か、すぐ疲れて体を動かしたくないライナはそれでもいつでも逃げ出そうなんて考えながらも怯えながら聞く。

「な、なんでお前らは笑ってるんだ？」

「え？ 私笑ってた？ フェイトちゃん」

「ごめんなのは、見てなかった。けど、私達は怒ってるのに笑う

はずがないよ」

「だよね？　なのになんで笑ってるのか言うのかな？」

と、なのはが言いながらライナを見る。

それにライナはびくつきながら。

「だ、だよなー。笑ってるはずないですよねー」

と、ライナは目の錯覚だったのだ！

と、自分を無理やり納得させる。

そして、自分を無理やり納得させた瞬間に地獄が待っていた。

「とりあえず……服の試着とかしにいこうか……？」

「え、なんでそんなに暗い顔なの？」

「いいから行くよ……」

「え？　なんで俺の両腕を二人して掴むの？　ほら、俺と恋人とか勘違いされるよ？」

「大丈夫。それくらいの噂はすぐに消えるよ……ほら、行くよ」

「なあ、なのは……。あそこは女性用にしか見えないんだけど……」

「あはは、なに言ってるの？　あそこはここの世界の男用だよ？」

「……ぜってえ嘘だあああああああああああああああああ

ああ　つてたすけてええええええええええええええええぎやあ
ああ　あああああああああああああああああああああああ
ああ　ああ

こうしてなのはとフェイトに女物を着させられ辱められたライナであつた。

ちなみにライナの最後の断末魔は拳骨によるものである。

威力は……フェリス級……といえいいか……。

こうして、波乱万丈の買い物は終わった。

ライナに幸福あれ。

迷子の迷子のライナ君（後書き）

答え ベン・トーの同人誌

少ない！！ 圧倒的少ない！！

なにあの数の少なさ！！ ほしい！ ベン・トーの同人誌が欲しい！！

まあ仕方ないからなのは本で我慢します。

伝勇伝なんて気配すらないしね。

BLはありそうだけど。

えーと。

前書き物々しいのに後半ぜんぜんはっちゃけてますね。

うん。

シリ阿斯……ライナの苦しむ姿は5話以内にすると思います。

次回かも？ 次々回かも？

とりあえずライナは重い過去というか現在進行形で持ってますからね。

触れないのは勿体ない！

笑えぬ過去（前書き）

赤い甲冑が残像を残して、通っていく。

その残像が見えなくなる頃には誰もが死んでいた。

そこは、文字通り地獄。

今まで話していた仲間は上下が分かたれている。

今方で話していた仲間は首がなくなっている。

今まで話していた仲間はばらばらになってモノと化している。

そんな地獄。

仲間が死んだ。

キファが泣いた。

シオンが苦しんだ。

なのに、頭が、思考がぼやけて、どうでもよくなって……なにも
かも見ずに死のうと思う。

……なのに、なのにどうしてだろう……？

シオンが殴られて苦しんでいる。

キファが襲われて悲鳴を上げている。

それを、それを聞くと、どんどん……どんどん……頭が冴えてく
る。

頭が冴えて、皆が苦しんでいるのが、明瞭に見える。

こんなにも見えないのに、見えてきて……

こんなにも苦しいのに、こんなにもやめてほしいのに。

殺すのも、殺されるのもいやで、こんなにも苦しいのに……。

なのに、二人を助けたいと思う。
でも、頭が冴えていくのに意識と体が分離する。
そして――

――いつの間にか笑いながら、人を殺していた。

瞳から星が零れ落ちる。

瞳から手に涙のように零れ落ちる。

そして、その星を赤い甲冑の地獄に押し付ける。

すると、人が――まるでスライムのように溶けた。

瞳の星が、勝手に敵に飛来する。

風船のように破裂した。

瞳の星が揺れ動く。

ガラスのように割れた。

瞳の星が、ただただ、視認する。

まるで、存在しないように消えた。

まるで、まるで、まるで、悪魔のように、神のように、化け物の
ように、人を笑いながら殺していた。

死体は死体と混ざり、仲間の死体と混ざっていく。

敵も見方も関係なく、バラバラの死体群は、まるで……自分が仲
間すらも殺したかのように見える光景。

そんな、脅威の力を振り回して。
そんな、脅威の力を振りかざして。

—— 笑いかた以外を忘れたピエロのように笑いながら人を殺した

最後にその力をキファやシオンに向けて—— 振り下ろした。

問ライナ・リユート

笑えぬ過去

——あの日レポート

人が死ぬのは嫌いだ。

殺すのも嫌い。

泣かれるのだって、泣くのだっていやだ。

人生を選べないというのはどういう気持ちだろう？

家族が死ぬのは？

好きな人が死ぬのはどうだろう？

誰もそんなことを望まないはずなのに、何故か世界は、そんな無意味な悲しみばかりを、笑いながらほしがる。

何かを無理やり変えたいと思ったことはなかった。

けど、変えなきゃ悲しいし、もうなにもう失いたくないから……

めんどくさい話だが……

そろそろ前に進もうかと思う。

いままでずっと、目をそらしてきたけど、必要なら、自分の過去だって見つめてみよう。

そして

もう誰もが、なにも失わない世界を手に入れるために。

あの子も、キファも泣かないし、タイルやトニー、ファルは死なないし、シオンは思いつめなくてもいいような世界。

皆が笑って、昼寝だけしていればいいような世界へ。

ライナ・リユート

カタカタと、まるで打ちなれている人のようにキーボードをたたく音が聞こえる。

カタカタという音とともに、画面には文字が羅列していく。

文字は、とある人間の世界で——元の世界で書いていたレポートであった。

もちろんライナのレポートである。

ライナは、もう、完成しかかっていたレポートの内容を思い出しつつ、なのは達に買って貰っていたPCに無意識に打ち込んでいた。ただ、名残惜しむように、それとも、思い出すかのように……ただ打ち込んだ。

そしてふと、ライナは気づく、意味もない行動、意味のない文、この行動の意味のなさに。

ライナは、ひとつはあゝとため息をつく。

「なぐにやってんだろ、俺。こんな文書いてる暇があったら寝たらしいのに」

ほんと老後のためって言っても、ここじゃつかえねえじゃん」

そう言って、画面を見る。

文は、勇者の武器に関する民話や、伝承であつたりと、一番可能性が高い順をまとめたものである。

そして、ライナは視線を動かす。

見たのは、レポートの始めの文だった。

「人が死ぬのは嫌い……殺されるのも嫌い……か……」

そう言つて、ライナは少しさびしそうな瞳で、ローランドを思い出す。

自分が人とは思えぬ扱いを受けたことは、さして問題はない。そんなものに慣れてしまふほどに、ライナの人生は苦しかったからだ。

だけど、国の現状については違う。

貴族が民をなんとも思わず、虫けらのように殺し、女を犯す。それに王はなにも言わず、むしろそれに参加し、さらには戦争を起こしてより民を苦しめる始末だ。

そんな現現状に、立ち向かおうとしたシオンを思い出す。

かれは、腐つた国に立ち向かおうとし、全てを無くしかけた。そんな男を思い出す。

あいつは、まだ国に反抗してるのだろうか？ そう、ライナは思うも、今更関係ないと切り捨て、瞳を閉じて、しんどそうにため息をつく。

ローランドには革命が起こったことがない。

起こる前に……それは何故か事前に阻止される。

国の暴挙を変えようとしても、変わらない。

人々に笑顔はなく。

人々の明日に光がない。

そんな、そんな暗い国だった。

それを思い出し、ライナは、目をゆっくり閉じて、そして開く。何かを振り払うように、嫌な思い出ばかりのローランドにも、少しの楽しみはあったと、思い出して忘れるかのように。

「でもまあ、ここは、ローランドとは違うんだよなあ……。ほんとに幸せで、ほんとうに、ローランドとは全く違う、笑顔で

あふれてるのよね」

そう寂しさと、やさしい世界に対して喜びを混ぜたような表情で口にして——ライナはふと気づく。

何故か部屋の扉が少し開いていて。そこから4つの目が覗いていることを。

ライナは気づいていないふりで、横目で扉を見る。

まあ覗いているのが誰だかは予想が付くが……。

おそらく、なのはとフェイトであろう。

それ以外にはあんまり想像が付かない。

何故か瞳がこちらを見た後、扉の向こうで、おそらく二人がなにやらヒソヒソとしている。

それにライナは気づいていない振りをしながら、PCの電源をスリープモードにし、椅子のローラーを転がして、ベットにいく振りをして、そのまま静かに椅子から下りて扉付近へ静かに近づく。

足音の消し方は、地獄の施設の軍じこみだ。

気づかれるはずがない。

話し声は、ライナに気づかず続けられた。

フェイトの声が聞こえる。

なにか、心配するかのような声だ。

「ね？ 悲しそうな顔、していたでしょ？」

「うん。何か悩みでもあるのかな？」

「なにか抱えてるのかも……この前の取調べの時も宴会のときも……
……なんでかすごく寂しそうな瞳をしてたし」

「うーん……一人でこういう世界に放り投げだされて寂しいのかな？」

「うーん……たぶん違うと思う、けど……でも、無理に聞くのも……」

と、なにやら聞こえてくる。

しかも、自分に関してのお話のようだ。

ライナはそんなに悩んでる顔してたか？　なんで思いつつ。

「ふあーねむ……」

とりあえず二人に気づかれぬように扉から離れ、ベッドに飛び込む。

ライナはもそもそと布団にもぐりこみ、低反発枕に癒しを感じ、あゝここって枕が気持ちいいなゝなんてつぶやいて、そのまま寝てしまおうと意識を落とした。

そのライナの寝顔には、小さな微笑があった。

s a i d フェイト

いつの間にかライナがベットで寝ていた。

今はもうライナって呼び捨て。

だって、なんだか年下の子供を相手してるみたいで……さん付け

は違和感がするから……うん、しょうがないよね？ これもライナがだらしな^いせいだ！

……こほん。

それにしても……ライナはまだ昼近くなの寝てる……気持ち良さそうだな……

「って！ ライナ寝てるよなのは！？」

「ってあれ、いつの間に！？ 早く起こして起こして！！

今日は管理局での挨拶なんだよ！ ライナの紹介のために今日の仕事、昼からってことにしてもらってるんだから、遅れた怒られちゃうよー！！」

「う、うんそうだね」

私達もライナを覗いててすっかり忘れてた……。

扉の隙間から見たライナの顔……その瞳の悲しそうな意味がなんなのか気になっちゃったから……。

それでも……覗いていいことにはならないよね……。

うん、反省しよう……。

「ライナ起きて！ 出勤の時間だよ！」

私は、さまざまな思いを胸に、扉を開いた。

ライナは、たぶん色々なものを抱えている。

そんな、気がするんだ。

時折見せる、あの瞳の、昔の私のような……寂しくて助け欲しいって、叫んでるような瞳。

色々気になるし、悩みがあるなら聞いてあげたい。

でも、強引に聞くことはきつと傷つけるだけだ。

私は、早いうちになのはに、皆に助けてもらった。

だから、まだ良かったのかもしれない。

でもライナは、どうなんだろう……？

誰か、大切な人はいないのだろうか？

いたから寂しい目をしてるのかな？

そこらへんは分からないし、ライナが私達に、全ての面を見せてくれている気もしない。

まだ、会って間もないってのあるけど……それでもなにか、人を信じられていないような……そんな感覚。

……私達に、本当に心を開いてくれるだろうか？

そんなことを、考えてしまう。

うつん……キャロもエリオも、心を開いてくれたんだ。

なら、ライナだって、頑張れば心を開いてくれるはず。

うん。

とりあえず……まずはあの寝ぼすけを起こすことから始めよう。
少しずつ、お互いが歩み寄れるように。

s a i dなのは

とりあえず、ライナを起こして、管理局の制服に着替えさせて、出勤した。

ん？　なんで民間協力なのに管理局の制服が支給されてるのって？
はやてちゃんに渡された……としかいえないよ……。

たぶん……制服姿のライナを見せ付けることで、ライナが管理局員だつてことをアピールするつもりだね。

外から埋めるつもりだ……。

でもライナは民間協力だから……管理局員以外に制服を貸すのは

罰則って枠に入らなかったっけ？ いいのかな……？

なんか……やったのかな……？

もしそうなら、本気でライナを鍛え上げて、自分の多分、来年作られる六課に入れる気満々だよ……。

どうしよう……怒ったほうがいいかな？

でも、ライナはどうでも良さそうだし……ただ単に制服の意味に気づいてないだけなのかな？

そう思いながら、フェイトちゃんとアイコンタクト。

フェイトちゃんも、『うん』とうなずいて、思惑に気づいてる見たい。

あつ、ちなみに名前呼びはライナだよ？ なんか、罰ゲームのときに呼び捨てで言い続けてるうちに、こっちの方が言いやすくなっちゃったかな。

「ライナ、その服サイズは合ってる？ で……その制服……どう思う？」

そう私は管理局への道を歩きながら、とりあえずライナの制服のサイズと、その思惑について聞いてみる。

これで、ライナが気づいてるかどうか、分かるかも。

ライナは、こっちを見てほんとに眠そうに欠伸をしながら言う。

「ふあゝ……んあ？ まあ、サイズはなんか不思議とあってんな

……うゝん何でだ？

後、制服は普通なんじゃねえの？ 軍って感じしないのがいいな」

と、ライナは眠そうに言うの。

でも、制服の思惑についてはなにも気づいてないみたい。

鈍感なのか、それとも……あつ、もしかしたらめんどくさいだけなのかも……。

もしそうなら、ライナらしいな。

「ふふ」

「んあ？ どうしたんだなのは？ いきなり笑い出して、精神病？」

「違うの！？ ってなんでいきなり私の精神を疑うの！？」

まったく、失礼だよ！ もう。

そう私が怒ってたら、フェイトちゃんが慰めてくれた。

「ほら、ライナって鈍感だから……見たもので判断しちゃうんじゃないかな？」

「ねえフェイトちゃん。それって慰めてくれてるの？」

「え？ え？」

なんかライナのことを肯定してるようにしか聞こえないよ……。フェイトちゃん自身、何を言ったのか分かってないみたいだけど……

うう……そりゃ、管理局の『白い悪魔』とか、不名誉な二つ名つけられてるけど……そんな変かな？ 私……。

そんなことを考えてたら、管理局のビルについた。休み明けから気分が暗いの……。

とりあえず笑顔を取り繕って同員の皆とは、挨拶したけど……なんか皆驚いた顔してたね？

特に男性の同員の皆が。

うーん何かあったのかな？

ライナは、自分を——無理やり——民間協力という形だが入局させたはやてのいる管理局本部に着いた。

正直めんどくさいことこの上ないが、仕方ない……とため息をついてあきらめる。

「はあ……まともに仕事とかしたくない……」

そう言つてライナはだるそうに普段から姿勢の悪い猫背をさらに曲げて、もはやお辞儀のような格好で、前を歩くのはやフェイトについて歩く。
すると

「もう、ライナ。ダメだよ？ もう少しビシッとしよう」

とフェイトが笑顔で言う。

なのはもにやははと笑いながら。

「予想通りめんどくさそうだね」

正直いうと、なのはもフェイトも、ライナと2日間暮らすだけでライナのめんどくさがりが身にしてみて分かっていた。

そもそも、ご飯すらもだるそうに食べる（なのには早い）。寝るのは早いのに起きるのが極端に遅い。

PCを触つてるとき意外は、特になにもやらない。

あれ？ これ二トなんじゃないかな？ やばいんじゃないかな？
なんてなのは達が不安を募らせる親の心境になったほどだ。
どんだけめんどくさがりかが分かる。

だから、こうなることが予想できてたぶん心構えのできていた二人は、本当に予想通りなライナを見て小さく笑う。

「とりあえずライナ。皆見てるからちゃんと歩こう？」

とフェイトがライナの腕を持ち上げ。

なのはもフェイトとが持っているらしい腕の逆を持ち上げ、二人してライナを持ち上げる。

それにライナは、ため息をつく。

そして——冷や汗をかく。

なんだか、首のほうが寒くなってきた……。

（んあ？ 殺気……？ 複数……しかも全部俺に向かってるし）

しかし、殺気の数が多すぎて逆に特定できない。

ライナは、その殺気が何が原因か、なんなのが理解できない。

場所も特定できず、仕方なしにつかまれている腕を二人から解き、自分で歩くことにした。

この殺気が全部向かってくると、非常に危険で対処できないからである。

とりあえずライナは二人の支えを解くと、殺気数は減ったものの、しかしまだかなりの数がある。

なんなんだ？ と首を傾げつつ、ライナはびびしと殺意に総攻撃されながら、はやての部屋に着いた。

そして、また殺意が跳ね上がったことにライナは気づいたが、な

ぜだかは判断が付かなかったようだ。

笑えぬ過去（後書き）

答え　魔眼、アルファ・ステイグマ複写眼の保持者。

黒髪黒目、長身痩躯。

常に気だるげでやる気がなく寝ることはかり考えているが、体術、魔法共に常人離れたレベルで特に魔法に関してはずば抜けた技術を持っている。

陰成師だった13歳の頃、当時「ローランド最高の魔術師」と呼ばれていたクアント・クオを倒し、以降「ローランド最高の魔術師」と呼ばれるようになり軍の陰に属する者達から恐れられていた。魔法に関する才能は複写眼保持者であることだけではなく、それを抜きにした魔法に対する天才的な理解力と感性による所が大きく、その能力に比べれば複写眼などおまけに過ぎないというのが師であったジェルメの評価。その他にも古文、古語や暗号の解読も得意としている。

通常複写眼保持者は一度暴走すると正氣に戻れないがライナは暴走しても尚正氣に戻ることができ、そのため陰成師時代に度重なる命令違反、命令放棄にもかかわらず珍しい実験体として生かされていた。

また、普通の複写眼保持者は暴走しても魔法騎士が数人いれば殺せるのに対し、ライナの場合は50人がかりでも全く歯が立たない。昔は今のようには昼寝の事ばかりを考えてはいなかったのだが、ジェルメによって睡眠皆無の地獄の特訓を課されたために暇を見つけては寝るようになってしまった。

基本的に誰にでも優しく接する好青年であるが、魔眼保持者を化け物扱いする人間に対しては怒りを露わにしており、特に幼い子供まで虫けらの様に虐殺しているレファル、オルラ兄弟らがスタークをひどく嫌っている。

両親の名前は認識できなくなっている。

今更解説でした〜

とりあえずあれだね。

三人ともそういうのは疎いのであった。

そういうのってのはもちろん愛。

恋ともよぶ。

あゝマブラブイクリプスのゲームほすい。その前にアニメだ！

お話・解明・説明の三本です（前書き）

今一s t sの組織図が分かりづらい。

が、とりあえず地上と本局じゃめっちゃ中が悪い。

とりあえずあつち^{あつち}は地上本部のレジアス押しです。

質量兵器いいじゃん。

魔法なんて、魔力なんて本気で先天的才能の領域なんだから。

魔法使いによる魔法使いの世界……貴族達の世界をマシにしたようなものだね。

一般人が成りあがるような組織図に変更したい！

まあレジアスはうまく成り上がったけどね。

気持ち的にはあれ、ライナを本局じゃなく、地上本部に送り出した
い。

そんな気持ち。

レジアスの下にいれば直よしだね。

入れないけどね……

問 スカリエッティとドクターウェストを会わせるとどうなるの？

お話・解明・説明の三本です

とある地上本部の技術部。

それも、変人と狂人と変態と天才が集まるとされる開発局2課がある。

そこは異様な存在的な黒さを放ちさらには異様なテンションのものが集まるため、他の課の者たちからは黒の騎士……げぶん……黒の教団……でもなく黒の狂団と呼ばれている。

そこで、その課の課長を務める主任。

いつも変な仮面をつけた、零とか呼ばれている（もちろん偽名）変態が、課の皆を集め、うず高く積まれた書類の山の中央で、声高らかに言う。

「ふははは！ 今日、ここに、研修生が来るらしい！ 貴様らにはそのものが我が課に入りたくなるような歓迎を催しても貰う！」

そう、バサアと鬱陶しくマントを広げた。

それに、他の技術者は、ダルそうに顔を向ける。

主に、主任が本局や本部からぶん取ってくる予算や、買ってくる材料とかの書類をまとめているのモノ達の目だ。

今やPCが活躍する時代。

なのに、その書類枚数は膨大だ。

なぜだかは、主にデータに残しておく和不味かつたりする書類の山だつたりするからだ。

例えば零の自分の妹に対しての小さな予算の横領の隠蔽書類や、技術部の予算リストにある謎の予算の書類など、色々ある。

そして、それらをまとめると、ものすごい枚数になる。

まあ他の2課のものも同じようなことをやっているのですそのことについては文句はないのだが。

しかし、書類をまとめていたモノ達には自分の研究もあるのでそれをやっている分、寝る暇はなく、そのものたちには目に熊があり、ゾンビの様相で、ダルそうに主任をにらむ。

ちなみに零も同じように書類をまとめているのだが、まったくの元気だ。

馬鹿は体力が有り余っているようだ。

しかし、周りのものは、ただただ眠いといった様相で零をにらむ。そう、うるさいから。

頭に響くから。

零をにらむ。

しかしそこに、顔色のよい、気の強そうな女が声をかける。

「ねえ」

「うん？ どうした香月。君が反応するとは珍しいな」

そう零が言うと、香月はどうしても良さそうに腕を組み、言う。

「そんなことどうでもいいじゃない。

そんなことより、その研修生は使えるのかしら？」

そういう。

彼女の名は香月夕湖。

女の技術屋とよぶより研究者と呼ぶほうが正しい美人の女だ。

彼女の技術部での立場は、零の次と呼ばれるほどの腹の黒い女だ。つまりは零のが黒い。

そして止めにどっちも腹黒い。

夕湖は零の返答を持つと、零は方をすばめ。

「うむ。どうやら頭は切れるようだ。私達が1を教えれば、10

覚えるタイプだという」

「……へえ。それ、私の班が貰ってもいい？」

「ダメだな。私が貰う」

「……チツ。あんたが相手じゃ分が悪いわね……あんたの事だしもうすでに手を打ってるんでしょ？ 私知らない情報をどこで取ってきてるのよ……」

「まあ確かに手はずでうつっているさ。それに情報源か？ そうだな友人。とだけ言うておこうか」

「あら、あんたに友達なんていたのね」

「……………どうせ私には
グイータ
くらいしか友達はい
ないさ……………」。

人脈なんて全部零だし……」

「あら、いじけた」

零はいじいじと地面に指でのの字を量産し、夕湖は途中、名前の部分が聞こえなかったのに舌打ちをしたが、夕湖は零の脆さを弄るだけ弄ってから、少しすつきりした顔できびすを返して自分の研究室に帰る。

その途中、夕湖はつぶやく。

「とりあえずこつちも情報を集めとくだけ集めとこつかしら……」

その弦きは、誰にも聞こえない。

午前12:00

八神はやて部署

いつの間にか裏で人材の取りあいや、民間協力者のライナが、技術部で研修扱いになっていたのかは、おいて置いおこう。

そこは、はやて率いるシグナムやヴィータがいる場所であった。

そこで、フェイトたちは挨拶代わりに敬礼をし、はやての話を聞く。

そういう流れになった。

ちなみにシグナムはライナを見ると、ピクと眉を動かし、押し黙る。

苛立ちを抑えているようだ。

そして、長いお話が始まった。

ライナたちは、というかライナは早くも支給された制服を着崩して、はやての言葉をだるそうに聞いていた。

主に、仕事のことにについて。

「つまりは主にデスクワークになるな。後はなのはやシグナムたちに魔法の使い方を教えてもらいいや」

「うへえ……それって民間人のする仕事か……？」

「うん……まあ……」

「うそだな」

「うん」

「そんな即効返すのかよ!!」

「あはは」

「いや、あははじゃねえから」

「あはは」

「だから……」

「あはは」

「もういいや……」

ライナははやての仕事内容聞いて、本気でダルそうにうつむいた。主に、一日の仕事の時間が最低でも8時間つてところで。

正直ライナは、魔法のことは正直どうともなるとライナは思っている。

しかしだ、書類仕事は面倒くさい。

そう、何よりめんどくさい。

だから、ライナはダルそうにはいいいと、適当にはやての言葉に

うなずくだけ頷く。

本局勤めになれば、聞いた以上の書類を片付けなければいけないのかと、気を重くする。

てか8時間って正式採用されてね？　とか思う。

だが、その話はどうせ流されるだろうからダルそうに頷くだけ頷くことにした。

すると、

「こら、上官の言葉にはちゃんと耳を傾けなきゃダメだよ？」

フェイトが他の局員の見てる中で上官に対して一切の敬意もなく――それは仕方ないかな？とは思っているが――脱力しきっているライナを注意するが、ライナはそれでもダルそうにする。それに、はやてのすぐ後ろに控えていたシグナムが怒鳴る。

「お前は話をしっかり聞かんか！！」

と、シグナムライナの後ろに回り、がしつとライナの脇の下から持ち上げる。

彼女は、本気でしつかりとしないライナが腹立たしいようだ。

ライナが不機嫌を表すのは別にいい何せ主はやてに確実に非があるだろうから、が、流石にライナの姿勢の悪さには怒らざる得なかったようだ。

他の局員も見ているのだ。

規範としたものとしなければいけない。

そうシグナムは思っていた。

まあそのせいでぐにゅ、とシグナムの胸がライナの背中当たる脇を持ち上げるときに、どうしても胸があたってしまうようだ。それに、はやて達女子一同は、少し顔を赤くするが――ライナを見て、まあいいかと思う。

ライナは全く気にしていないからである。
まあ、シグナムも全く気にしないようだ……。

当ててんのよ！ とかそんな状態でも雰囲気でもなく。

ライナもあんまり恥ずかしがりも興味を持ったりもせず、ただただうえーと声を上げ、後ろのシグナムに殺気を当てられながら話を聞かされる。

別の意味でドキドキする局面ではあった。

ちなみに、男性職員からは当然のように殺気が飛んでくるのだが、ライナは慣れてしまったようだ。

午前 12 : 34

そして、話が一通り終わり、ライナの仕事内容、を教え終えたはやてはふうーと息を吐く。

シグナムもライナから手を離し、静かにはやての後ろに付く。
まさに騎士だ。

はやてはそれを見て、そして、ライナに顔を向け
にこつと笑った。

「これからよろしゅうな、ライナ」

「はあーいやだなー」

「あはは、そんなこと言うことには仕事いっぱい押し付けるで？」

「あ！　嘘嘘、俺ってば働き盛りだからぜんぜん大丈夫よ！」

「そうか？　なら、いっぱい仕事与えなな」

「あうう……」

「あははは」

と、そんな馬鹿な話をし、一通り話は終わったようだ。
そして、なのはが言う。

「それじゃあ、ライナに仕事を教えてくるね？」

「うん。お願いや。なのはちゃんの仕事はライナに教えながら共にやってな？」

あつ、フェイトちゃんは夕方々にライナに魔法とか教えに無限書庫な？

なのはがつれてく予定やから、先に無限書庫で待機な？

なのはも午後から仕事があるらしいし、午後のライナはフェイトちゃんに頼むわ」

「うんわかった」

と、話がとんとんと進む。

こうして、一通りの話が終わり。

ライナはとりあえず儀礼的に今自分がどこにいるのかは分からない

いが、とりあえず仕事仲間になるであろう局員の皆に挨拶周りをさせられた。

女性からは色々としろじろと見られ、男性からはさつきを向けられたが、いったって問題なく挨拶をして回った。

ただ、適当に挨拶をすると拳骨が飛んできたが。

午後13:01

デスク

そうして、ライナの管理局生活は始まった。

まずはなのはに、書類仕事のやりかたを教えてもらうことからだが、

「くかぁ……」

「ふふふ」

「ぐうえ！！　っわ、分かったからなぐんな……！　うう」

なにがあつたかはご想像に。

なのはが書類仕事を教えるのにそんなに時間はかからなかった。
ライナの飲み込みが早かつたのである。

書類仕事の才能がある、といったほうがいいのだろうか。

これは別の未来の話ではあるが、ライナは、王であるシオンの書類仕事を5日無理やり徹夜で手伝わされるなどをザラでさせられている。

もともと事務処理能力はあるようだ。

なのでおそらく、この程度問題はなかつたのであろう。

なので、仕事の速いライナのおかげで二人はあつという間に仕事
がなくなった。

なのはとライナは仕事を4分の1で分けてやっていたのだが、い
つの間にライナがほとんど終わらせていた。

だるそうに、眠そうに、高速で手を動かして、なのはの分まで侵
食し、結局は4分の3、ライナが終わらせた。

眠そうな顔をしていたわりには、ライナの手と頭は高速で動いて
いるのだと、なのはは驚愕したのであつた。

「すごいねーライナ。あつという間に仕事が終わっちゃった。

午後の仕事の分まで伸びてきて……午後の仕事もそれなりに終わ
っちゃった……

この分なら午後の仕事はすぐに終わっちゃうかな？」

と、なのはがそういうと、ライナは

「はあ！？ 終わってたの！？ しまった。俺ってばいつぱい
眠れるチャンスだったのに……はあ……俺ってば運無し無し君だな
……」

「あはは、そんなこと言わない言わない。ライナは頑張ったよ。
ほら、暇になったし、何かのみにいこっか」

「まあ……暇だししゃねえ」

と、ライナはどこから持ち出したのか枕を小脇に抱え、なのはに
付いて本局の小さなこじやれた喫茶店『メリーナイトメア』に足を
運んだ。

午後15:25

『喫茶メリーナイトメア』

喫茶店は、時間も時間のせい、人の姿はまばらであった。

今ここにきているものは、たぶん殆どが今の時間に仕事のないものであるう。

それを傍目にライナなのはを見る。
するとなのは、メニュー表読みつつ笑った。

「ふふふふ、それにしても、エスカレーターでライナの枕がはさまれるとは思わなかったな。『ぬぐおおお抜けない!』って、どうしたらあんな状況になるの? ふふ」

「うぐう。で、でもお前もそれに気を取られて落っこちそうになったじゃねえか」

「うん。あの時は危なかったね。ありがと、ライナ。落ちる前に助けてくれて

かつこよかったよ?」

「あう……なんか俺のほうが恥ずかしい……」

口ではなのはに勝てないと知ったライナは、ぼろぼろになった枕をひざに置いて、いすに座りながら不貞寝を決め込もうとしたが、なのはがさらに追い討ちをかける。

「それにしても、ライナって書類仕事速いんだね? びっくりしたよ。

飲み込みも早いし。すごい子になるなーって思っちゃった」

「うう」

「この分だと魔法のほうも期待できるね? ライナならババーンとやってくれそうだし。」

あつ、デバイスの心配はしなくてもいいよ？

優秀なライナにはやてちゃんが管理局の貸してくれるらしいから」

「寝れねえよー!!」

「あははは」

「いや、あはははじゃねえから!」

ライナはキツとなのはを涙目で睨み付けるがなのははどこ吹く風だ。

そんなこんな騒いでいたら、店の店員が現れた。

なのはは、あつ、ちよつと騒ぎすぎたかな？　なんて思いつつ、店員を見る。

すると、店員は

「カップルの方でしょうか？　今、カップルでデザートを頼むとお安くなっておりますが?」

と、店員は天使のようなスマイルでなのはたちに接客してくる。

それに、なのはは、きょんとする。

ライナは、涙目で店員を見る。

そしてライナは、

「別にカップルじゃ……あう」

カップルじゃない、そういおうとしたら、なのはの瞳がギラリとライナを突き刺す。

それにライナは押し黙る。

そしてなのはは、

「はい、カップルです。 どのデザートが安くなってるんですか？」

目先の欲に飛びついていた。

そう、デザートのアサリに飛びついただけであった。

淡い恋模様など何一つない。

悲しい灰色であった。

ライナは、そのデザートのアサリ人飛びつくのはにはあとため息をつき。

「んじゃ俺団子でいいや」

自分もデザートを頼んだのであった。

ちなみに飲み物はライナは緑茶。

なのはは コーヒーであった。

時刻、 16:???

そのとき、管理局諜報員に電撃が走る。
まあ主に噂好きの女とアイドル視している場かな男共だが。

「エースオブエースに変な男ができたらしい」

「マジでか」

「ああ、どうも名前はライナといって、寝癖でばさばさの髪と、猫背が特徴らしい」

「マジでか」

「ああ、しかもだ。エースオブエース自らがカップル宣言したら
しい」

「マジでか」

「お前マジでかしか言つてなくね!? ってこいつ.....
あまりのショックに目が死んでる..... くっ、ライナってやつ、許せ
ねえ.....」

とか、そんな感じで噂が流れた。

女性人はなのはに男ができたという噂にキヤーキヤーと色々と噂
をし。

男共は嫉妬で目から血を流したらしい。

すばらしいき勘違い。

ああ、ライナに明日はあるのか。

こうして、喫茶店で暇をつぶし、それなりに二人は会話をした。
途中ライナが寝てしまったので、しかたないなーとなのはが拳骨
食らわせ起こすということもあったが、概ね楽しく過ごした。
なのはは、そろそろ時間もいい頃になり始めた頃、ひとつ、ある
ことを切り出した。

それは、ライナの抱えてるものについてだ。

「ライナ……」

「んあ？」

と、ライナは、3杯目のお茶をすすりながらそう聞いた。
すると、なのはは、まだ早いかな？ と思いつつも、切り出した。

「なにか、悩みでも抱えてるのかな？」

「……………んでそんなこと思っただ？」

「うーん。私が一番に気づいたわけじゃないんだけどね……ほら、ライナ、たまにすごく寂しそうな目をするから」

そうなのは言っと、ライナは目を細める。

そして、ライナは言う。

「……まあほら、こっち来て帰れないのが寂しいだけだよ」

「嘘でしょ、それ」

「……」

「ライナ、話したくないなら、それでいいよ？
でも、私達はちゃんと傍にいるからね？

何かを、吐き出したい気持ちになったら、遠慮なく聞いてあげるよ？」

そう、なのはは、にこつと微笑んだ。

それにライナは少し、口をつくんだ。

そして、考える。

自分が、なんて呼ばれているのか。

自分が何を起こしたのか。

自分が、どれだけの人間を殺したのか。

自分との意思と関係なく暴れる化け物を、この少女はどう思うか、
そう、ライナは思う。

そんな、自分のことを考えるライナの表情は無表情に近く。

なのはは、悲しくなるが、それでも、同情は誰にだってできるから、と、笑みを崩さず、ライナに向き合う。

そして、ライナは。

なんとか、声を絞り出した。

「……んー。まあ、そのときは頼むよ……」

絞り出した声は、ぎこちなく、でも、嬉しさと悲しさが混じった複雑な声だった。

なのは、それについてはあえて気づかぬ振りをし、

「うん。そのときは、遠慮なく私の胸に抱きついたらいいよにやはは」

となのはは、冗談を交えて、ライナに微笑んだ。

ライナは、それに、少し微笑んで。

小さく、ほんとに小さな声で、

「ありがとな」

と、呟いた。

少しだが、ライナとなのはの心の距離は、縮まったようだ。

自分のことをなんでも胸のうちに抱え込んでしまう少年と少女。

ある意味では似たもの同士な二人は、無意識にでも気が合ったのかもしれない。

喫茶店から出て、なのはは、言う。

「本当は、仕事が終わっても勝手に出て、しかもこんなに長く外出しちゃダメなの。」

だから、皆にばれないように、内緒だよ?」

と、なのはが人差し指を立てて、片目をウィンクする。
それにライナは意地悪く

「んーどうしようかなー」

「にやはは、ライナ? 内緒だよ?」

なのはの目が、妖しく光った気がした。
殺気という炎をまとって……。

拳には左手を添えるだけのポーズで。

「う……わかったからその拳はおろせ!」

「うん、そうだよ。分かってもらえればいいの」

「はあ……」

どうにもこうにも綺麗に終わらないようだ。

夕方。午後17時40分。

『無限書庫』

フェイトと合流した。

なのはが、ライナをここまで送り届けてくれた。

なおはは、ライナとフェイトに交互に向けて手を振り

「じゃ、またね」

「うん、またね」

「んー」

ほわ〜んと微笑みながら去っていった。

ライナの心を、ほんの少しでも救ってくれたやさしさ。

それに、恥ずかしいから表には出さないが、感謝し、ライナはフェイトに向き直る。

そしてライナは、とりあえずひとつ言葉を

「それにしても……無重力つてのもすげえけど、ここはすげえな

……」

「あはは、そうだね。確かにここは、始めてみる人は驚くよね。

私もそうだったよ」

そこは、壮大。

その一言だった。

天井が見えぬくらいに高い本棚。

壁一面は、すべて本棚。

床も、底が見えないほどだ。

しかし、内部は無重力で、広さの割に移動に然程の問題は無いようだ。

ライナはあまりの本の蔵書量に、驚きを隠せないでいる。

まあここは、本局の一施設で、管理局の管理を受けている世界の書籍や情報の全てがストックされる場所だ。

底が見えない長い縦穴型の施設で、壁は全てが本棚となっている。フェイトは、微笑みながら言う。

「ここはね、もともとすごく未整理な場所だったんだ。

日々、世界中の本が、ここに記録されるから、どんどん本が増えて整理できなかったんだよ

だから無限書庫っていうんだけどね」

「ほえー」

と、ライナは高い天井を眠そうに見上げて、広すぎるこの空間を面白そうにキョロキョロ見た。

それにフェイトはくすくす笑う。

まるで、小さな子供が、沢山のおもちゃを見て、喜んでいるように見えたからだ。

そしてライナは、そんなフェイトに気づいて、少し恥ずかしくなったのか、ぼりぼりと頭をかき、

「んだよ………ってそっぴや、ここが『未整理だった』とかいってたな

そりやどういうことだ？」

とりあえず文句言うより興味を優先させた。

すると、フェイトは「うん」と頷き。

「ここにはユーノ、ユーノ・スクライア司書長がいるんだ。

私と同じ年頃でね？ 友達なんだ」

「ふーんすげえんだな……よくわかんねえけど」

「うん。私が使っ頃には結構整理されてたから、私もどう凄いか分からないんだけど、

この広さだから想像は付くよね」

「まあ、確かになあ」

そう言って、改めて無限書庫の広さに、目を向ける。

フェイトはクスと笑って、

「ユーノがいうには、探せばどんな情報もちゃんと出てくる場所なんだって。探せばライナの世界の情報もあるかもしれないね」

フェイトは微笑んでさういう。

が、ライナは罰の悪い顔をして

正直ないんだろっとなーと、思う。

やはり、この世界と、自分の世界じゃ魔法のあり方が違いすぎる。だから、ライナはおそらく次元世界を全てひっくり返して違っんじやないかなーと思う。

矛盾してておかしい話のような気もするが、そう思うのだ。
まあ、探せるなら探せるときに探すか、とライナは思い。

とりあえず今は新しい魔法の見てみたいという衝動、というようなモノに押され、

ライナはフェイトを急いだ。

とりあえず、一ついえるのは、ライナは魔法に関しては天才、という領域を超えた化け物であった。

まず、ライナはフェイトに、この世界の魔法の基本を教えてもらった。

まずは攻撃魔法だ。

射撃

小規模な遠隔攻撃魔法の総称。「誘導制御型」「直射型」「物質加速型」がある。

砲撃

大規模な遠隔攻撃魔法の総称。「直射型」「誘導制御型」「集束型（最高難度のエクストラスキル）」がある。

魔力斬撃

命中対象を切断する特性を帯びた魔力による攻撃魔法の総称。

遠隔発生

使用者から離れた場所で発動する魔法の総称。

広域攻撃

一定空間を攻撃で包み込む空間単位攻撃魔法の総称。

魔力付与攻撃

魔力によつて強化、或いは何らかの効果が付随した武器や肉体による攻撃の総称。ベルカ式魔法の基本。

とりあえずはこのようだ。

そしてライナはこれらの魔法の発動概念を聞く。
するとフェイトは「うん」と頷き。
答える。

「つまり――」

『超科学』だ。

科学。といえば、車やテレビ、兵器、などそれらに分類されるものだ。

それが行き過ぎて魔法を作り出したらしい。

だが、ライナは魔力を使うなら、『こちら側』ローランドで使われるような魔法と同じような分野に入るんじゃないの？　と思う。

ライナはまずは、ここの魔法と接点が強いデバイスに関する書物を読む。

デバイスの内部構造。特性を調べる。

そして次に魔法の特性。魔法がどうやって作られ、どうやって発動するのか、事細かに、速読、というレベルで読み進めた。

そして、分かったのは、やはりこちら側にも属していることだ。
つまりはオカルト。

肉体の強化など、まさにそれに当たる。

ある程度は、ここの魔法のあり方も、ローランドなどの魔法と変わらないようだ。

ただ、発動方法が違うだけ。

引き出す方法が違うだけ。

魔法の発動に体を動かすのではなく、代わりに機械が補助してくれるので、攻撃魔法は肉体を通してデバイスへ。

そして肉体強化は、自分の魔力を循環させたり、デバイスのなんらかの力でもたらされるらしい。

肉体強化といえば、エスターブールの魔法騎士を思い出す。

彼らは指の動作で魔方陣のようなものを作り、それで自分の肉体を強化する。

ここではデバイスを通してor自分の肉体を通して肉体を強化する。

彼らの魔法とここの魔法は、ほとんど変わらない。

ただ、自分の魔力と外気の魔力を同時に使うことを一つの動作でするエスターブールのほうが発動は早いかもしれない。

なにせ、エスターブールの魔法の発動には、本物の強者になると一瞬の時間も要らないからだ。

そして、この世界の魔方陣は、こちらの世界と確かにありようが違うが、しかし、見た感じ普通に弄れるレベルだ。

複写眼で見てもおそらくそう見えるだろう。

だから、魔方陣や魔法の弄り方は、どっちもそこまで変わりはない。
い。

ならば、と、ライナは本に書いてあった魔法の無駄を指摘する。

「なあフェイト。このソニックムーブってさ、この陣を弄るだけで魔力の無駄が抑えられて、安定度がますんじゃないかねえの？」

と、眠そうに指摘する。
すると、

「え？　なんか、ライナが集中してるなーって見てたのに急にどうしたの？」

「ん？　ああここの魔法、面白くってさ
でさ、この魔方阵。なんか適当すぎじゃねえ？」

と、ライナは適当にごまかして、フェイトに陣の指摘を試みたと、すると、

「ん？　魔法陣って、そんなに重要なの？」

と、そんなことをいった。

それに、ライナはガクツと脱力する。

まず、魔法使いとしてのうんぬんの問題だった。

まあ、書物を読み進めていくうちにライナがわかっていったことが……。

そもそもここの魔法は無駄が多い。

何故か魔方阵は最大限『威力』に力が割り振られている。
バインドもそうだ。

テクニクも必要なようだが、最後はどうしても力任せ——
つまり力勝負になる。

だからだろう。

ここの魔法が、魔力の大きさを才能を決めるのは……。

魔方阵は威力を底上げできるし、色々な複合で多種多様な攻撃を作り出せる。

この世界でも、確かに多様な魔法はあるようだが、それにしても少なすぎる。

この世界は魔方阵の有用性を完全に見落としている。

それは、デバイスの心強い補助も『魔方阵』といった大切な要素を見落す要因になっている。

つまりデバイスが主の魔力をうまく吸い出しすぎなのだ。

吸い出した魔力は、威力と持続に還元され、強化される。

だから、魔方阵をいじり、自分のテクニックを作る必要を迫られないのだ。

だからだろう魔方阵という大事な要素を見落とす原因にもなっているのは。

そうライナは思い。
フェイトに、

「とりあえず魔方阵のうんぬんで、管理世界は大きく変動するんじゃないの？」

「へ？ ええええええ！？ そんなに！？」

「お静かに」

「あつすいません！」

と、フェイトが司書の方に怒られ、頭を下げる。

そして、フェイトは驚いたまま、ライナに向き直る。

「どういう意味なの？」

そう聞くフェイトに、ライナはどう説明しようか、と考え。

「むにゃ……」

ねた。

あまりにもやらない、仕事、というものをやった疲れと、
久々に真面目をやったのでひどく眠くなったのだった。

しかしそんなことフェイトには関係無い。

むしろ関係あっても聞きだしたい。

そんな気持ちだ。

「ちよつと！ 寝たらダメだよ！ 気になるよ！」

と、ライナをがくがくとゆするが、「んあ……」とうめくだけで
起きない。

それに、フェイトは強引に起こそうとやわらかくペシペシらしいな
のほっぺたをたたく。

が、起きない。

なら、と

「起きないと枕没収するよー!!」

と、大声で言い放ち

「んえ!?!」

「静かにしなさい!!」

ライナは飛び上がり、司書はぶちきれた。

とりあえずフェイトは司書に怒られた。

フェイトはぺこぺこ頭を下げるのであった。

そして、起きたライナは自分の枕がエスカレーターにはさまれてぼろぼろのを思い出し、ひどく憂鬱になった。

19:???

噂が流れている。

「どうにもライナって男はなのはさんだけではなく、あのフェイトさんまでも毒牙にかけているらしいぞ!!」

「マジで!?!」

「しかも枕没収しちゃうぞ」なんてかわいらしく言っただらいい。こりや間違はなく同棲してんだろ!!」

「ほんま!？」

「ほんまほんまってなんで急に関西弁？」

とか、そんな噂が流れたようだ。
ライナの運命はいかに。

しばらくして、ライナは独学で魔法を覚えていった。
主に、頭の中でだ。

つまり実践はしていないのである。

デバイスを持って見るまでどうなのか分からないからだ。
しかし、理論でいえばデバイス無しでも魔法は使える。
そうは思っている。

が、ライナはとりあえず、説明の懇願をするフェイトに、だるそ

うに、仕方無しに答えてやることにした。
が、更に

「どう？ 調子は」

「あつなのは聞いて！ ライナが！ ライナが！」

「どど、どうしたのフェイトちゃん！？ ライナに何かされたの
！？」

と、なのははフェイトを落ち着かせ、とりあえず話を聞くことに
した。

まあライナはなんで俺が何かする前提なんだよ！ と怒っていた
が。

とりあえずは、フェイトがなのはに、ライナが言っていたことを
説明する。

すると、なのはも、驚いた顔をする。

そして、

「すごい。ライナって魔法の天才なんだねーほんとに魔法初め
て？」

「それは分からなくなってきたよ……でも、魔方陣ってす
ごく重要な鍵なんだって」

「へえ……魔方陣か……着眼点が凄いだね……って気づかなか
った私達が異常なのかな？
普通気づくきがするけど……」

とかなのはも自問していたが、答えが出なかったもので、とりあえずライナの言葉に耳を貸すことにした。

お話・解明・説明の三本です（後書き）

答 化学反応？ ないない。西博士が飲みつくすに決まってんでしようが！！

ガチの人工生命。つまりロボットで人間を作りおったのだよあいっは！！

無から有を作りおったのだよ！！ アゝイムロックンロール！！

どうでもいいか。

さて、後半に続く。

今回は、ライナが魔方陣の重要性を説いてますね。

まあライナの世界。

魔方陣超重要ですからね。

でもリユーラは使って無かったよ？

すげー。

さて、どうでもいいね。

エー今回は、ウロボロスが意外に面白かった。

あと、月姫と歌月十夜1200円で中古ってた。

買った。仕方ないよね。

1200だもんね。

おわら！！

えきさいていんぐ・もんすたー（前書き）

えー……どうしてこうなった！ どうしてこうなった！ どうしてこうなった！

いや、あれですよ……。

ライナの複写を使うには、前例というか、科学技術魔法でも複写できるだよ？ っていうことを伝えたかっただけなんだ！

俺は悪くない！ 別に……死ぬのが怖いわけじゃないんだ！

いやだああああ死にたくないいいいいいいって感じなんだ！！
信じていただきたい！！

問
ゲーム

えきさいていんぐ・もんすたー

sideフェイト

ライナが魔方陣の有無が管理世界を覆すかもしれないといって、私は驚いた。

というより、その前の説明で色々と期待した。
だから私はライナにどういうこと？ って懇願した……のに。

「魔法陣ってどう重要なの！？ って寝ないで教えてよ！」

なのに、ライナは寝てて、教えてくれない。
ひどいよライナ……これじゃ生殺しだよ……

「ねえ、ライナってば、ライナ？ 起きないと怒るよ！」

でも、ライナはおきてくれない……
本気で寝ちゃってる……
うう……気になるよ……

「ちょっと！ 寝たらダメだよ！ 気になるよ！」

私はライナをかくかくと揺するが、「んあ……」とつめくだけで起きてくれない……。

ここまでしておきてくれないなんて……眠りが深すぎるよ……。
もう、ライナのほっぺをたたいて起こしてみよう、えいえい。
けど、起きない……。

ここまでして起きないなんて……どうしよう……って、あ！ い
いこと思いついた！

「起きないと枕没収するよ!!」

と、私は大声で言い放つと

「んえ!？」

ってライナはすぐに跳ね起きた。

なんか、言うこと聞かなきゃおもちゃ捨てるよ? って言われて
起きる子供みたい……。

ふふ、なんか可愛い……。
そう思ってたなら

「静かにしなさい!!」

騒ぎすぎちゃったのか司書さんに怒られちゃった……。

うう……ライナが起きてくれたのは嬉しいけど踏んだりけつたり
だよ……。

でも、ライナの言う、理論が本当なら……ううん。

期待は半分だけにしておこう。

もし間違ってたなら、私はひどい落胆するだろうから。

私の都合でライナに心労かけるわけにもいかないしね。

でも、期待はせざる得ないよ……。

もし、ライナの理論が本当なら、キャラの自信にもなるかもしれ
ないから……。

なのはの仕事がライナのおかげで速く終わったみたいで、無限書庫にやってきた。

へえーライナって書類仕事とか得意なんだ。
意外な特技だ。

と、思ってたならライナが説明をするみたいだ。
ひどく眠そうで、面倒くさそう……。
むう。

いいじゃない、あれだけ意味深なこと言っておいて、答えないってほうが悪いよ！

まあ、答えてくれるんだがら、そこは追及しないで上げよう。
機嫌悪くして説明してくれなくなるのは困るもんね。

ライナは、輝く瞳で見つめてくるフェイトの瞳に若干引きつつも、仕方なく答えることにした。

ライナは一旦ため息をついて眠いなと呟いてから、答えることにする。

「んじゃ、魔方陣の重要性を解説する。めんどくさいから2度はいわないからな」

「うん。そこは大丈夫、音声録音するから」

「録音？　なんだそりゃ」

「音を録っておくことができる機能だよ。フェイトですって録るとフェイトですって聞ける機能」

「ふん」

と、フェイトは聞き漏らさないように録音する気満々だ。
なぜ彼女をここまで駆り立てるのか、それはライナには分からない。

が、フェイトには思惑がある。

ライナが言うように、魔方陣を弄ることで、ソニックムーブの安定性向上ができるなら、と思い。

もしかたら、召還魔術の安定性もそれであがるのでは？ と、自分の娘のような少女のことを思い出し、その娘に、安心できる材料を与えたいと思っていた。

それは、まさに娘を想う親のような顔であった。

それに、ライナは気づき、また一つため息をつき、普通に説明することにした。

ライナも散々苦労してきたのだ。

フェイトが淡い希望を抱いて、何かのために自分から魔方陣の事

を聞こうとしている。

それくらい読む力はあるのだ。

「んじゃ、説明するぞ？」

というと、フェイトはうんうんと頷き。

なのはは、うんと頷いてからこちらを真剣に見る。

何かを測るかのよう瞳でだ。

ライナはそれを気にせず、続ける。

「んじゃ魔方阵つてのはつまり空气中に世界を埋め尽くすように存在する気の流れ自分の中の魔力を、法則に従って並べ替えるための、制御、もしくは強制するためのものだ。

それくらいは……書物自体少なかったけど本に書いてあったから分かってると思うけどどうよ？」

『……………』

「いや、そつぽ向いてないで知らないなら知らないっていえよ……
…つたく

お前ら結構すげえ階級なんだろう？

なのにそんなのも知らないってのは……ほんと、ある意味この世界はすげえよな……」

と、ライナはあきれ半分、驚愕半分つてところだ。
それに、

「だって、魔方阵なんて、元々完成されてたし、そんなに変わらないから気にしてなかった……」

「うん。私も……」

「そこが問題だよな」

「へ？」

と、ライナは思わずあきれる。

この世界に、そういうのを伝えるのがないのだ。

ライナの世界には、魔方を開発する研究者がいて、それらが魔法を、魔方陣を作成する。

やばすぎるものだったら禁忌指定にしたり、使えるものならばばん世に送り出す。

そして、その成果を他の人間が勉強する。

そんなものだ。

しかし、この世界。

そのようにアプローチする存在が極端に少ない。

というより殆ど居ないといってもいいほど少ない。

だから、ライナはため息をついて、どんな世界だよ……と言葉を漏らした。

そして、なのはとフェイトは先ほどのライナの言葉に違和感を感じた。

「そこが問題だよな」と答えたライナ。

それも極自然に答えたのだ。

この管理世界を生きるものなら、だれもが疑問を持たなかったことにだ。

だから、二人は違和感を感じた。

まあそれをおいて置いてライナは

「魔方の開発に関する書物がすげえ少ねえんだよな」

元々既存の魔法を使うか、それともその既存の魔法を弄るかでし

かない。しかも弄るにしても極端に威力を上げるとか、極端に技術向けにするかだし……なんなんだよここ……。

どうやって科学で魔法を作り出したんだ……？

もしかしたら科学的アプローチだからここまで極端になったのか

……？

科学つてのまだ今一理解してないからまだ判断できねえし……。

でも、なら魔法をどうやって作り出したんだよ……？

……この歴史なんてしんねえーから全くわかんねえ……

デバイスが勇者の遺物みたいなもんなら……まだわかんねえでもないんだけどな……」

と、勝手に考察に入る。

この世界の魔法は、というより魔方陣は、正直おかしい。

力に割り振られた設定であるのもそうだが、そもそも魔方陣自体全て似たようなものだ。

魔法によって所々違うだけ。

デバイスの中で何か色々処理されているのかとも思うが、普段は使わない者もいる。

もう、そこら辺を考えると混乱の極地に行ってしまうのでライナは考えるのをやめた。

成立しているのなら別にいいではないかと。

弄れるならそれでいいのではないかと。

決して考えるのが面倒くさくなったわけではない。

……うん、決して。

そこで、そういや、と一人で勝手に思考に没頭していたライナは、フェイトたちのことを思い出す。

そして、前を見ると、

「ライナって……もしかして魔法のこと知ってないかな？」

となのはが、そんなことを言う。
フェイトもうんうんと頷き。

なのは同様に違和感を覚えていた。
ライナの、魔法に関する洞察、というか考察が深すぎるのだ……。
だから、それを質問すると、ライナは

「へ？ …………… いや、俺ってば知らないよ？

全部ここの書物から得た知識だよ？

ええと………… なにその訝しそうな目…………」

ライナは冷や汗を流しながら、二人を見る。

できるなら納得して欲しいと。

面倒くさいことには巻き込まれたくないので、自分の魔法に関し
てはれたくないと………… そう思う。
が、

「なんでライナはそんなに汗を流してるの？」

と、なのはが、暗い笑みで、言う。

正直、怖い。

拳が飛んできそうだ。

が、もう一つ厄介なのがいた。

フェイトだ。

何故か、涙目だ。

「私達にもいえないことなの？」

正直ええーと、なる。

確実に俺が嘘について魔法のことを隠してんじゃねえかーって思
われてる。

と、ライナは思う。
だから、ライナは……

「ええと……実はというと……俺んちのすぐそばでなんか変な歪み起きてそこから魔法の本が出てきたんだよねーそれで知識だけはあるんだよねえーあははははは
信じて貰えそうにないから言わなかったただだよ」

と、これで納得しろー！ とライナは心で懇願する。
が、フェイトとなのはは、神妙な顔をする。
そして、二人はそのまま話し合う。

「うーん。本当かな？」

「でも、なのはやグラムさんの前例もあるし……。
ユーノや管理局の人が巻き込まれるより可能性はあるかも……」

「うーん。確かにそうだね……。
でもフェイトちゃん？」

そんなに特異な人間がそういるとも思えないよ？」

「でも、本当だったらどうする？」

「うーん……」

と、そんな話し声が聞こえてくる。
ライナは、緊張していた。

この判決有無で、自分の処遇。

つまりは面倒くさい事柄に縛られるか縛られないかの判決待ちなのである。

そして、判決は出た。

「うーんなんか、まだ納得はできないけど……」

「うん、それは私もそうだけど……」

「でも、確かに人を疑いたくないもんね、それに、それも悩みの一つだったら嫌だもんね」

「そうだね、話してくれるときが来たら、話してくれると思う」

「そうだね」

なにか、ビシビシと刺さる会話だった。

主に、ライナの良心的に。

そして二人はライナに

「ごめんね、疑っちゃって……」

「うん、私もごめん」

と、なのはとフェイトが謝ってくる。

無用に良心が痛い。

面倒くさいから言わないってだけなのに、ここまでされては逆にライナが苦しい。

だからライナは……

「そんなことは良いよ、俺は気にしてないぜ？ さ、話を進めようぜ……」

流した。

綺麗に。

上から目線で。

ライナの良心は小さかったのであった。

「んじゃ話の続きだ」

と、ライナは、幾分まじめな表情で語る。

良心が痛むからとかではない。

そう、決してそうじゃない！！

と、ライナは冷や汗を流しながら自分に言い聞かせる。

「えっと、制御のどこまで話したんだっけ？」

と、ライナは頭を？きながら、片目をつぶって言う。

それに、フェイトはうんと頷く。

ライナはそれに頷き話を続けた。

「魔方陣は制御回路、つまりは魔力の循環路で、集積路だ。

作り方の違いで、形の違いで循環が変わって、生まれる出てくるのも変わるんだよ」

「？」

フエイトとなのはは首をひねる。

今一よく分らないようだ。

だからライナは頭を？きつつ、どうしようと思いつつ、たとえ話を出す。

「えつとき、例えば積み木ってあんじゃん？

あれと同じで組み替えればいろんな形になるのと同じなんだよ
つまり魔方陣を組み替えることで、炎という積み木を作って、
そこからその積み木を強靱にしつつ安定性を生む積み木を作れば
いいんだよ

だから俺の話は積み木の魔方陣版だ」

「ああ」

と、二人は得心が行ったのか、納得行くような顔で頷く。

そこで、ライナは言っていて気づく。

そっぴゃ、魔法陣とかつくんの精神鍛錬して金色フワフワとか見
なきゃなーと思う。

でも、あれ？ でもそっぴゃここの魔法陣みえてんな？ 科学の
粹か？

と思う。

でも結局見えてんだからいつかと結論付けた。

「結局のところこんなもんだな。

細かいことは色々あんだけど。

まあこんなもんだ。

後は陣の作成だったり、既存の魔方陣の弄って安定正を出したり
と、

まあその程度だな」

と、ライナ説明し終える。

それにフェイトはなるほどと頷き。

なのはは……まあ当然怪しんでいた。

が、聞かないのは、彼女の優しさだろう。
だから、ライナは言う。

黙っているせめてもの、罪滅ぼしとして。

「たぶん俺、魔方陣つくれっぞ？

フェイトは、なんか言いたそうだし……

何かあんのか？」

そうライナは、言う。

するとフェイトは、食いついてきた。

彼女の願いは、とある召喚師の少女の話だった。

彼女は、勇気が出ず、召喚術を使うことを怖がっているらしい。そういう話であった。

だからフェイトは、勇気の出るようなそんなものをプレゼントしたいらしい。

それが魔法陣とかどうなの？　ともライナは思うが、フェイトの優しさに、ライナは少し嬉しそうに眼を細め、仕方無しに作ることにした。

「とりあえず魔方陣を見せてくんねえ？
じゃないと弄るにもどうにもな」

と、ライナはフェイトに聞き、フェイトは携帯らしきものを取り出し、その写真を取り出す。
それをライナは見て、

「なあフェイト？　これちょっと貸してくんねえかな？」

「え？　うん。いいけど」

「ん、ちよつとごめんよつと」

と、ライナは携帯を借り、二人に背を向ける。
そして、目を隠すように手でふさぎ、

――視る。

その魔方陣を、忌み嫌われた、赤い瞳で。
大量虐殺の象徴の、その魔眼で、見る。

その瞳は、名のとおり複写の眼。
複写眼。

それは、魔法を見るだけであらゆる構成を読み、あらゆる特性を
見切る瞳。

ライナは、その瞳を使い。写真に写っている魔法陣を見た。

3

（属性は無。起動方法こつち特有の魔方陣で、補正数値は0・7・
つと写真でも見れるんだな、これ）

とライナは妙に納得して複写眼を元の瞳に戻す。
そして、振り返り、フェイトに

「紙とペン貸してくんねえ？
今から書くから」

フェイトは急いで紙とペンを取りに行った。

なのはは、ライナを怪訝な瞳で見る。

というよりかは、嬉しそうに、でも、少し寂しそうに見る。

気持ちは複雑であつた。

やはり、ライナは、フェイトのために魔法を作るといふ、苦勞を引き受けるくらい、心優しき人間だとわかつたのは嬉しい。

けど、やはり隠している。

何かを隠している。

ライナの、あのありえない魔法に關しての知識量。

そして、魔法陣を一目見るだけで色々と見破る眼力。

ライナは、一体何なんだろう？ と、思う。

今まで魔方阵に關して指摘するものはいなかった。

それ以前に目をつけるものがいなかった。

それをライナは、一歩どころか何歩も先を歩いているかのように先を見ている、見えている。

ライナは、一体どこの世界から来て、何をしていたのか、一体どんな知識を持ち、何を見てきたのか、そう、まるで好きな人と思うかのような、そんな気持ちで、なのははライナを見た。

フエイトは急いで帰ってきた。
紙をとペンを猛烈な数を揃えて持ってきた。

「いや、こんなにいらねんだけど……」

フエイトがどれだけあわてていたのか分かる
自分の娘のような少女に、勇気を与えられるかもしれない。
そう思うと、胸がどきどきして、嬉しくてたまらなかった。
だから、急いでデスクに戻り、とりあえず目に付くペンと紙を持
ってきたのであった。

ただ、冷静になると、なんでこんなに持ってきたんだろう……と
思うのだが、それはまだ先だ。

フエイトは言う。
期待を胸にして。

「で、どうなの？」

「ん？ まあ、こりや確かに難しい術式だな。
なんつーか、異様に技がいるというか、気合がいるというか。
制御にだいぶ才能と無理がいんな」

「……できるの？」

と、フエイトは不安そうな顔で、ライナに言う。
するとライナは、

「いや、できるから紙とペン持ってきてっただけだな。
信じてねーのか？ まあ仕方ないか、俺ってば怪しいもんな」

と、ライナは苦笑いする。
すると、フェイトは、あわてて

「え？ い、いや違うの！ こういうの初めてだから不安で……。ライナのことを信じてないんじゃないよ！？」

とフェイトは困ったように慌てて言う。
それにライナはくっ笑し、

「わーてるよ、ただの冗談……。あだだだ耳をつねんたってっであたたごめんごめんって胸をなぐんな、もう冗談いわねーから！ ってごめんぎゃあああああああ」

「もう、心臓に悪いよ！」

「俺は体全体が痛くてそれ以上に悪いんだけど……………」

ライナは必要以上に殴られ、半泣きになった。
もちろんこれはライナが悪いであろう。
そうに違いない！

ライナは半泣きで紙に魔法陣を書いていく。
それも、今までより確実にマシ、にするために。
なぜ、マシにするだけなのかというと。

もともと魔法の開発は時間がかかる代物だ。

この世界の魔法陣のように極端でなければ直しにも時間がかかるし、開発にはもっと時間がかかる。

ローランドも魔法で言う稲光いすちがいい例だ。

稲光は元々古くから存在している魔法だ。

だが、ライナの世界ではつい最近改善されたのだ。

元々魔方陣の展開速度に難のある魔法であったが、カのリユーラ・

リユートルーが15歳のときにそれを改善するための術式の論文を考案していた、が、の論文に関する功績はその後、抹消されている。

だからライナもそのことは知らない。

その上この魔法陣のさらに綻びをライナは修正して使用している。だから、魔法陣の修正、更には魔法陣の作成には時間がかかるのだ。

そのことをライナは分かっているながらも、魔法陣の修正にかかる前にも言ったが、この召喚魔術といわれる魔法は、極端に制御が難しいのだ。

だから、ライナが稲光を修正したように、この魔法陣も使いやすくなるように修正する。

ライナはそれをするだけだ。

そして、20分後。

途中試行錯誤しながらも完成した。

元の魔法陣とは少し形がかけ離れたが、しかし、完璧にできた。そして、ライナは宙に指揮者のように指を上げる。

「？」

「？」

フェイトとなのはは頭に？ を浮かべ、ライナが何をしているのか、黙ってみる。

すると、ライナが半瞬で宙に魔法陣を書き上げた。

「……へ？」

「……え？」

思わず二人は絶句。

しかし、ライナは今、致命的な自分自身に関するネタバレをしていることに気づいていないのか、更に呪文を唱える。

「えっと、『天地貫く業火の咆哮、遥げき大地の永久の護り手、』

」

「へ？ それって……ちよつ、ちよつとライナ！？」

「どうしたのフェイトちゃん？」

「これってキャラの言ってた召喚魔術で……あ」

フェイトは、なのはと話していて、しまったと、思った。
なぜならもう話している隙にライナが魔法を完成させていた。
ライナは高速で魔法陣を完成させ、呪文も詠唱し終える。
だから、よりフェイトは慌てた、何故なら――

「『我が元に来よ、黒き炎の大地の守護神。竜騎招来、天地轟鳴、
来よ、ヴォルテール！』」

――ヴォルテールという巨大怪獣を呼ぶことになるから。

無限書庫は阿鼻叫喚だ。

巨大な怪獣が現れ、その怪獣が、暴れるでもなく、静かにたたずんでいる。

それが逆に恐怖を煽り、無限書庫内の人間は逃げ惑う。そんな様相だ。

ちなみにライナは

「は……？ ああ……なんじゃこりゃあああああああああああああ
あああ」

叫んでいた。

こんな大きなのを呼ぶとは思っていなかったみたいだ。

「はあ！？ なんか妙に魔力食う召喚魔法だと思ったら……
何じゃこりゃあああああああああああああ」

どこかの俳優よろしく叫んでいる、が。

フェイトとなのはが慌てて、ライナの肩をゆすり

「は、早く元に戻して！」

「そうだよ！ はやくはやく！」

「あ、ああ……そうだな……返還！ ……………ふう」

ヴォルテールと呼ばれる竜は魔法陣の中に戻り、静かに帰っていた。

そしてライナは、一息つき、フェイトたちに向き直ると、

「あ……やば……」

ピシッ！ と固まった。

二人の目は、なんと言うか、凄く強烈であった。

そう、もはや言い逃れはできないレベルであった。

間違いなくライナ・リユートは……

二人の目の前で魔法を使ったのであった。

ライナの運命はいかに！！

えきさいていんぐ・もんすたー（後書き）

答え 大番町。

いや、OPがいい曲だね。

聞きほれちまうぜ。以上！

さてさて、ここでお知らせ。

なんかもものすごい勢いでお気に入りが増えた！

感謝！

さて、今回はやりすぎちゃったかな……って、ユーノ君駆けつけてくんじゃねえの？ っもおもう回でござった。

さて、そんなことはどうでもいい。

魔法理論。

ほころびとか矛盾とかなのは的設定としておかしくね？ って思

う君！

気にしない！！ 俺も気にしないから君も気にしないほうがいい。そくに決まっているんだ！！！！

次。

俺の友達（中指と人差し指が）火傷した。100度のお湯とか正直やばい。

次

やっぱりマブラブが面白い。

次
無し

お
ま
る

堕ちぬ君よ

ライナは、本局のとあるブリーフィングルームにいた。
というより連れ込まれた。

ここは、任務のための話し合いや、作戦の話をしたりする、いわゆる作戦会議室だ。

そこに、三人はいる。

あの後、ライナは、なのはたちに急いでここにつれてこられた。
というのも、流石にあの場にいれば、色々と面倒なことになる上に、ライナへの尋も……質問ができそうになかったからである。

このブリーフィング・ルーム。

ここは、四角い四隅の部屋で。

入り口から見てコの字型に長机が配置された、6人も入れれば狭苦しさを感じるような、ちよつと部屋の間取りを間違えた部屋である。
しかし、防音、ともに頑丈さは折り紙つきなので、鍵をかければ誰かに聞かれるということはまず無く、誰も入ってこない。

だから、なのはたちはこの部屋を選んだのである。

そして、その入り口からコの字上の上座の長机にライナ、下座にフェイト、なのはと、まるで——座る位置は逆だが——会社の面接を一瞬想像させる配置で、面接官と対面するかのごとく重苦しい雰囲気になっていた。

まあ、重苦しいのは、主に、ライナが魔法を使ったことにあるわけだが。

……自業自得である。

そして、ライナは冷や汗を流し、引きつった笑みで二人を見ているが、

逆にフェイトとなのはは、二人して、笑顔だ。

「あう……」

ライナは、頂垂れた。

当然痛みで。

とりあえずライナは思った。

グッバイ短い普通の人生の幸せ、と。

ライナは心の中でそう思いながら、これから面倒くさいことが起
んだろうな……と、気を落とす。

主に、ローランドの魔法に関しての管理局の問い詰めだ。

そしてその前に二人からのお叱りだ。

だがまあ、ライナが怒られるのは当然だ。

あんな場所で巨大怪獣を召喚したんだ。

今頃、管理局本局は大混乱だろう。

むしろ連行されずに、ライナの話を聞くためにこんな部屋にこれ
ただけでも幸せものだ。

フェイトは、張り付いた笑顔を普通の笑顔に戻し、ちょっと寂し
そうにライナに聞く。

「ねえライナ？　ちゃんと、話を聞かせてくれる？」

フェイトは、少し複雑な気持ちで聞いた。

ライナは、自分の娘のような少女のために魔法を作ってくれた。
それが嬉しくて、だから庇ってやりたいのは山々なのだが、流石
にあれはやりすぎだ。

今頃、犯人は誰だ！？　と、搜索が始まろうとしているだろう。
そうすると、各所方面に迷惑がかかる。

まず、召喚師自体が稀有だ。

だから、召喚師のレアスキル持ちの人が疑われるだろう。

だがまあ、キャラ口は今本局にはいないし、アリバイもあるだろう

から疑われても大丈夫だ。

でも、なら誰だ！？ と、犯人が目の前にいるのに、無駄な捜査費をかけて犯人探しが始まるだろう。

するとどうなる？ ライナは元々魔法を使えないという話で管理局にきている。

だから、犯人はみつからず捜索は難航するだろう。

その上、ただでさえ人手が足りない管理局の人間が派遣され、他の人たちの仕事が伸びる。

しかし犯人は見つからない。

そして、更に執拗に捜索は始まるだろう。

内部の人間が内部の人間を疑い、疑心暗鬼になる。最悪だ。

その上、結局犯人が見つからなければ、世間からは管理局は組織内で起きた事件にすら対処できない無能という判の押されるだろう。もしくはそれを恐れて上層部が、管理局内での生贄を造るかもしれない。

そうすれば、その人にも、管理局の皆にも迷惑をかけることになる。

だから、ライナを庇うわけにはいかないのだ。

管理局の人間として、でもだ。

しかし、ライナを守りたいのも本当だ。

むしろ、助けてあげたい。

それは、なのはだって同じ思いであろう。

二人とも、ライナのことはもう他人ではないのだ。

だから、ライナに話を聞いて、話せる話と話せない話を分けて、管理局に報告し、なんとかする気だ。

だから、フエイトは、言う。

「あのライナの魔法は、なんなの？」

少し、心配そうな顔でフェイトは聞いた。

今まで、ライナが魔法を知っているかもしれないと、薄々気づいていながらも、ライナの聞かれたくない過去に触れるかもしれないと、また、あの瞳にさせるかもしれないと、聞かないようにしてきた。

本当にライナの聞かれたくない話なら、彼を傷つけるだろう……そうフェイトは思いながらも、仕事だと、ケジメをつけ。

職務を全うするために、でも、少し胸を痛めながら、ライナに不安そうに聞いた。

……だがまあ、ライナの心情といえば。

（はあ……俺の魔法がばれりや……めんどくさい事になるんだろ
うな……例えばあれだ。睡眠無し無し君の刑で俺から魔法の情報を
搾り出すんだろぅな。）

……ってうお！？　なんかフェイト泣きそうなんだけどなんで？

こんなもんである。

ただの、めんどくさがりであつた。

残念な男である。

されど、流石にライナも、あんなことを起こしてしまったんだ。
言い逃れできるとも思っていない。

むしろ、ここで話したほうが、なのはもフェイトも安心するだろ
う。

そう思って、

「はあ、分かったよ。今更言い逃れできるなんて思っ
てないし、好きに聞いてくよ。」

ちゃんと俺の魔法のこと、話すから」

そういった。

するとフェイトもなのはも、嬉しそうに微笑む。

そして、ライナは、口を開く。

「えーと、ローランドの魔法……ってローランドのことしんね
よな……。」

あれ？ んじゃ、どうしゃべりゃいいんだ？」

しかし困っていた。

そこで、フェイトはフォローを入れる。

「えっと、魔法のことについて話してくれればいいよ？」

「あー……んじゃまあ、一つ言つと」

と、ライナは説明した。

まあ俺の世界にはローランドって国があるんだよ。

そのローランドでは国特有の魔法がある。

魔法の研究者もいて、色々やってる。

主に軍が魔法を使ってる。

「以上」

「大雑把過ぎてわかんないよ……！」

フェイトは思わずツッコミを入れた。
どうやら、ライナのボケに即座にツッコミを入れるほどの達人に成長したようである。

フェイトは全然嬉しそうではないが。
そして、そんなフェイトを置いておいてなのはが……

「ライナ？ いい加減にしないと怒るよ……？」

……黒い笑みで言った。

ライナはOHANASIの予感がした。
主に拳の。

そのことをライナは、今までの人生で培ってきた危機察知能力を全快にし、

自分を全壊されないよう、いつもは猫背でだらしない姿勢を正してしっかりと話させていただくことにした。

まあライナは、姿勢を正した状態でも渋々といった状態だったが。

「えつとな……えー……俺の魔法は……たぶんこの世界には存在してねーと思うんだよなあ……」

ここで言うミッドともベルカとも違う。存在しない世界の魔法だと思っただよな」

ライナは何でもなしにそう、言った。
この世界に、自分の世界は無い、と。
すると、なのはが、ライナノ言葉の意味に困ったように

「え？ それって、ミッドチルダには無いってこと……？」

そう、なのはが、ライナの言葉の意味に困惑気味に言う。

しかし、ライナは違うと首を振る。
そこで、フェイトも

「……え？ それでってどういうこと？ ミッドとベルかとも違う……そんなの聞いたことないよ？
それに、どこの世界もミッドかベルかだし……ここと違って……
…そんなに変わらないよ？」

そう、フェイトも困惑する。
まるで意味が分からない。

ミッドチルダは他の世界の基本たる魔法世界だ。
まず、他の世界より魔法が進み、魔法の基礎であり発展ともいえる国。

ここ意外に発展した世界など、
古代ベルカくらいしか、想像が付かない。
でも、ミッドともベルかとも違うのだ。
なら、この考え自体意味が無いのだろう。
それに、存在しない世界とは……。

そこまでフェイトが考えていると、なのはが「……あ」と声を上げた。

sideなのは

存在しない世界かぁ……

それに、ミッドともベルかとも違うんだよね？

それって次元世界に存在するのかな……ん？……次元世界…

…存在しない……

って……「あ」

「……もしかして、次元世界以外の世界？」

「へ？ でも、次元世界って……全ての世界が入ってるんだよね？」

「ううん。フェイトちゃん？ まだ次元世界がなんなのかは完璧には解明された無いんだよ？

だから、たぶん私達の想像外、次元世界全部を含めて別の世界って、ライナは言いたいんじゃないかな？」

「えっ！？ でも、そうなのライナ？」

そういうと、ライナは呆れたような、驚いたような表情で私達を見た。

な、なにか変なこといったかな？

でも、あながち間違っていないきもするんだけど……勘だけど……なんて考えてたら、ライナが口を開いた。

「俺まだなにも言っていないのに……どうしたらそんな発想が出てくんだよ……」

いや……別にあってんだかたいいけどさ……」

？　なんで呆れてるのかな？

当たってるのなら、別にいいんじゃないかな？

なのに、そのアホと天才の両方を見たような目は何なのかな？

「いや、別になんでもないよ……でもまあ、俺には確証がないからまだなんとも言えないんだよね」

そうだな……だからこれは頭の隅にでも留めてくれたらいいや。

まるで魔法系統が違うから、この次元世界には存在しない、って勝手に思っただけだからさ」

って、ライナが言う。

でも、半分確信してるような顔。

ん？　なんでそんなに自信があるんだろう？

そう考えながらライナの説明を聞いたら、私達もそうかも、と納得するようなものだった。

ライナの説明はこうだった。

んじゃ、説明するけど、ローランドって国が俺の世界の俺の国だ
って言ったよな？

はあ？　聞いてなかった？　嘘つくな、今お前笑ったろ、……た
く。

俺の世界のローランド。

そこにはその国特有の魔法がある。

ここから聞けば察しのいいやつは気づくんだろうけど、説明する
からな？

俺のローランド、それ以外の国にはその国特有の魔法がある。

例えるならエスタブルって国とネルファ皇国って国があるんだ

よ。

どの国にも独特の魔法がある。

あ？　どんな風に独特だった？

だから今説明してんだろうが、質問は後だよ。

まあ言っただけで、独特の魔法がある。

どう独特かと言うと、俺の国、ローランドは魔法陣つまり円形の陣なんだ。

だけどさ、エスタブルって国は詠唱＋空間に文字を刻むんだ。

ローランドは魔法陣。

エスタブルは文字。

ここでだいぶ違いが出るんだよ。

しかも、その国にはその国特有の魔法もあって、ローランドには無い魔法もある。

ネルファも同じだ。

独特の魔法の使い方。

詠唱＋紋様刻印だ。

まあこんな風に全然違う魔法の使い方があんだよ。

「へえ……そんなに多種類なんだ……」

フェイトちゃんがそう呟いた。

うん、驚くほど多種類。

国ごとに魔法があつて、それも国ごとに特別な魔法がある。

正直、驚いたよ。

こっちはミッドとベルカしかないのに……ん？　でも、どうしてこっちはミッドとベルカしかないんだろう？

ライナの世界みたいに、もっと多くてもいいのに？

んー……考えても良く分からないや……

そう考えを諦めると、ライナはまた説明を続ける。

む、もう少し考えるの待っててくれてもいいのに。

……にやははは諦めちゃったけどね……。

んで、魔法つてのは大概が軍が使うんだよ。

魔法は大体軍が管理してっからな。

魔法の開発も軍の研究者だしな。

生活で応用できたり便利なもんは世の中にはんばん出すし、やばすぎるもんは禁忌指定される。

つつても、魔法の開発のは時間がかかんだよな。

何人もの研究者が集まって、それで何日も何週間も何ヶ月もかけて造んだよ。

まあ、そんな感じで魔法が作られんだよな！。

後はまあ……こつちと違って魔法のうちあいだと、こつちみたいな魔力とかの才能の勝負とかじゃなくて、いかに速く魔法陣を書くかで勝負がきまんのね。

達人になると一瞬で魔法陣書きちゃったりすっからな。

でもまあ肉体と魔法を駆使してくるやつだと避けられれば致命的だからなー必ずしも魔法が重要ってわけじゃないんだよなあ。

でも、速いほうが得だから速いほうがいいんだけどな。

ああちなみに俺もそれに早くかけるぞ？

まあそこで、魔法陣を速く書こうとしたら、皆、体を鍛える方向に行っちゃうわけ。

まあ俺は正直うえーて感じだな。

俺も、軍学校に通ってたんだけど、全部寝てたしね。

俺ってばそういうのは嫌なんだよね……鍛えるより寝たほうがいいのに。

それにあつち是非殺傷設定が無いからめちゃくちゃ怪我とかもするしな。

こっちの方がいいよ。

あー後は……こんくらいかな。

そこでライナの話は終わった。

ライナが言うには、魔法は軍が使っらしい。

管理局みたいところだと思うけど………なんでかライナが、軍の話をしてるとき、少し寂しい目をしてた。

その寂しい瞳の背景には、軍が関係してるのかな………？

ライナ言っていた。

魔法を使えるものは、大概が軍だと。

そして、ライナは軍学校に通っていたらしい。

詳しくは聞いてないけど、おそらく凄く優秀なんだと思う。

ライナが言うには達人は一瞬で魔法陣を書くといってた。

ライナは、どう見ても一瞬で書いてた。

ライナは………どういう立ち居地にいたんだろう？

sideフェイト

ライナの言う世界の魔法は、なんだか不思議な感じだった。

国には国の独特な魔法がある。

ライナの話を聞くと、驚愕することばかりだ。

聞く限り5つ以上の独特の魔法があるらしい。

ライナがこういうところで嘘つくとは思えないし。
きっと本当のことだろう。

……でも、軍。

そこに、ライナの寂しさを感じた。

ライナは顔を取り繕うのが下手だ。

すぐに顔に出る。

何故かって、

この話をしていると、ライナの目が、凄く寂しそうに細くなったから……。

ライナの教えたくない過去は、たぶんその軍にあるんじゃないかな？

そこで、なにか苦しくてつらいことがあった。

そんなことがあったんじゃないかな？

いつも眠そうで不真面目な、ライナ。

でも優しいところを私は知ってる。

そんなライナが、寂しい目をしなきゃいけないような自分の国。

どんな国なんだろう？

……私はライナ生きて育った世界が気になって、質問しようとしたけど、先になのはが質問した。

「ライナ？ 二つ質問していい？」

「んあ？ 別に行けどよ。」

今更隠したってめんどくせえことになるだけだし、好きにいえよ」

「うんありがとう。じゃあ聞くけど。」

一つ目はライナの、ほら、指で空中に魔法陣書くやつ。

あれってライナの国独特なの？

それと二つ目は、ライナの国ってどういうところなの?」

なのははそう聞いた。

一つ目は、たぶん純粋な興味……だと、思う。

だって、ライナが指を動かして魔法陣を書いたとき、凄く気にな
ってる顔してたから。

二つ目はライナのことを、ちゃんと聞いて、どう育ってきたのか
聞きたいから、そんな感じがする。

なのはは、何かを判断したいから。

そんな瞳をしている。

ライナのどういう環境で育って、ライナがどうしてそんな優しく
育ったのか、それが知りたいんだと思う。

ライナは優しい。それも、すごく。

それは、この三日間の日常を見ていれば分かる。

寝てばかりだけど。

それでも、凄く優しい。

デパートのときもそうだ。

迷子の子供がいた。

そのこに、嫌な顔をしながらも、迷子センターで最後まで付き合
って、親を待つてあげていた。

その子供は、凄くライナになついていて。

ライナは嫌な顔をしながらも遊びに付き合ってあげていた。

そんなライナ。

それに、私のために、キャロのために魔法陣を新しく作ってくれ
た。

自分の特異性を、私達に追及されるかもしれないのに。

なのに、造ってくれた。

疑われた跡なのに、だ。

それも、嫌な顔せず作ってくれた。

だから、ライナはきつと、嫌な顔はするけど、根は、凄く優しい

人なんだと思う。

それだけ、寂しい瞳をしていながら、優しい心。
この人が、どんな人生を過ごしてきたのか、私も知りたい。

s i d e なのは

一つ目は、興味。

二つ目は、ライナのことを、真つすぐ見て判断したいから。
ライナは、色々と隠している。

それが、何をしていたのか、ライナの真意に霧をかける。
優しいのは、ライナが優しいのは知っている。

この三日間で、グーたらだけど、気にかけてくれてたりしてくれ
たのも知っている。

でも、ライナのことを、しっかりと知っておきたい。

これは、管理局の人間としてもそうだし。

ライナの友達としてもそう。

ライナの回りを聞いて、少しでも知れば、ライナのことをちゃ

んと知れる気がするんだ。

そう考えてたらライナが言う。

少し考えて、そして珍しく。

というより、初めてじゃないかな？

とても真剣な表情で言う。

「一つ目は、まあいいんだけどさ。

二つ目は……この世界では考えられないくらい……酷い話だぞ？
それでも、いいのかよ？」

「……………どういう意味？」

フェイトちゃんが、疑問に思い、そういった。
私も、気になる。

そう思っていたら、ライナが口を開く。

なんだか、寒気がした……。

ライナが言う。その言葉を。

「人が、死ぬ話だよ……………」

ライナがそう言う。

人が死ぬ話。

そうだった。

そこで、悲しい話なんだと、分かる。

……大切な人や、救える人を、軍が救えない話……なのかな？
それなら、管理局も、そうだ。

大きな組織だから、動きが遅い。

私が機動課なら、どんだけ良かったかと、思ったことも沢山あった。
た。

うん……酷いものは、沢山見てきた。

火災で助けられなかった人。

災害で助けられない人。

長年管理局でやってきたけど……。

助けられない人は、沢山見てきた。

エースオブエース、なんてもてはやされるけど。

でもそれでも助けられない人はいる。

人の亡骸を見たとき。

涙が出た。

助けられなかったことに、心が痛んだ。

次は助けられるように。

次は、皆を救えるように。

そう思った。

ライナも、そんな話なのかな……。

ここで聞くと、ライナの世界の、ライナの生まれた世界の、深い話を聞く気がする。

でも、いい話じゃないだろうことは、ライナの言葉が、表情が語ってる。

でも、

「私は……聞きたい。ライナが、話していて、傷つくかもしれないけど、

でも、どんな人生を歩んできたか……知りたいから」

「うん……本当は、こんなに簡単に聞きたいなんていうのも、不謹慎なんだろうけど……

私も、しりたいな」

フェイトちゃんがそういった。

私と同じことを思っている、言葉に乗せた感情でわかる。ライナの世界を見たいから。

そんな気持ちだ。
でも、

「じゃあ……話すぞ……」

そこで、ライナが寂しさそうな顔をした。
それで……なんでだろう……体全体に鳥肌が走った。
まるで、殺人事件の現場に、これから行くような……
自分の助けられなかった人たちの亡骸を見るような……そんな、怖
さを感じる……嫌な予感がした……。

ライナは二人に話す。
ライナの国の酷さを。
ライナの生まれた国の話を。

ライナの国は、王の収める国だ。

その国には、狂った王がおり。
好き勝手に戦争を起こす。

まるで、人のことを虫けらのように思ってるかのごとく、王は戦争を起こす。

そして、王は、権威を振りかざして、好き勝手放題する。

ある時は人を殺し。享楽にふける。

ある時は女を犯し。快樂にふける。

ある時は無意味に重税を課し。悦楽にふける。

人の、思いつく限りの、欲望にふける王。

そして、それに追従する貴族。

民を人とは思わない所業。

民は、貴族が現れると、震えてなににもできなくなる、まさに恐怖の対象。

貴族は民を虫けらのように殺す。

女を、普通の一般市民を氣樂に犯し、孕まし、捨てる。

貴族は自分の常備軍を持ち、その常備軍を精鋭にするために施設を作る。

地獄の施設を。

それは孤児院

戦争中だ。

あぶれる子供など腐るほどいる。

そのあぶれた子供を全て引きとり――その孤児院に見える地獄で、無理やり訓練させる。

才能がないと見切られたら、すぐに殺される。

だが、そこはまだ生き残る可能性の高い場所だ。

それ以上に最悪なのが、

人体実験の施設だ。

子供に人体実験を平気でやり、その人体実験の犠牲者は、万を平気で超え、その殆どが死ぬ。

人体実験が成功し、生き残ったとしてもマトモな人生を遅れるものはいない。

貴族は平気で権力を振りかざし、好き勝手する。

だが、貴族はそれだけでは満足はしない。

だから、常備軍で、気楽に女を攫い、男を殺し。

欲望におぼれる。

服を豪華に着飾り、民を見下す。

まともな政治を行うものなど、殆どいない。

民は明日が見えず、光が見えず、絶望に日々を暮らす。

民は、殆どが貧乏だ。

徴兵。

というのもあるが、

軍に入るものが圧倒的に多い。

なぜならまだ食事はできるからだ。

だが、軍に入ったとしても、戦争に送られ殺されるか、生き残って、才能を示せば、貴族の元へと連れて行かれ、貴族の欲望の手

先にされる。

まともな場所など、殆どが無い。

殺し殺されの、毎日無意味な人の死が絶えない、そんな狂気の国。
その話を聞いて、フエイトは涙目で呟く。

「酷いよ……」

まさしく酷い国。

終わらない死と貴族の欲望。
終わらない負のスパイラル。

革命は起こりえない。

何故か事前に発起人が皆殺しにされるから。

救いは訪れない。

救えるものがないから。

光は差さない。

暗闇しかないから。

そんな、地獄。

なのはも、話を聞いていて血の気を失っていた。
あまりの、日常的な、無意味な人殺しに。

sideなのは

私は、血の気が引いていた。

フェイトちゃんも涙目で、ライナを見ている。

私達が見てきた人たちの死も、決して軽いものじゃない。
とても重いもの。

だけど、ライナの世界は……人の死が……絶望が……多すぎるよ

……

王が人を殺し。

貴族が人を殺す。

貴族の誰もが、統治するものが、市民を助けず欲望にふけるだけ。
だれもが助けを求めるのに、誰もが助けない……助けられない。

元々軍が人々を守るために存在するのに、その軍が自国の人を殺す矛盾。

その上で、戦争で殺しあう悲劇。

王がまともなら、戦争国と話し合いで、何か手打ちにする方法があるかもしれない。

王がまともなら、自国の貴族をまともにできるかもしれない。

でも、王が狂ってるから、自国の人間が、嫌々自国の民を殺す。
敵国を殺す。

そこで、私は気づいた。

もしかしたライナも……

「ライナも……人を殺したの……？」

「な、なのは!？」

フェイトちゃんが、止めに入り、私は、いま自分が何を口にしたのか気づいた。

私は、私を殺したくなるようなことを、無意識に口にしていた。私は後悔した。

酷く、後悔した。

自分の口を、自分自身を私は恨んだ。

なぜならライナは、面食らった顔をして、そして、目を細めて、唇を震わして、言う。

「……………ああ、殺したよ……………それも、両の手じゃ足りないくらいの人間を殺した。

泣き喚いてるのもいたし。許してと叫んでるのもいた。それでも、俺は止まらなかったよ……………

……………軽蔑したか……………？」

そう、まるで泣き笑いの道化のように、無色な表情で言った。後悔と、重責に押しつぶされるような瞳。今にも消え去りそうな存在感。

（私は、そんな表情を……………させたかったわけじゃないのに……………）

私の、勝手な同族意識。

ライナと私は似ていると、そう思って、軽い気持ちで聞いたライナの国の話。

別に、軽い気持ちで聞いたわけじゃなかったはずなのに、なのに、今じゃ、軽い気持ちで聞いたんだと分かる。

ライナの世界を、ライナの瞳の意味を、何一つ考えて無かった…

…。

ライナが優しいなんて分かってたはずなのに、ライナが重いものを背負っているのは分かっていたはずなのに、過去にこだわったから。

ライナの人柄にこだわったから……。

私の興味を優先させたから……。

ライナは……寂しそうな瞳で、黙ることしかなかった。

それに、私は、胸が締め付けられる。

ローランド三〇七号特殊施設

そこは、地獄、というのがふさわしい施設であった。

その施設は孤児院だ。

そう、子供は皆孤児。

その孤児は、大概は死ぬ。

そこは貴族へと献上する才能ある子供を選別する場所だから。才能を示せない子供は皆死んだ。

そして、才能を示せない子供は殆どだ。

皆死んだ。

そんな施設。

そしてそこが、ライナが初めて複写眼を暴走させた施設だった。
ミルクという少女がいた。

複写眼という、大量虐殺と恐れられる恐怖の象徴を受け入れてくれた心優しい少女。

そして、彼女が死に掛けたとき、ライナは初めて複写眼を暴走させた。

笑いながら圧倒的な死を撒き散らせて。

施設の、生き残っていた子供は皆ライナの手によって死んだ。

施設の子供達を殺していた教導官も皆死んだ。

あるものは首を引きちぎられ。

あるものは砂にされ。

あるものは砕け。

あるものは体の中から沸騰し破裂した。

そんな地獄の孤児院を、さらに地獄で塗りつぶした。

そこで、ミルクが死なず、自分の暴走が納まったのは、奇跡中の奇跡だ。

ミルクが、自分の暴走を止め、微笑んでくれたから、ライナは正気に戻れた。

それが一度目の暴走。

二度目はエスタブルの魔法騎士が、シオンの、自分の仲間を皆殺しにしたときだ。

仲間が死んだ。

シオンが苦しんだ。

キファが泣いた。

霞む意識の中、ライナは暴走した。

そして、キファとシオンを助けた。

エスタブルの魔法騎士——50人の命と引き換えに。

もうこの二つで両の手では、人一人では背負えないほどの命を奪った。

戦争だとか、殺されそうだったとか、そんな言い訳はしない。

自分がこの手で殺したのだ。

感触を覚えている。

砕いたときの感触。

首を取ったときの感触。

人を貫いたときの感触。

笑いながら死体を増やした感触。

好きだといってくれた暗殺者の少女が、自分の不注意のせいで殺された感触。

そして――

――人を殺した感触

それを全て覚えている。

否定しない。

自分が殺したことを。

否定しない。

命を笑って狩ったことを。

全てを複写眼の暴走にはしない。

そんな言い訳で、殺してしまったことを言い訳はしない。
ライナは、押しつぶされそうな気持ちの中、目を閉じた。

もう、なのはとフェイトを、真つすぐには見れないから。
こんなに優しい少女達を、こんな化け物の瞳で見たくなかったか
ら。

目を閉じた。

視界は暗い。

当たり前だ。

瞳を閉じているのだから。

俺は、おそらくつかまるんだろう。

そうライナは思う。

別の世界とはいえ、人を殺してるんだ。

人を殺す。

というのは、戦争でもなければ立派な犯罪だ。

だから、自分は捕まって、牢屋にでもぶち込まれるだろう。

そうライナは思った。

正義感の強い二人を見れば分かる。

仕事に真つすぐなのは。

いつも笑顔で、だけど管理局の仕事に誇りを持っているフェイト。

二人とも、疲れていても顔には出さない優しさ。

犯人検挙率のたかさも、正義感の強さを思わせるだろう。

それくらい、ネットで調べればいくらでも出てくる。

二人とも、容姿も相まってすさまじく有名人だ。

その、正義感の強さは、ネット越しでも伝わる。

だからライナは

（まあ二人になら捕まっても……いいか……）

そうライナは、思う。

冷えていく心。

裏切られ続ける魔眼保持者は、心を閉じること、諦める。

誰の声も、耳にしたくはないから。

手を差し伸べようと、差し伸べてくれようと、見ない。

足音が聞こえる。

どこからか、足音が聞こえる。

それは大きな音で、だけどここではない、どこか違う世界の音のようにも聞こえる。

終わらない足音に青年は怯え、前を見ない。

それが誰かと分かっている。

瞳に忌み嫌われた魔眼を持ちし青年は、前を見れない。

そして、いつしか足音は、すぐそばに迫り、そこには――

（……んあ？）

――ギュッと、肩を縋り付くように抱きしめる感触がした。

それは暖かく。

そして……濡れていた。

ライナは、目を開く。

その瞳で、足音の正体を見る。

目に入っただのは、茶髪の髪。

優しい女の子の、ほのかなシャンプーの香り。

それはなのはの髪であつた。

彼女は、ライナを掴み、俯いていた。

前髪で隠れて目は見えないが、頬に雫を流れている、おそらく涙を流しているのだ。

それに、ライナは？ と、疑問を浮かべる。

なんでだ？ と。

自分のそばで泣いているなのはに、疑問符を浮かべる。

すると、なのはは、そのまま顔を上げず、涙声で、言う。
まるで、ライナに涙を見せないように。

「ライナ……ごめんなさい……」。

私……ライナに……そんな顔、させるつもり……無かつたのに……。

無責任で……ごめんなさい……。ごめんなさい……」

なのはは、ライナの肩を縋り付くように掴みながら、そういつた。
ライナは、そんなのはに、少し驚いたような表情の後、寂しいような瞳ではなく。

少し、優しい瞳で

「……泣いてんのか？」

そう、優しいに聞いた。

すると、なのはは、俯きながら袖で目元を拭い。

「にやはは、そんなはずないよ……ひつく……ライナノ過去を、知ったつもりで泣くななんて……そんなことできないよ……。そんなの……ライナに失礼だよ……ひつく……だから、ごめんね、ライナ。無責任に、勝手に色々聞いて……」

そうなのは、やっと顔を上げて、ライナに面と向かい。
目を涙で真っ赤に充血させ、子供のようにしゃっくりをしながら、
言った。

それにライナは……嬉しそうに

「別にいいよ……仕事だったんだろ？
それに、なんでも聞いていいって言ったのは俺だぜ？
そんなんじゃない俺が悪もんじゃねーか」

と、ライナは無意識に微笑みながら言った。
それになのは、うんと微笑みながら答える。
そして、ライナは、なのはのすぐ隣にフェイトがいたことに気づく。

彼女も、涙をこらえている様子だった。
なのはと同様。

涙を流すことが不謹慎だと思い。
無理やり我慢している様子だった。

ライナは、二人の気遣いが嬉しくて、また、無意識に微笑んだ。
二人の優しさが、二人の心遣いが嬉しかった。
自分は、この世界でまた一人になるのだと持っていた。
シオンが去り、キファもどこかに消えた。

自分の師匠のジェルメを拒否し、ピアとペリアの誘いを罪悪感で
拒否した自分は、また一人になるのかと思っていた。

だけど、ライナは二人を見る。

自分に向けて微笑んでくれている少女を見る。

自分を、人殺しだと知っても受け入れてくれた少女を見て、嬉しく思う。

思わずライナも、涙を流しそうになるが、流さない。
なんかかっこわるいじゃん、という小さな自尊心で流さない。

ライナは、今までの人生のかで、おそらく一番の幸せを、感じた。ただ、ライナは複写眼のことだけは言えなかった。

それは、裏切られ続ける魔眼持ちの性質か。

トラウマか。

この瞳を知るものは、知ったものは手の平を返したように皆、自分を罵声し、拒否する。

それが怖くて、複写眼のことだけは言えない。

ただ、この世界は、複写眼の人間がいない。

ネットで見える限りだと、そんな情報は何一つ無い。

それだけが、救いだ。

ただ、裏切られるのが怖いライナは、打ち明けられず、黙す。

だけど、今は、自分を受け入れてくれた少女達に、感謝の意を…。

と、そこまで話が進んだのはいいが、忘れていることがある。

「あ………そういや結局話し全然進んでなくね？」

『あ！！』

話は振り出しに戻った。

そして、結局ライナの世界と、ライナ能力は機密性が高すぎる、ということ、このことははやてに一度一任し。

結局今回の事件はライナ稀有な召喚師と言うことで出頭し、お叱りを受けたのであった。

八神家

「あつ、やべ、ライナに二課のこと言っの忘れてた……
こんど零に謝るか……」

ヴィータは風呂上り、髪の毛をタオルで拭きながら、そんなことを呟いた。

二課

「……こない……なぜだ……せっかく自作でケーキ用意したのに……」

仮面の男は書類で埋まった地面に頭垂れた。

「あつ、主任。邪魔なんでどいてください」

「あつ、ごめんリーバー」

「別にいいですよ」

「あつ、主任。このケーキ食べていい？」

「お前は相変わらず食いしん坊だなタップ」

と、今日も黒の狂団は盛況であった。

は は は は は は は は は は は は は は は は
は は は は は は は は は は は は は は は

αは破壊だ。我は何も生み出さない。恵まない。救わない。ただ消すだけ。真っ白に

私の贗作よ。私の複写よ。私の劣化よ。私の模写よ。

この世界に勇者はいない。女神もない。

ならば、後は悪魔のみ。

我は貴様を破壊しよう。

貴様の心を破壊しよう。

まずは

お前を「——」に授けよう。

我が複写を。

王よ

この世界の王よ

お前に破壊を授けよう。

堕ちぬ君よ（後書き）

答え α （アルファ）

わかるわい！！

α さんが動き出す予感！！

って感じですね。

α さんだれに複写をやることやら……。

恐ろしいね。

あのクモ野郎は。

ってことでいろんな意味でライナ、全ての式フラグです。

あとがき

一度際神話全てが消えた。

はぁ…… 前のほうがきつとクオリティ高かったでござる。
泣きそうだ。

完成！！ バーン消えた！！ の連鎖なんて悔しい！！
喪失感が半端じゃないでござる！！

次

マブラブの世界になのはの科学知識持ったライナをぶち込もうと
した罰なのか…… データが消えたのは……

次

この夏。

めっちゃやせた。

服がぶかぶかすぎんだけど。

元々やせ気味なのによりやせた。

大丈夫か？ これ

次

今回なげー

おまた

確実な足場（前書き）

そこは、聖王教会。

そこには、カリム・グラシアという女がいる。

「古代ベルカ式魔法」の継承者、聖王教会・教会騎士団所属の騎士だ。

そして彼女は、愕然としていた。

「……な……これは……」

彼女のは魔法は、稀有スキルの未来予知である。

その精度は、よく当たる占い程度で、しかも古代ベルカ語という難解な文章を解読しなければいけない。

それなりに、不便な魔法ではあるが、しかし、その魔法に、変化が起きていた。

それは、圧倒的なうねり。

まるで、未来が書き換わるかのような、圧倒的な改変。

それに、嫌な予感がした。

まるで、この先に、何かが起きるような……。

「っ……」

カリムは急いで、解読にかかるところにする。

この嫌な予感が、杞憂であればそれでいい。

そう思いながら、全力を挙げて、解読にかかった。

確実な足場

ずるずる……ずるずる……

何かを引きずる音が聞こえる。

ぺたぺた……ずるずる……ずるずる……

何かを引きずる足音が聞こえる。

ずるずる……ずるずる……

それは、まるで、棺おけを引きずる愚者のようで。

それはまるで、何かから逃げる子供のようにであった。

……ずる……ずる

音は、徐々に弱まっていく。

それは、力尽きようとしているから。

……ずる……

そしてそれは、力尽きた。

もう立てないよと、こんなにも頑張ったのに、どうしてなの？
と、叫ぶかのように、空を見て、倒れ付す。

しかし、そこに現れたのは自分と似た瞳の男。

その男は、一瞬自分を驚いたような瞳でみて、寂しそうに、でも、誠意一杯の微笑で、笑いかける。

それが、嬉しくて。

優しさが嬉しくて、その人に、微笑み返して、そのまま気絶した。体には、暖かさがある。

おそらく、その男の体温であろう。

それに、妙に安心した。

——夢幻の前触れ——

高町なのはは夢を見た。

それは、へんな夢であった。

ライナが、何かを見つけるのだ。

そして、悲しそうに、でも、精一杯の笑顔で微笑む。

そんな夢。

何か……というのは、それが物なのか、人なのか、分からないのだ。

しかし、誰かに微笑みかけるかのように、微笑んでいた。ということとは、恐らく人間なのだろう。

それも、屈んでいたので、子供。

子供に微笑むライナの夢。

そんな妙に現実的な夢を見た。

「うーん……でも、一体どんな夢だったんだろう……。よく分らない夢だったな……。ま、いつか、そんなことより仕事仕事」

と、なのはは思考をすっぱりやめ、仕事に戻る。

まあやめた理由は、夢、だからというのもあるが、夢の中にライナが出てきて、しかも微笑んでいるからだ。

だからなのはは気にしないように思考をやめた。

何故なら、妙に照れくさくて気恥ずかしかったからだ。

だからなのはは、忘れた。

そこは、とあるブリーフィング・ルーム。

そこに、はやととライナはいる。

何故なら、ライナの話は機密性が高い。

だから、防音処理してある、ブリーフィング・ルームを選んだのだが……。

あれ？

………何故かライナはボロボロの姿だぞ？

「なあライナ？ 私に何か言うことあるんちゃう？ なあ？」

「………うう」

「ううやないわ！！ そんなんな、私が言いたいねん！！ 私がどれだけ各所方面に頭下げたかわかるか！？ 頭下げて、嫌味言わ

れて……確かにライナをこっちに引き入れたんわ私の責任や、でもな？」

と、はやては息を吸い、溜めるようににして、吐き出す。
怒声とともに。

「魔法が使えることくらい言うべきやろ！！　なんや、無限書庫で大怪獣召喚って、ふざけんとかい！！」

「いや、でもあれは……」

「いやでもやないわ！！　ちゃんとわかつとんか！！　自分の立場危うくするんやで！！」

………　といたいところなんやけどな？　実は耳寄りの情報があるねん」

「……へ？　……なんか嫌な予感がすんだけど」

まさしく嫌な予感だった。

それは、そう、彼女が確実に裏と打算で動いている気がしてならない、とか、確実にそれは耳寄りの情報ではなく、地獄への片道切符なきがしてならない。

むしる血の池地獄直行？

そんな思いを胸に、ライナは質問する。

冷や汗とか嫌な予感が杞憂に終わればいいな～と思いつながら。

「……んで？　その耳寄りの情報は俺にどう耳寄りなんだよ？　もし最悪な——」

と、ライナの言葉を最後まで言わずはやては言う。

最高に満面で、この程度で、と言うよりむしろナイスと、言いたげな表情で、言う。

「んーとな？ ほら、管理局もな？ 人手不足なんよーやから取引でライナを管理局に入ればそれでチャラに……」

「——全然俺に耳寄りじゃないじゃねえかああああああああ。むしろ地獄に直行便だろうが!!」

そんなんお断りだ……」

「ちなみに断れば一日18時間労働って言う罰則を2ヶ月間続ける地獄が待つとるで？」

どっちがええ？ 本局入りでチャラか、断って18時間か？」

「はあああああああああああ！？ なに言っちゃってるの？」

「ってか俺ってば知ってぞ！？ ここの世界にはロウドウキジュンホウって言うのがあんの……」

「大丈夫や、地下労働施設を用意しとるから、世間さんからばれへんで？」

これで安心やね？」

「どこがだあああああああああああああああああ」

ライナの絶叫は、防音である、室内を反響した。

そしてライナは、あまりの恐怖にうずくまりつつ、言う。

悪魔に、その絶対的な悪魔に、優しき天子のような微笑を向けてくる悪魔に向けて、呪詛のように、呪いのようにたたきつける。

「お、俺ってば絶対逃げ出して……」

「その場合ライナが指名手配になってまうな？」

そらそうや、管理局のと真ん中で混乱を越してお咎めなしなんて無理やろうし、

しかもその張本人が逃げるんやで？

指名手配されてまうやろうな」さらばライナの平凡な人生！

これで毎日追われる身や」

と、逆に呪詛返しされ、ライナは死にそうな顔で倒れた。
もはや、再起不能な顔で、呟く。

「うう……悪魔やろうめ……」

「ああええ感じの声が聞こえるな」気持ちいい声や」

「うう……結局俺ってば入るしかないのね……」

こうして、ライナは管理局に入局するしか道はなくなったのであった。

さらばライナ！

自分で逃げ道をふさいだ君が悪いのを、身の程を持って知れ！

というより今まさに痛感しているライナは、ひざを抱いてうずくまりつつ思い出す。

大切なことを、今思い出す。

正直、このことを聞かなければ、自分の立場をどう判断すれば良
いかがわからないし、それに、下手をすれば自分を窮地に立たせる。
その上で皆を巻き込む。

だから、ライナは聞いた。

これ以上の面倒を起こさないように。

「……なあ、はやて、俺の立場ってどうなってるの？」

そう、聞いた。

それは、ライナの魔法の扱いについて、彼の魔法は、なにぶん機密性が高い。

そして、強力な武器だ。

例えるならば、勇者の遺物だろうか？

勇者の遺物、それは絶大なる破壊力と応用性、防御性を持った多種多様な遺物がある。

それが、ライナの世界の戦争を大きく変えたように。

この世界も、ライナの魔法のせいで、大きく変わるかもしれない。だから、ライナの魔法は、その遺物と同じだ。

かれの魔法は、この世界の魔法の概念を覆くつがえしかねない。

それは、デバイスにこだわる開発者を一気に変え、その上で、新たな魔法を生み出す存在を多く産むことになるだろう。

それは、悪いことでも、いいことでもない。

何故なら、応用性に長けた、生活に密接な魔法が生み出されるかもしれない。

魔法の才能がないものが、才能を埋めるための魔法を作るかもしれない。

多くの人を救う、魔法を生み出すかもしれない。

しかし、悪いこともある。

禁忌の呪詛が生み出されるかもしれない。

そのせいで、大きな戦争を生むかもしれない。

そんな危険性。

だから、ライナは聞いた。

自分は、世界を変えるだけの存在になってしまった自分の立場を。すると、はやては言う。

少し、考えるそぶりをして、

ライナに、真剣な顔で言う。

「ライナの魔法は、あれや、機密性が高すぎるさかいな、一度、クロノ提督と相談して、決めてきたんよ。あつ、クロノって言うのは、私の友達で、フエイトちゃんのお兄ちゃんやから安心してな？めっちゃいい人やから、まあお兄ちゃんお兄ちゃんし過ぎてちよつと気持ち悪いけど……」。

ああいや、まあそんなことはええんや、で、クロノ提督と話した結果、時を見て公表する。

そう決めたんや。

……もう一度言うけどライナの魔法は機密性というか、この世界を覆すほどの強いもんを秘めとるやる？ やから、ライナを……上に好き勝手されへんよう、その準備ができるまでの期間を、隠し通すっていうんや。 やからライナは稀有^{レア}スキル保持者として、召喚師として提出しとる。

やからライナ、窮屈やと思うけど、しばらくは我慢してな？」

と、はやては言う。

それは、この少女の優しさであふれた言葉。

ライナの身柄を、ライナの能力を、この縦社会の上層部に、好き勝手されないようにする処置。

ライナを、勝手に好き勝手されないようにする処置。

それに、言葉には含まれていないが、言外に今もそれにライナのために奔走していると、言っていた。

それに、ライナは思う。

というか、思いつく。

（ん？ これって、俺。ローランドのときの複写眼の扱いと似てね）

そう思う。

それは、複写眼が暴走すれば二度と元には戻らない事実を、ライナは二度も覆し、国に重要な研究材料にされたことを。

ライナは、その結果、実験動物の扱いにされた。

しかし、殺されはしない。

何故なら、面白い存在で、貴重だから。

ライナが任務を再三妨害、阻害、邪魔をしたのに、殺されず。

拷問だけですんでいる。

拷問傷は、今でもライナの体についているが、あの、邪魔者は処理するローランドが、その程度で、ライナを放置しているのがいい証拠だ。

そのことを思い出し、ライナは別にこのままの状態でも、自分が手に出すことはできんじゃないかね？　なんて思いつつ、も、自分のために奔走してくれている少女を見て、嬉しそうに目を細めた。

そして、ライナは言う。

「まあ、そこまでやって貰ってんだもんな。仕方ねーから入るよ。

……はあ。これからよろしくな」

と、ライナは、言う。

少しの感謝と、この少女の優しさに、微笑んで。

——すると、はやては

「ほんまか！？　よっしゃ！　ほんならさつさと入局届けや！！
ほら、速くデスクに戻るで！！　はよはよ！！」

と、ライナの手を引っ張り、ブリーフィング・ルームを嬉しそうに出た。

それにライナは苦笑いし、はやては嬉しそうに笑い。

部屋から出てきた二人を見て管理局の男どもはまたか〜と、嫉妬の炎を燃やした。

ライナは恋愛原子核なのかもしれない。

いや、ただの男共の嫉妬心に可燃性ガスを流し込む男なのかも。

何せ、女子勢はだれもライナのことを男として好きではないのだから……。

そして、デスクに戻ったライナは、書類を書かされた。
そして、

「ふんふん。よっしゃ！ OKや！！

おめでとう！ これでライナは管理局の職員や！！

いやー良かった良かった」

と、はやては嬉しそうに言う。

裏になにか抱えてるようだが、ライナはそれを見破れない。

なんかいずれ知ることになりそう……と、ライナは嫌な予感よろしく感じていたからだ。

そして、ライナは、言う。

「別にうれしくは無いんだけどなー。はあ」

と、ライナはため息を漏らす。

正直、別にどうでもいいのだ。

働くとかどうでも。

もう、ずっと昼寝しながらすごしていたのだ。

そう、ライナは思う。

が、はやては言う。

笑顔で。

「そんなことはどうでもいいんや」

「そんなことってなんだよ！？ 俺には凄い重要な……」

「どうでもええ」

「……はあ」

「それより、ほら、ライナ。空戦か陸戦。どっちにする？」

と、はやては一枚の紙を、ライナに手渡す。

それは、普通に申請書だった。

それにライナは、眉を潜めつつ、はやてに言う。

「なにこれ？」

「ああ、それな、空で戦うか、陸で戦うかの申請書や。

ライナはそももう、実践経験豊富そうやしな、スグにどっちでも
いけるやろうし、どっちにするか聞いとこうおもってな」

と、はやては、ライナの過去をつつきつつも、言う。

それに、ライナは少し、嬉しそうに微笑んだ。

それは、彼女が自分の過去を気にしていないというアピールである
ということに、ライナが気づいているから。

だから、笑みがこぼれそうになる。

そうだ、彼女にはライナの情報が全てわたっている。

あの時、二人は自分で決めていいものではないと、はやてに報告したはずなのだ。

だけど、彼女は気にしていない。

それが嬉しかった。

最初は、自分の情報が渡るのが怖い、そう思っていたはずなのに、自分の本心は知って欲しかったのだと、気づかされる。

そう思うのは、

あの時、フェイトとなのはとの話。

ライナは、自分のことを言いたく無ければ、二人の前で、取調べのとき同様嘘をつけば、うそを混ぜればよかったのだ。

そうすれば、自分が人を殺したこともばれず、二人が離れる恐怖に怯えずにすんだのだ。

リスクを犯さずにすんだのだ。

しかし、俺は顔に出やすいからなあ、嘘ってばれるんだろうなあ？ と、苦笑いする。

そして、ライナは、

「ふーん」

と、ライナは苦笑いを誤魔化すように、はやての言葉にそういう。少し、気恥ずかしかったのだ。

だがまあしかし、正直言つと陸も空も、どっちでもいいのだ。

正直どっちも嫌。

理由は面倒くさい。

戦うのは面倒くさいのだ。

だからライナは、適当に言う。

「んじゃ陸」

「……………なあライナ？　今適当に決めたやろ？
顔にめっちゃでとるで？」

と、はやては笑顔で言う。

その笑顔が、黒いのは何故だろうか？

そして、拳を構えているのは何故だろうか？

「……………ガフ」

……………
……………
……………

ライナは真剣に考えることにした。
別に、殴られたから、とか関係ない。

はやてへの、先ほどの自分の高感度アップも、もはや廃れた。
そう思っていたら次に顔面に拳、とか言われたことも関係ない。
ライナの寝具を全部燃やす、とか言われたのも…… 凄い関係ある。
だからライナは考える。

殴られないように。
燃やされないように。

（んー俺は陸のほうが会つよな？
なんせいつも陸でやってきたし。
それに、俺ってばそれ飛ぶ魔法は無いぞ？
複写眼も使って無いし……）

と、考える。

しかし、空を飛ぶ魔法程度なら、勉強すれば適当に覚えれるとは思っている。

何せ、複写眼も、書物も大量にある。
これで覚えれないのなら、それは根本的に空が合わない人間だろう。

それかそういう体質の人間か。
しかし、思う。

（俺ってばちょっと空とか飛んでみたいしな……。
うーん。）

と、ライナは空の魅力にとらわれそうになる。
そう、空なんて飛んだことは無いのだ。
ローランドに、いや、自分の世界にそんなものは無いのだ。
だから、妙に空を飛んでみたい。

だからライナは言う。

「んじゃ、空戦で」

「よし、ライナは空戦やな？　まあ、すぐ近くに教官さんもおるやろうし、

先生には困らんやろ」

と、はやては言う。

それに、ライナは　ん？　となる。

何故教師に困らないのか、その意味を考える。

そして、考えた末、なのはがそういえば戦技教官だったな……と
思い出し。

そして次に二つ名を思い出す。

管理局の白い悪魔。鬼教官。

なんて二つ名を・・・

「お、俺ってばやっぱ陸に……」

と、ライナの言葉は遮られ後ろから声が来た。

「あれ？　ライナも空戦なんだ？　私も空戦だから、一緒だね」

と、心底嬉しそうに、フェイトが、ライナに言う。

すごく、瞳をきらきらさせ、凄く嬉しそうに微笑む。

ライナは、その笑顔に、口元が引きつった。

この笑顔を裏切るのは、流石に罪悪感が凄いと、
胸に罪悪感を＋し、しかし、それでも断ろうとし……
また、後ろから声がかかる。

「へえーライナも空戦なんだ？ 少し嬉しいな」

と、なのほも嬉しそうに笑顔で言う。

それに、罪悪感更に+。

もう、断れない……

色々と助けてもらった少女達相手に、自分のことを、救ってくれた少女達を、断ることはできない。

断ると、なんか凄い外道な行いな気がする。

と、ライナは思いつつも。

なのはの二つ名を思い出し、だるさ+、面倒くささ+され、しかし、

「……はあ。んじゃ、空戦で………」

ライナは諦めて空戦にした。

どうしても、二人の期待を裏切ることではできなかったのであった。

こうして、世にも珍しい。

空戦の召喚師が誕生した。

そのことに気づくのは、次の日、必要な書類を提出後、飛ぶときになったときにはやてとライナは気づいたという。

はやては気づかなかった自分の頭を

「もう何でやー！！ 何で気づかへんねん！！ バカバカ！！
めっちゃライナ怪しいやん！！
空戦召喚師ってなんやねん！！」

と、嘆いたと言う。

そこは、二課のとある研究施設。

そこには、一人の美女がいる。

名は香月夕湖。

腹の黒さはミッドでも指折りの存在。

彼女は、普段自分の研究以外には興味を示さない色々とマッドなサイエンティストなのだが……。

「ええ、ええ、分かったわ、すぐに行く」

そう言って、携帯を閉じ、いつもの白衣を羽織って部屋から出る。
カツカツとこ気味良い靴音を鳴らし、向かった先は

「でな、ライナにはして欲しいことがあるんよ？」

「えー俺ってばそういうの勘弁してほし……」

「して欲しいことがあるんよ」

「だから俺……」

「して欲しいことがあるんよ」

「だ……」

「して欲しいことがあるんよ」

「……はあ」

と、ライナがはやてのデスク前でなにやら問答をしている。それを見つけ、そこに向けて、夕湖は歩こうとする、と、

「待ちたまえ、香月。抜け駆けは許さんぞ」

零が、後ろからそんなことを言いながらやってきた。

いつもの仮面とマントをして、怪しいことこの上ない変態な格好で。

それに、夕湖は舌打ちをする。

「チツ、零……^{ゼロ}。あなたもう来たのね。色々嘘の情報を流しといたはずんだけど……どうやったのかしら……」

夕湖は、腕を組みながら、零に苛立ちをぶつける。すると、零は手を広げやれやれとため息をついた。

「むしろ私が聞きたいよ。私の子飼いに妨害を加え、更には私より速くライナ・リユートの管理局、本局入りの情報を掴まえる。一

体どうやったか……」

「あら、天下の零ともあろうものが固定観念にとらわれてるのかしら？」

自分の子飼いが優秀なのはいいけど、他人にも目を向けたら？」

「……ふむ。次からはそうするでしょう。」

……しかし、やはり先ほども言ったとおり君もやはりライナ・リユートか？」

「あら、それは貴方が一番良く分かってるんじゃないのかしら？」

「ふ、予想通りか……」

そんな、腹の探りあいのような、黒いものを吐きあうような言葉の応酬が展開されるが。

この二人の目的は、言葉の応酬からも分かる通りライナだ。

しかも、ミッドの中でも指折りの腹黒さを持つ夕湖と零の管理局でも有名な二人から狙われているのである。

ライナも、困ったものに狙われたものであった。

そして、零は言う。

「あれは私が先に目をつけたのでな、私が貰おう」

「あら？ 彼へのプレゼンが、来なくて失敗したくせに頑張るのね？」

よくやるわ。それに、順番で言えば次は私の番よ？」

「ふ、そんな順番など意味は無い。取った物勝ちだ」

「あら、いい意見ね。そこは賛同だわ」

と、無駄にとがった言葉を投げあいながら、2人ははやてのデスク。

つまりはライナの前に向かった。

二人とも、黒いオーラをまとって。

はやては、ライナにあることを頼もうとしていた。
それは……

「んじゃ、この書類と、カメラ。よろしゅうな!!」

と、何故かカメラと書類をライナは渡される。
それに、ライナはため息をつき。

「なんでこんなの……」

「しゃーないやろ。管理局のアイドル。フェイトちゃんとなのは
ちゃんの日常の写真が欲しいって雑誌の会社から色々依頼が来とる
んや。これがもう煩くて煩くて。仕方ないから今回だけってことで
ライナに頼むことにしたねん」

「ほら、もうそこがおかしいじゃねーか。てか頭がおかしいだぎ
やああああああああ………写真とって来ます。許可も
取ってきます……」

ライナは拳で黙らされた。
管理局は縦社会。

これが、その縮図であつた。

下のものは暴力で黙らされる。

おそろしや……おそろしや……。

なんて冗談は置いておいて。

「冗談じゃねえ ええええええええええ」

そんな叫びは置いておいて。

ライナは写真を撮ってくるようになってしまった。

まあ、一緒に住んでいるんだ。

それくらいは楽勝だけどなーとは思いつつ。

ライナは、殴られた頭をさする。

すると、それは来た。

「ふむ、それがライナ・リユートか。」

「そのライナを勧誘しに来たのだが、いいか？」

零が、場の空気も読まず。

いやある意味では一番空気を呼んだ登場をした。

はやてが裏返った声を出す。

「うげえ！？ な、なんで二課の変態が……はっ！」

す、すいません！ 零一等陸佐！！ は、反応が遅れました！」

と、はやては途中で自分の失言に気づきつつも敬礼をして零に返す。

それに零は手を上げ、

「ははは、別にいいさ。それより、先ほども聞いただろう？
ライナ・リユートを勧誘しに来た。彼は頭がいいらしいな。
1を教えれば10覚えるらしい。
それで、入局したばかりの彼と話があるが、いいかね？」

「そ、それは……」

（なんでや！？　なんでライナの入局情報がもつぱれとるんや！？
提出したの今日やで！？
どこからぱれとんねん！？
この、情報漏らした奴見つけしだいボロ雑巾にしたる！！）

はやてはそんなことを胸に誓った。
が、しかし情報漏れの犯人は身内であることをはやては知らない。
そう、犯人はヴィータである。
ただ適当に零に話ただけであつた。
本当に残念なことに。
はやてはそれに気づかず、情報を漏らした馬鹿を誰かと考えてい
ると、

次の脅威が来た。

「あら、私も勧誘しに来ただけど、いいわよね？」

と、香月夕湖がやってきた。
腹黒さでは零の次か、同等と言われるほど腹の黒さである。
それを見て、はやては

「こ、香月二等陸佐やないですか！！　な、なんでこんなところに！？」

と、零と同じく敬礼をする。

心の中ではなんでまた開発の黒さで有名な人間が！！　と、絶賛叫びちゅうだが。

が、夕湖は、はやての敬礼をうつとうしそうな顔で。

「ああいいわよ敬礼とか。そういうの鬱陶しいから、それに階級は同じなんだし、そんな堅苦しくなくていいわよ。私の階級なんて上からただ念のために与えられてるに過ぎないんだから」

と、手を鬱陶しそうに振りつつそういう。

それに零はため息をつき

「私は君より上の階級なのだから、君は私に敬語とそれなりの態度をとらなければいけないのだがな」

「あら、零とあろうものがそんなことに拘ってたの？
存外小さな男なのね？」

「ふ、言ってみただけだ。君に敬語を使われた日には世界が滅亡しそうだからな」

そう言っつて、まさにああいえばこういう状態の言葉の応酬をする。
それにライナは……

「なんなのよ、この二人。変態か？」

そんなことを呟くと、

はやてにぐいつと襟元をもたれ、一緒にしゃがまされる。

「（馬鹿！！！ 言葉には気い使いや！！ 特にあの二人には！！）」

そう、色々とがたがた震えながら、はやてはライナに言う。

それにライナは、これほどまでに怯えているはやてを見て、こりやただごとじゃねえ！？

と危機察知本能を全快にし、質問する。

「（お前が怯えるって……どんな奴らなんだよ！！）」

「（そら、少し調べればボロボロとその手の噂が出てくるんやけど……」

一つ、こんな噂があるんや……）」

「（はあ？ 噂？ んな確証のないものかよ？）」

「（アホ！ 裏が取れるようなものなんやから、皆怖がつてみいへんのや！！）」

「（うえ！？ マジで……んで噂って……）」

「（噂ってのはな……なんか変なロボットが名前はコムタンマーク2とか言うんやけどな？」

その変な名前のロボットが地上本部を壊滅寸前にしたとか、それに管理世界では禁止されとる質量兵器を積んでたとか、しかもそれを上にはれたのにもみ消したとか、そんな噂が流れとんや……

でも、怖がつて誰も調べへん。なぜかって、誰か調べた奴があるらしいんやけど、その調べた人間が次の日には本局のデスクから机

ごと消えてた。なんて噂があるんや」

「（……まじで？）」

「（ほんまほんま）」

と、二人が屈みながら話し合うが、それを見て零はため息をついて一つ肩をすくめ

「それで私達に聞こえてないつもりかね？」

「うえー!!」

「あはは、聞こえてはりましたか？」

「ええ、丸聞こえよ」

そう、零と夕湖は呆れつつ言う。

ライナとはやてに、サイレントボイスで喋る技術はそんなに無かった。

むしろお前らワザとじゃね？

と言うレベルのヒソヒソ話であった。

それだけの声量で喋っていたのだ。

もちろん聞きたくなくても聞こえる。

それに、零はやれやれと頭を振り。

「で、ライナ・リユートよ、君を開発二課に勧誘したいのだからどうだ？」

いや、別に入らなくてもいい。君の好きにしたまえ。

第三の道としてはその小ダヌキのに所属しつつでもいいぞ？」

と、零は仮面越しにはやてを見る。

ライナは何を言っているのか分からず首をひねるが。

はやては冷や汗を流す。

そして零を睨む。

文句は何も言わず。

（っ、そら上のほうに認可は得とるけど……こつも情報を手玉に取られとると……息が詰まるわ……どこまでしつとんねんこの仮面の変態は……）

はやてはそう思う。

冷や汗を流しつつ。

それに、夕湖は少し笑い。

腕を組みながら言う。

「あら、それはいいわね。ライナ次第だけど、これからは長い付き合いになりそうね」

と、夕湖は笑う。

黒い笑みで。

そして、はやては、そのセリフに冷や汗を流す。

ゼロと夕湖は、そりや研究者なのだから戦闘技術は無い。

むしろ開発課としては最強とも最狂とも名高い課だ。

しかし、自然と話を両方に所属しながらでもいいといった零にはやては舌を巻く。

あれは、獲物を狙う。

と言うよりかは捕食するための言葉であつた。

それは、機動六課設立後、零はこちらに食い込んで来る確率が高いと言うことだ。

いや、確かに利用価値は十分に高い。

二課の技術は開発課で一番と言われているほどだ。

が、この二人を、零と夕湖を相手にしては逆に利用されてしまう。
だから、冷や汗を流す。

腹芸には自身はある。

が、それでも自分は経験も少ないし限界もある。

相手は自分より格上だ。

しかもそれが二人。

正直、やばい。

そうして、重苦しい雰囲気、場を包み始める。

と、はやてがまるで主人公なノリなのだが、当の主人公は

「（あー早く帰ってなのはとフェイトの料理でもくいてえなー
今日のご飯はなんだろうなあ……）」

と、管理局の男子が聞けば全員がぶち殺しに来るようなことを想像して、暇をつぶしていた。

寝る雰囲気でもないのだ。

なら、晩飯を想像するくらいしかなかった。

もはや、二人が黒いとかどうでも良かった。

黒いのならスグ近くに二人いたのだから。

シオンとはやて。

もはや慣れきっていたので立ち直りも早かったのだ。

しかし、思う。

二課の世話になるのもいいかな？ と。

何故なら自分は機械関係に興味がある。

魔法と同等に興味がある。

だから見では見たい。

が、それでは確実にはやての迷惑になる。
何故だかそれはわかる。

はやてが困った顔をしているのだ。

あの、優しくて黒いはやてが。

自分のことで困ったような、道がなくなてなきそんな顔をしているのだ。

だから、ライナは言う。

第4の道を、自分本位な道を提示する。

「んじゃ、ほら、俺は二課と、えーとなんだっけ？ はやてのな
んかを掛け持ちすりゃいいんだろ？」

んで、ここからが俺のの提案」

と、言う。

それに、その場の三人は、ライナに顔を向ける。

そして、ライナは言う。

「んで、提案つてのは俺は二課を自由に行き来できること、そんな
ではやての事には首を突っこまないこと、これだけだ」

と言う。

それは、とんでもない要求であった。

二課を自由に行き来すること、と言うことは開発プロジェクトに
は確実にいれない。

何故なら自由気ままに出入りしてプロジェクトを途中で抜け出さ
れたり入ったりされれば迷惑極まりないからだ。

そして機動六課に首を突っ込まないってことは利権を食えないと
言うことだ。

散々こちらで技術を吸い取っておいて見返りが無い。
それと同等だ。

だから、この話は、まさに呑むべきものではない。
だが、零は笑う。

「ふはははははは。なるほど。これほどまでに傲慢な取引を私に
仕掛けてくるなど、久々だな。
なるほど、面白い」

と、零は笑う。

それに夕湖は頭を？きながら。

「ちよつと、それは流石に勘弁しなさいよ。そんなのにいられた
ら迷惑極まりないわ。」

それをどうしても通すって言うのなら私は降りるわ」

「そうかね。なら私がライナを頂こう。彼には凄まじいものがあ
りそうなのでな。」

それに、何故か親近感を感じるのだよ。声的な意味で」

「そんなのどうでもいいわ。私は損するだけの取引には興味ない
わ。」

じゃあね」

と、夕湖は立ち去ってしまった。
どうにも彼女はシビアであった。

しかし、それに仮面の変態零は振り返らず。
言う。

手を出して。

「ようこそ開発二課へ。君の条件を飲もうじゃないか。ふははは
は」

それにライナは手を出して。

「まあいい条件だし、提示したの俺だもんな、んじゃ、遠慮なく技術でも何でも持っていていかせて貰うよ」

と、握手する。

こうして、ライナは開発二課の零班に入ることになった。
ライナにすさまじく有利な条件で。

それにはやては、啞然とする。

むだに適当そうな自分優位な条件を提示して許可を得る。

バカバカしくてしかし、自分のことを考えてくれたライナには嬉しくなった。

零が帰ったあと、はやては言う。

「ありがとなライナ。私はめっちゃ助かったわ」

と、笑顔でいい。

はやては仕方なしにライナから書類とカメラを取る。

それにライナ

「ん？ いいのかよ？」

「ええねん。ほんのお礼のつもりや。ライナは科学の方面に興味があるのは知っとった。」

そやのに自分が学べるチャンスをふいにするかもしれんのにあんなことを言うてくれたのが嬉しかったんや。だからこれはお礼や」

と、はやては笑顔で言った。

それにライナは頭を？きつつ照れくさそうにするが……

（やっべ、そこまで考えてなかった。そっか、もうスグでふいに
するところだったんだな……あぶねー要求吞んでくれてよかったー）

ライナの考えは、はやてとは『少し』違ったようだ。

こうして、濃い一日は終わった。

そして、今日から、ライナ・リユートの管理局生活は始まる。

いや、もう始まっている。

めんどくさいと、ライナは思いつつも、諦めて、制服を馴染ませ
るのである。

そしてライナの管理局生活は一週間たった。

魔法の勉強。

二課で科学の勉強。

ライナの魔法を、おそらくできるであろう機動六課隊長陣にだけ
公表し。

シグナム、ヴィータ、シャマル、犬を驚かせ。

シグナムは、意外にもライナが出来る存在だと分かったせいか、
バトルマニアとしての血を沸騰させた。

こうしてみるとライナは凄く真面目に見えるが、しかし所々でサ
ボリまくっていた。

そのせいで、色々とサボるとポン刀持ったヤクザのごとく、シグ

ナムに剣で追い掛け回され。

仕事をサボるとなのはに笑顔で殴られたりした。

そしてヴィータとはいつの間に仲良くなっていたのか、仕事帰りに居酒屋に行ったり。

シャマルとは……あんまり接点がなかったり……。

犬は……ワン。

そして、ライナはなのはに空戦のこつを、体に文字通り叩き込まれた。りした。

サボるライナをディバインバスターでぶっ飛ばすと言う意味で。

そしてそれを苦笑いで見守るフェイト。

そんな

たった一週間。

そう、
たった一週間。

なのにその濃ゆさに、ライナは徐々に蝕まれ。

疲れ果て、仕事の面倒さにあてられ、

[illegible]

「ま、待ってライナ!! ほ、本当に死んじゃうから!!」

と、フェイトに管理局のベランダから飛び降りようとするライナをとめられた。

悲しき日の出来事であった。
いや、毎日であった。

ライナはデスクに寝転がり、枕を敷いて昼寝の準備をする。
仕事は完璧に終わらせた。

何故ならぶん殴られるから。

だからライナは、後顧の憂いもなく、寝ることにした。
ただ、そう、本当に疲れているのだ。

書類仕事と言うか、PC打ち込む仕事というか、仕事自体という
か……。

ただもう、疲れていた。

本当、最近までニートだった奴にはきつすぎる仕事量であった。
だから、ライナは色々と涙を流しながら、ねた。

夢を見た。

それは、変な夢であった。

自分の歩いている先に、ボロボロの子供がいた。
その子供は、自分を見てにっこり笑い。

倒れる。

それを支え、抱きしめて。

何故だかなきそんな顔でその子供を見る自分の夢。

そんな夢を見て。
ライナは目覚めた。

「ふあゝ……んだ？　もうこんな時間かよ……なんか変な夢見たし……ああゝ
帰って寝よ」

と、ライナは、立ち上がり。
もはや一週間で馴染んだ管理局の制服を腰に巻き。
必要なものをもって、出て行こうとする。
と、

「あれ？　ライナまだ帰ってなかったの？」

「あつ、本当だ。もう、また寝てたんでしょ？」

と、フェイトとなのはが言う。

それにライナは苦笑いする。

こんな、幸せな日常を暮らしている自分にだ。

ローランドにいたころは、こんな幸せを、想像すらできなかったのに、どうだ？

こつも、泣きそうなほどの、日常を手に入れた。

ライナは、そのまま苦笑いの状態で、言う。

「ああわりい。んじゃ、いこうぜ。

で、今夜はなんの晩飯なんだ？」

「あはは、なんと、今夜はカレーだよ！」

「ライナ、おいしいって言ってたもんね」

そう言つて、三人は、暮れる夕日の中かえっていった。

日常の幸せさを、ライナは噛み締めながら。

こんな調子で二ヶ月後。

ライナは、興味が無いのか試験を受けていないので空戦ランクCのままだが。

機動六課が設立される。

新たな仲間が入り、ライナの大切なものは増えていく。

ライナの……守るべきものは増えていく。

だけど、事件はもう、目の前だった。

確実な足場（後書き）

次回本編突入。

αの目的。入り組む事件。

悲劇の幕開け。

正直言うと、本編、それなりに原作と乖離しそう。

いや、設定は変わらないんだろうけど、本編のストーリーが変わりそう。

スカリエッティに新たなものが加わるとそんなの。

まあ開発二課はそんな関わらないけどね。

今回はあれ、フラグを色々処理しただけだし。

いや、さすがにあれ、あの2人は内政チートとか言われるタイプですしね。零にいたっては策士過ぎますしね。

さて、あとがき

今回は……そんなに言うことないな。

また文章データ消えたことくらいだし。
おわら

暗闇のプロローグ

そこはうす暗い、研究施設。

まず人などが近寄ろうとは思わない場所にある、研究施設。

そこで、一人の研究者は笑う。

二人の出現に。

その男は、なんと、突然現れてはエースオブエースを含む、その仲間達とスグに親しくなったではないか。

そして、はやてすらもライナを機動六課設立の人材の一つと思い、構想からはずす気がない。

それはそれは面白い。

「く、くふふ、ふはははははなんと面白いことか！

私の計画は完璧だ！　だが、ここにイレギュラーが介在する。

なんと、私の前に二つのイレギュラーが存在するのだ！！」

そう、白衣を着た男は笑う。

その男の笑った顔は、醜悪の一つに過ぎず。

そしてある見方をすれば、無邪気な子供のような笑い顔だった。

その男の名前はDr. スカリエッティ。

生体改造や人造生命体の開発に異常な執念を抱く科学者だ。マッドサイエンティスト

目的のために過去幾つもの次元犯罪を起こし、広域指名手配がかつている次元犯罪者でもある。

そんな彼は、研究者として、人として、そして策士としての、その悪魔のような頭脳が導き出す思考と勘で、こう思っていた。

自分の計画を、『聖王』の『クローン』の拉致を邪魔するのは最終的にはあのエースオブエースの周辺であろうと、そう思っていた。根拠は、最高評議会の連中からの情報。

はやての設立する機動六課、その部隊の能力の高さだ。

多くは新人や、実績を積み上げていないものとはいえ、その能力の高さ、そして、戦闘にまつわるもの達の強さは目を見張るものがある。

だが、しかし、これを根拠というには、まだ弱い。

聖王のクローンが彼らに渡る可能性は少ないのだ。

だが、しかし、スカリエツィの勘は、甘く見るなといっている。彼女達の運を、イレギュラーを甘く見るなと。

だから、その勘を信じ、一応という名目でその周辺を見張っていた。

すると、彼は一つ、その過程で面白いものを発見する。

それは、先ほと言っていた二人。

「ライナ・リュート……それに瞳に赤い模様の人間。」

ふふふ、何はともあれ面白い！！

この突然現れた二人がイレギュラーになるのか、それとも壁にもならないのか。

いや、どうにか後者は捕まえて、瞳を研究をしたいものだ……

•
•
•
○

興味深いものだよ……！！
ふはははははははははは」

その笑い声は欲に濡れた声だった。

自由奔放に、全てを嘲笑い、すべてを食い散らかすような、そんな悪魔のような、笑い声だった。

B ランク試験会場前編（前書き）

前回に一話追加

問 オリジナル

B ランク試験会場前編

空は、晴天といってもいいほどの晴れだった。

太陽は程好い日差しを投げかけ、気温はもう、昼寝日和。

こんな気持ちのいい空の下、ライナはあるビルの上で、気持ちよさそうに寝ころび、寝る……

というわけでもなく、空へあお向けに寝転がりながら、とある本を読んでいた。

「ふん。そうなってんだなあ……」

ライナの読んでるその本は、中々に分厚く、おそらく千ページはあるんじゃないの？　と思わせるほどの分厚さである。

それをライナは今読破し、眠そうに呟く。

「んーやっぱアルカンシエルは超科学の産物だな。

まずエネルギーの集積量が桁違いだ。

それに魔法陣があれだつてのに、機械の演算機能が凄いいいか構築に時間がかかんない。

こりゃコピーは無理っぽいな」

なんて、ライナは呟く。

その本の内容とは、アルカンシエルに関する本。

無限書庫に置いてあった本の内の一つだ。

一応本の持ち出しはできなかったはずなのだが……どういいうわけかここにある。

あれ？　どうしてだ？

とまあそんなことはライナには関係なく

とりあえず読み終わったライナの感想。

と言うよりかは考察の結果、まず一人では魔法の発動なんて無理。という結果だった。

このアルカンシエル。

まずは魔力集積量が桁違いなのだ。

が、これは別に、時間をかければどうとでもなる。

が、次が問題。

集積速度と魔法陣展開速度が速すぎる。

巨大な航行艦なのだから、巨大な演算機を乗せ居ているのだろうことは想像に硬くは無い。

しかし、流石に一人の人間にはこんな魔法陣を展開することは無理だ。

それはデバイスでも同じであろう。

そう、ライナが適当に思っていると、何も無い空間から何故か……機械的な女の声が、聞こえてきた。

『しかしマスター。マスターの世界の魔法で言う、大規模魔法のように複数でするならば使えるのでは？』

なんて、ライナの独り言に声が返ってきた。

しかしライナは、それに怯えることなく、その言葉に否定的な意見を出す。

「あゝそりゃ無理だな。

まず人手がたんだい。

相手は空とか飛んでくんだぜ？

まず実践向きじゃないし、多人数でする、なんてしたら、大隊なともかく、小隊じゃ使いもんになんねーだろ。

それに、この魔法陣展開に時間がかかり過ぎるよ」

と、ライナは言う。

しかし、その女性の声は、一つ例をあげる。

『しかし私とマスターで分担すれば、

マスターの異常な構築速度と私とでやれば何とかなるのでは？

それならば大幅に短縮されると思いますが。

それに、仲間からも術式構築中は守ってもらえます』

そう、言つて、ライナの言葉に食らいつく。

それにライナは、まあ確かにそうなんだけどな〜と言いつつ、さらに否定意見を出す。

「まあ威力を弱めて出すならそれで良いんだけどさ。

どう考えても出力不足になんのよ。

アルカンシエルには特殊な科学的バックアップがあつて膨大な魔力を集積できてんだよ。

だけど、こつちにやそれに追いつくための魔力がたらないのよ」

『ならば大気に満ちる魔力を使えばどうでしょう？』

と、そう提案してきた。

それにライナは、難しい顔をした。

さて、ここで、今までの話をおおよそにまとめるならば。

ライナはアルカンシエルのあの大規模魔法は使うことは不可能だという。

しかし、女性はいはライナの世界の魔法。

つまり戦争用の大規模攻撃魔法の陣のような用途で用いてやってみてはどうか？

という答えを返す。

つまりは数人係の魔法陣構築。

しかし、ライナはそれに現実的ではないという。

それはまず時間がかかり過ぎると言う事と、人手が足りないということだ。

しかし、と女性は自分とライナが二人でやれば大幅に短縮できるのではないかと提案してきた。

しかしそれを更にライナは否定する。

何故ならエネルギー！。

膨大な魔力が足りないからだ。

それに対して、女性は成らば大気に満ちる魔力を使えばどうだと、提案してきた。

そんな流れだ。

そして、ライナはその大気に満ちる魔力を吸い取ることに、大いに難しい顔をする。

何故か、それは

「いや、それこそダメだろ。

大気の魔力ってのはつまり自然が生み出した自然に還元される魔力だ。

だから、そこから極大な魔力を吸い取っちゃったら、森とかならすぐに弱っちまうな。

この魔法って、それくらい大きな魔力を吸うんだよ。

だから航行艦も異次元からアルカンシエラ放つだろ？

あれってそういう意味もあんだよ。

それにこの魔法使つと、回りまわって街の人間にまでダメージがいつちまうし。

まあだから自然の魔力ってのに人間は多くの恩恵を受けてんだよ」

『たしかに……この魔法は不採用ですね……』

「それにそもそもこんな魔法使う場所がねーよ。

威力抑え目の状態で使って、破壊目的で使ったとしても正直破壊しすぎるだけだよ。」

危なすぎて使えねーよ『エクレール』」

『ああ……それは盲点でした。やはりこの魔法は不採用ですね』

という、ある意味色々な意味で恐怖な話し合いがされたが、その話し合いは、はたから見ればライナが誰も居ない空間に喋りかけていて、

ライナはとうとう頭がおかしくなったのか？

と、心配されそうな光景であった。

が、まあしかし、ライナの頭がおかしくなったわけではなく。

幽霊とも会話しているわけではない。

ライナが話しかけているのは、右手にはまった『指輪』だ。

……よけい頭がおかしくなったように見えるが、ライナが話しかけていたのは、

待機モードのインテリジェンスデバイス。

つまり自動AIなのだ。

「んで、エクレール。俺ってばそろそろ眠くなってきたんだけど

……」

『それはマスターが現実逃避をしているからです』

と、デバイスが辛らつな言葉を投げかけているように、このデバイスには感情のようなものが無いが、似たようなものはあるのだ。

ちなみにこのデバイスの名前は『エクレール』

正式名所は『アルモニー・エクレール（Harmonie Ec
lair）』

愛称『エクレ』だ。

名前を直訳をするのならば『調和の稲妻』という、まさに稲光^{いすち}に多大なる影響を受けた名前であった。

まあ、しかし最初はこんなにもマシな名前ではなかった。

最初のライナは、このデバイスをはやてから貰ったとき、『演算指輪』とか、『すげー勝手に俺の変わりに魔法陣組み立ててくれてヤッホー俺楽できます』なんて、壊滅的に壊れたネーミングセンスの元そんな名前をつけようとしていたのだ。

しかし、それをフェイトやなのはに、『これから長い付き合いになるのに適当に名前をつけるなんてダメだよ！』と怒られ、——本人は結構真面目につけていた様だが——考え直すことにし、今の名前になったという苦労話がある。

まあ、殆どどうでもいい話だが。

そして、ライナは気持ちの良い日差しのもと、寝そうになった瞬間に——怒声が飛んできた。

「こらあ！ ええかげんそんな変な話なんかしとらんと、空戦のBランク試験の準備しいや！！」

後に陸戦の子らの試験がせまっとるんや！！
もたもたしとつたら怒るで！！」

「うえ……」

と、怒り心頭に言うはやてにライナは面倒くさそうに声を出した。
まあ当然ライナのそんな声を無視し、はやては怒鳴る。
そう、怒っている。

このはやての怒りには、当然ある頭痛の種の一つのせいだった。

その種はそう——ライナが全然試験に行かないのだ。
この二ヶ月、試験を受けるタイミングなどいくらでもあった。

のに、ライナは全てに、理由はもちろん面倒くさいから、という理由で受けなかった。

それに、流石に機動六課に、しかも、ポジションは以外に重要な場所に置こうと思っているはやては、最低でもBランクにはしておきたいと思っていた。

だから、今回は、ライナを餌で釣って、試験会場まで無理やりつれて来たのに、当の本人は面倒くささのあまり現実逃避で物騒な話をしている。

これが怒らなくてなんなのか、と思う。

しかし、ここで怒っても意味が無いのは分かっているので、ライナに言う。

「ちゃんとこの試験をクリアできたら。

ライナの欲しがった高級羽毛布団をプレゼントしたるから頑張るや!!」

と、そんな話で釣っていたのである。

それにライナはそのプレゼントを今思い出したのか、

「おっし、俺ってばなんかやる気出てきた!!

おい、はやて! それにうそは無いよな!!」

そう言って、起き上がる。

それにはやては一つため息をつき。

「ほんまに決まっとるやろ!!

それよりちゃんと合格しいや!!」

そう怒鳴った。

「おう！　ちゃんと羽毛布団を貰えんだからそれくらい頑張っちゃうよ、俺」

『マスターは現金ですね』

本当に、ライナはライナであつた。

大人としては本当、色々と失格である。

しかし、はやては、そんなライナを見て思う。

（でも、ライナの実力は本物や……

やる気出してくれたみたいやし、この試験自体は楽勝やろうな…

…）

と、はやては思う。

この確信にいたっているのは、あるわけがあつた。
はやては思い出す。

それは、シグナムが、ライナの実力に興味を持ち、果たし状てきなものをライナにぶつけた時のことを思い出す。

それは、シグナムがライナの過去を、軍人だったことをはやて經由で聞いたことで発生した事件。

シグナムはライナの実力に興味を持ち。

さらにライナのいつもダルダルした怠惰に憤りながら、これはもしや一石二鳥では？ と、ライナを実力で叩きのめす+性根をたたき直してやると、バトルマニアよろしく決闘を申し込んだのだ。

しかし、ライナは断った。

理由はもちろん面倒くさい。

だからライナは嫌がった。

するとシグナムは、騎士として、決闘を嫌がったものに、無理強いすることもできず、

不完全燃焼なんだろう？ よろしく引き下がらずえなかった。しかし、だ。

その結果、シグナムに、ある奇行を生んだ。

そう、彼女は戦いたかったのだ。

純粹に、そう、純粹に。

性根とか叩き直すとかバトルの前ではただの建前でしかないのだ。

だから、彼女は、戦いたい鬱憤をため。

それは、彼女を変えた。

嫌な方向に。

まずはこうだ。

「勝負しろ！」

「飯くらいは普通に食べさせろよ……」

と、飯時に待ち伏せしていたのか喫茶『メリーナイトメア』で食事しているライナの前に現れけっおうを申し込む。しかしライナ嫌がる。

「勝負しろ!!」

「たまには真面目に仕事でもするかなって時に限ってなんでお前がくんだよ……」

と、ライナが珍しく仕事をしようとしたところに現れ決闘を申し込む。

迷惑極まりない。

ライナは断った。

仕方なく、シグナムは引き下がる。

どうしてもしたいならば、上官としての権利を使用すれば良いが、権力をそんなことに使いたくないため、シグナムはひきさがる。そして、今度はストーカよろしく。

「勝負してくれ!!」

「……おい、流石に帰れよお前は……」

俺の家についてきても勝負しねえもんはしねえって……」

と、家までついて来て頼む始末。

ちなみにシグナムはなのはとフェイトの飯を食って帰った。

「お願いだ!! 勝負してくれ!!」

「おいしいiiiiiii。流石にここにまでくんなよ!!」

なんでそんなに勝負したいのよ!? ……つてあう。恥ずかしいからちよつとでていってくんない?」

と、どうしてここに居るのが分かるの!?

とでも言いたくなるように、男子トイレでライナが用を達してい

るときに、頼みに来る始末。

まるでストーカーだった。

凄いアクティブなストーカーだった。

それにライナは、うんざりしたのか、面倒くさいけど思いつつ決闘を受けることにした。

何故ならこれ以上これが続くほうが面倒くさいからだ。

だからシグナムに仕方なく許可を出したのだ。

すると、だ。

シグナムは、普段絶対にライナには向けないであろう笑顔をライナに向け、

「ありがとう。感謝する。そしてお前を絶対に叩きのめしてやる
！」

と、ライナに向けて言い放ったのだ。

それにライナはどれだけ叩きのめしたかったんだよ……と、呆れたが……。

そこから、決闘に移るのにも、それなりにダラダラしたが。

ライナとシグナムは模擬戦場で対決することになる。

そしてはやてやフェイト、なのはなど、時期隊長陣をギャラリィに、決闘が始まった。

「そんで……皮肉にもそれでライナの実力わかったんやもんな…
…。
普段ライナが実力を隠しとるから……弱いと思ったんやけどな…
…」

「たしかにそうだね……あの時のライナにはびっくりちゃったよ…
…。
まさかあんなに強いなんて思っても見なかった……」

と、はやてがそう呟いていると、いつまに來ていたのか、すぐ隣のフェイトがその言葉をつなぐ。

彼女も、この試験には興味があつたのだ。

この後二人の陸戦の少女達の、引き抜きの眼にかなうかどうかを
もそうなのだが、ライナの実力をもう一度見るために來た。

といったほうが正しいのだろう。

それを感じ取ったのか、はやてはフェイトの登場に驚きつつも、

「ああ、フェイトちゃんも來とったんか。でもそうやな……びっ
くりやったわ……」

そういった。

それにフェイトも肩をすくめ

「うん、ほんと、そうだね。」

……でも、本当にライナは空戦より陸戦の方があつてたんじゃないかな？

ほら、ライナの世界、飛行の魔法ないみたいだから……」

「そやな。でも、空戦も結構さまになってたんやないの？
だからから大丈夫やろ。」

これは教官殿と副教官殿のお優しい教えの賜物やね」

「あ、あははは……でもあれは、ちよつと優しいとは言えなかつたような……」

と、フェイトは呟く。

というより思う。

あれはちよつとどころでは無かつたと。
というより鬼だつたと。

特訓は、そりやまさに鬼の如しだつた。

それは、文字通り体に教え込む特訓であつた。

サボればデイベンバスターが飛んで行き。

飛行の魔法を覚えたてのライナに向かい、アクセルシューターを飛ばし。

『自由に飛ぶにはまず危機感なの』なんて言つてビュンビュン飛ばしながらライナを追い詰めていた特訓を思い出す。

体が震えた。

なのは鬼教官という二つ名を、初めて見た感想であつた。
主にフェイトは『やりすぎだよ！』となのはを止めにはいる役立

ったのは言うまでも無い。

そして、アクセルシューターでボロボロになった——まだデ
バイスも無くバリアジャケットも無かったころの——ライナが、
疲れて墜落する捨て台詞が、フェイトの頭に今でも残っている。

[illegible]

悲しき咆哮だったのを、今でも忘れない。

ライナは、軽くストレッチをし、体をほぐす。
これから運動をしなければいけないのだ。
だるいけど怪我をしないようにストレッチは忘れない。

「はあくめんどくせえなあ。でも羽毛布団だしな、うふふふふふ。」

しかも高級！俺ってば頑張っちゃうぞ〜」

『マスターそろそろ試験開始の時間です。セットアップを』

「ああそうだっけ、セツトアップなんてあんましねえから忘れてた」

『確かにマスターは生身でも十分に強いですからね。
しかし防御力の面を上げておくのは悪くないはずです。
やっておきましょう』

「ん、まあそうだなつと……」

とライナはエクレの言葉に耳を貸し、仕方無しにセットアップする。

そして、ライナは呟く。

慣れない呪文と、慣れない服の変化を思い出し、呟くように言う。

「セットアップ……」

そう呟くと、服装が変わる。

今のライナの服装は、管理局の制服だ。

しかし、その服が変化し、変わる。

制服は青のローブとフードつきの青緑の服に変わり。

ズボンは。

白のズボンに変わる。

それは異国情緒あふれる、まるで中世を思わせるような服。

しかし、その服の意味は、

ローランド魔法騎士。

国のエリート、魔法騎士が着る服だった。

まあ、ローランドが嫌いとはいえ、思いつく戦闘服がこれしかなかったライナは、普通にこれを選んだ。

ただ単に想像力に乏しかったのだ。

そして、バリアジャケットの変化後、今度はデバイスだった。

デバイスは、魔法騎士の服装とセットである指の場所が開いた手袋になり手にはまる。

世にも珍しい手袋のデバイスだ。

こうして、セットアップは終了。

『それではマスター始まります。お気をつけて』

そうエクレはいい、ライナはフィールドを見る。

そこは、ただのビル群と、入り組んだ道。

そして、吹き抜けの空。

今回のライナの試験合格の課題は、ガジェットのすべてを破壊すること。

ビルの中や、空に無数に出てくるガジェットを全て破壊すること、ということだ。

ライナ、それらを頭の中で考え。

そして適当に力を抜き

「うっし、羽毛布団〜羽毛布団〜これで俺の布団はだいぶグレードアップすんな〜」

と、エクレの話を無視して布団への思いをはせる。
それにエクレは

『聞こえてませんね……まあいいですが……』

と、エクレが何か落ち込んだような声音をしたが、ライナは気にせず、試験を開始した。

ライナは空に飛ぶ。

すると空に幾つものガジェットが 現れるが、ライナは適当に魔力の弾を生成し全て落とす。

そして、向かってくるもの全てを落とす、自分の死角をついた攻撃もらくらく避けて落とす。

そして、建物の影に隠れつつ攻撃してくるガジェットを、五重に

した魔力弾の誘導弾で落とす。

そして巨大な試験を挑む人間が6割は落ちるといわれるガジャツトをフェイトの良く使う魔法。

ソニックムーブで急速に近づき、適当に攻撃してけん制。

そして、相手が前方に集中しきっているときに、一気に離れ、デイベンバスター。

これはなのはの良く使う魔法だ。

それらをコピーというか、適当に魔法関連の書物で見て覚えた魔法なので、今回の試験で、ちゃんと使えるか調子確かめつつ、初めて使ったのであった。

ちなみに召喚師として活躍は一切せず、ライナはあまりに適当に試験をクリアしたのであった。

しかも何故か試験最速タイムを更新したようだ。

描写が殆ど無かったが、まあ仕方ないであろう。

正直相手が雑魚過ぎた。

フェイトは驚きつつもライナすごいとか言っているが。

しかし、それに納得のいかない人間が居る。

それは、はやと、別モニターから見てているのはだ。

「あんまふざけんな!!」

『ふざけすぎだよ!!』

とはやては現地で、なのははモニター前で叫んでいた。

それにライナは、

「んだよ……俺、なんか変なことしたか？」

「したにきまつとるやる!!」

確かに今の私なら、そんな数、同じくらいの秒数でそれくらい出来るけど……。

魔法の生成する精度が凄すぎるわ!!

なんやねん五重って! ゆっくりしたらそら私でも出来るけど……早すぎるわ!!

それになのはとフェイトの魔法をそんな簡単に使われたら、私ら色々とプライド傷つくやん!!

二ヶ月で覚えてそんなに使えるとか……やっとなんわ!!」

「はあ? 俺ってば今はじめて使った魔法なんだけど? 魔法式見たのも一週間くらい前だし」

「……はあ。……色々もうええわ」

はやては魔法に関してのライナの才能に呆れた。
そして別の人、

『なんか色々理不尽だよ……』

ライナへの空戦の教導で、鬼の教官と化していたなのは、ライナの魔法の才能に落ち込んだのであった。

こうして、本当に適当にライナは試験を終了した。
本人にやる気は会ったのだから、まあそれはよし、でいいのだろつ。

後半へ続く。

B ランク試験会場前編（後書き）

答え デバイス

ライナのデバイス。

何特化かは内緒。

つまりはまだ秘密。

しかし……ライナチートですね。

魔法の天才って言うか……理解力がありすぎて体術まですごいと
なると……強すぎだね……。

まあ、それでもシグナムさんは……おっと内緒。

あとがき

最近寝不足

次。

五キロ体重減ってた。

色々と危険だと思った。

次

眠い

番外話 暗闇の悪魔（前書き）

今回は番外編。

しかも後に重要になるお話。

後編はもう少し待っててね。

もしかしたら中篇になるかもしれないけど。

あと遅くてごめんなさい。

問 アニメ版

番外話 暗闇の悪魔

そこは、とある屋敷。

そこは、光すら逃げ惑うような赤い暗闇。

そこは、赤黒く染まる、血のカーペット。

そこは、バラバラの死体が転がる地の獄。

階段。廊下。床。窓。

そこに、一目見るだけで10人ほどの死体が転がっている。

その死体の年齢に統一性はなく。

男に女、子供から老人まで、年齢は関係なく、死んでいた。

そんな地獄。

……いや、ひとつだけ統一性ならあった。

それは、この死体全てが、豪華な服を着ているモノたちなのだ。

そう、その死体全てが、貴族。

貴族だったものだ。

それを、ある一人の、闇色の髪をしたとてもきれいな顔立ちの男が、軽く一瞥して、呟く。

「あと一人ですか……逃げられるのはめんどうですね」

と、そう、人の死体を、そこらの石ころでも見るかのように、冷たい瞳で一瞥してつぶやき。

そして右手を、その右手に嵌めてある、とある指輪を宙にかざす。そして魔の、死の呪文をその男は唱えた。

「『闇よ……あれ』」

その呪文を唱えた瞬間、突如として右手の指。

その中指の指輪が突如光った。

煌々と、嫌な予感のする、気持ちの悪い、怪しく、暗く、不の念が押し込められたかのような……光を放つ。

すると、その光はすぐに消え、また、空間に闇がまた生まれた。

いや、『新たに』闇が生まれた。

男の影から、五体の漆黒の犬が生み出される。

まるで意思のない、冷たい雰囲気を持えた、悪魔の化身のごとく、地獄の番犬のような、気持ちの悪い犬。

それを一般人が一目見ようものなら、怖気と吐き気が襲ってくるかのような影の犬。

男はそれを見て、いう。

「……さて、面倒ですのであとの一人を殺してきてもらいましょ
うか」

そう、何の感情ももっていない平坦な声。

言葉だけで捕らえるならば、今から人を殺しに行くというのに。

彼の声から聞こえる感情は、まるで暇つぶしに蟻を踏み潰すかのような、冷たさを超えた狂気の声であった。

いやまて、その前に、この屋敷にはこの男しか居ない。

そして、この屋敷には無数の死体が、この美青年を中心に転がっている。

これでは、まるで……

「ふむ、この屋敷に居たものは一人を除いて皆殺しましたが……」
そう男は、なんでもなくこの屋敷のものを皆殺しにしたことを呟く。

しかし、男は切れ長の瞳を細め、困ったかのように呟く。

「さて、長男のバレル・ローデックはどこに隠れたのでしょうか……取り逃がすと困ったことになるんですけどね……ふふ」

いや、困ったように、しかし楽しんでいるかのように、鬼ごっこの鬼が、あと一人捕まえればゲームオーバーにできるとはしゃぐかのように、男は口を少しだけ楽しそうにゆがめた。
そして、

「や、やめてくれええええええ俺は、俺は死にたくないいいいいいいいい」

「おや、早々に見つかってしまいましたか。少しつまらないですね」

先ほど自分の影から出現した犬が男をかき当てたのだろうか、少し離れたところで野太い男の泣き喚くような叫び声が聞こえてきた。そこに向けて、流れる髪を携えた、男。

殺人鬼は、そこに向けて足を向ける。

コツ、コツと、地獄への道案内をする死神のごとく、靴音を鳴らし、進む。

そして男は、とある、部屋のに着いた。

地獄への道案内をするために。

扉は破られている。

おそらく影の犬が突き破ったのだろつ。

部屋の中は荒れ果てている。

おそらく中の男が暴れまわったのだろつ。無駄な抵抗だ。

そして、中にいる男は。

「いやだ……嫌だ……死ぬのは嫌だあああああ!!
やめてくれええええええええええ」

と、影の犬に向かい、バレルは泣き喚きながら許しをこいていた。
それに、殺人鬼の男は、

「助けてあげましょうか？」

と、この、今まで散々人を殺した悪魔が、微笑を浮かべてそんなことを言う。

すると、野太い声のバレルは。

「お、お前はだ、誰だ!? い、いや、助けてくれるのか!?
た、助けてくれ金ならいくらでも出す!! 地位も、私がやれる
だけのものをお前に差し出す!!
だから、助けてくれええええ!!」

と、バレルは錯乱しているのか、この悪魔のような微笑をした、
突如現れ、助けてやるといったあまりにも怪しい男に、わらにもす
がる思いで、そういった。

すると、悪魔の微笑を続ける男は言う。

「私はミラン・フローードと言います。」

フロワード家とはご存知ですか？」

そういう。

すると、バレルは、頭にハンマーでも食らったかのごとく、豹変する。

そう、あまりの身分の違いに。

「あ、あのフロワード家か！？」

い、いやあのフロワードの家が私を助けてくださるのですか！？」

「ええ、ですから、対価として一つ、情報が欲しいのです。宜しいでしょうか？」

「はい！ なんでも言います！！ ですので、助けてください！」

と、バレルは、頭を下げつつ、そういう。

が、バレル錯乱しているのか、気づいていない。

このおかしい空間に。

だが、フロワードは気づいていないのが分かっているのか、貴族の男に言う。

「では、一つ聞きたいのですが、ルーデル家が王への反逆をたくさんでいると聞きますが、本当ですか？」

そう聞くと、バレルは首を何度もたてにふる。

「は、はい。結構日時は二週間後の夜と聞いています。で、ですので、早くわたしを……………」

グチャ。

そんな音が、貴族の腹部から聞こえてきた。
それに貴族の男は、

「……あ？」

と、なにが起こったのか、何も分からないかのような顔になり
——突如激痛。

「ぐあああああああああああああああ」

貴族の男の腹部が、ごっそりとなくなっていた。
そして、すぐ隣には、黒犬が自分の体をむさぼっている。
バレルは今になって気づく。

この男は、どうしてこんなところにいるのか、と。
そしておかしいのは、まず、この男、ミラン・フロワードが現れた瞬間。

影の犬度もが、まるでゼンマイが止まったブリキのおもちゃのごとく、動きを止めたこと。

そして、この男が、貴族にもかかわらず部下も連れずにこんな場所にいる、というあまりの違和感に、何故気づかなかったのかと。
そして最後に情報と来た。

報酬の代わりに情報をよこせ。

この圧倒的違和感、いや、歪みに何故気づかなかったのかと、バレルは、今更になって気づく。
フロワードは言う。

「ありがとうございました。情報は十分です」

と、言い放ち、フロワードはバレルから背を向け、歩き出す。

それをバレルは、域も絶え絶えの声で、問う。
最後の、死の間際だというのに、問う。

「かひゅ……ひゅ……お、お前は何で……」

「喰らいなさい」

「あがぁ……」

男の問いは、闇に消えた。

そして、フローワードは、犬が自分の影に戻るのを見ようとして、

「ん？ ……………これは」

犬がくわえていた、あるものに気づく。

それは、黒い数珠。

まるで、見たこともない物質でできた数珠。

それを見て、フローワードは、思い出す。

ある情報を。

王、シオンアスタールには友人が居た。

しかし、その友人は、黒い数珠のようなものでどこかに飛ばされたのだという。

確か友人の名はライナ・リユート……。

その存在が、確かそのようなもので、どこかに飛ばされたという。
そんな、不確かな情報を思い出し、フローワードは。

「ふむ、王に、一度報告したほうが良いでしょうか」

そう考え、数珠を持って、王の執務室に向かう。

いや、その前に、一度フローワードは自分の執務室に戻る。

机をの引き戸を開き、その中にある金庫をあけ、中から出す。あるものを片手に持つて。

それは……

「いい加減世継ぎを持っていただかないと困りますからね」

とお見合いの冊子を十冊ほど持って、王の執務室に向かう。

「わたしが優良物件をお勧めしようではありませんか！！
ふはははははははははは」

なんか、怖い。

「へつくしょん。うーん。風邪かな？ 今病気とかしてる暇はないんだけどな……」

と、このローランドの王ことシオン・アスタールは妙な寒気に体を震わしていた。

今日もローランドはなんやかんやで暗躍していたのであった。

番外話 暗闇の悪魔（後書き）

答え フロワード

誕生日回のフロワードは壊れてた。うん。

あと、フロワードの口調がうる覚え。

間違ってたら言って欲しい。

直しますから。

さてあとがき

遊戯王タッグフォースを買った。

面白いのう。

次。

テイルズ買った。

まだクリアをしていない。

ちなみにエクリシア。

次。

コールオブデューティを買った。

まだクリアしていない。

ちなみにブラックオプス。

以上

おわた

Bリンク試験 後編（前書き）

問 立ち居地

Bランク試験 後編

sideスバル

私達は、今、とあるビルの屋上から、空戦の人のBランク試験を見てる。

でも、あれは凄いや……。

「うわぁー凄いなぁー。あの人誰だろう？
速くてよく見えないよ」

うん、すごいあの人、あっという間に眼前に現れたガジェットを破壊した。

しかも、後ろや真下のガジェットを、見もせずに破壊してる……。映像とかなら、有名なのはさんやその親友のフェイトさんの映像で、ああいうのは見たことあるけど、それでもこの目でこんなにも凄い戦闘を見るのは初めてだよ……。

「そうね、でもスバルあれ見て緊張しないでよ？ 私達のBランク試験も、次に控えてんだから。

足引っ張らないでよ？」

「うん大丈夫！ むしろ燃えてきたよー！！ 私達も、いつかあれくらいになれば良いねー！！」

そうだよ！ 私も、いつかあんな風に……。そう、あなのはさんのように、なるんだ。あの人のように、かっこいい、魔道師に。

昔のように、弱虫で、なにも出来なかった自分の背中を追い越して、あの温もりを、優しさを、皆に与えられるような、そんな人になりたいから。

あの時のような、私のように怖がってる人を、助けてあげたいから。

うん、頑張ろう!!

「それにしても、空戦と陸戦の試験は違うといっても、ガジェットのレベルを見れるいい機会ね。

……少しむかつとしたけど、あのーいきなり私達の前にねじ込まれた(・・・・・・・・人には感謝しないと」

「あはは……ティアはやっぱ気を抜かないね」

「当たり前よ、これは試験だもの、一定の緊張感くらいあったって良いでしょ?」

「うん! ……でも、そう考えると私も緊張してきたよ……」

って、そういえばあの人はなんでいきなり試験にねじ込まれたのかな?

ねえねえ! 気にならない!?

「緊張はどこいったのよ……」。

まああんまり緊張しないってのがあんたのいい所なんでしょうけど……

なんか調子狂うわね……」

「えへへー」

ティアはこういつてるけど私もちゃんと緊張してるよ?

ただ、それ以上にワクワクと気の高ぶりが抑えられないんだ！

「まあ頑張rinaさい。私も頑張るから」

「うん！！……………へ？」

今、私の目の前で、凄い事が起きたような……………ってやっぱり！
で、でも、そんな！？
あれって……………確か……………

「どうしたのよ？」

そう言って、ティアが私の顔を見て訝しげに眉をひそめるけど。
それ以上にあれは……………

「えっと……………あれ……………」

「？……………へ！？……………あれって」

「う、うん」

そう、あれっは、管理局で有名な、あの人の技……………。

しかも、速すぎて自分の体が振り回されるから、会得する人が少ないって言う、あの人の……………。

『ソニックムーブ……………』

そう、呟いたのは、私とティアナ、二人共だった。
す、凄い！

あの人、この試験を受けてるってことは、空戦Cランクの人の

ずなのに……凄い！

あの速さ、フェイトさんよりかはうまく使えてないみたいだけど……それでも十分に速い。

誰なんだろう？

そう思ってるのも束の間、私にとってはそれ以上に、そして、個人的な意味を持った、とてつもない衝撃を受けるものが現れた……。

「つて、へ！？　そ、そんな！？」

シュゴッ！　と、風を切る音と、ドガンッ！　という音が、ほぼ同時に聞こえた。

そして、空気に、ピンク色の残滓が散る。

この圧倒的で、濃密な魔力。

そして、砲撃のごとき……『魔力』。

あれは……

「デイベインバスター……」

私はそう呟いて、あの、なのはさんの魔法そっくりな、砲撃魔法を呆然と見た……。

一体……誰なんだろう……あの人……。

私はそう思つて、空に飛んでいる何故だかダルそうな人を見た。隣のティアが、複雑そうな顔をしているのに気づかずに……。

sideティア

なんなの……あの人……。

デイベインバスターや、ソニックムーブを使うのもそうだけど……。

あんなにも速く誘導魔力弾を五重にも包んだ。

包む速さに無駄も手間もなさそうだった……。

まるで、出来て当たり前のような、そんな雰囲気で、悠々と……。

あれも……才能なの、かな……。

私には、あんなこと出来そうにない……。

……ッ。

ううん。私は、兄さんの夢だった執務官になるんだ……。

こんな所で、折れたって、しかたない……。

例え才能が無くたって、執務官になれるんだから……

だから！

「今回のテスト、手を抜こうとも、樂觀視なんて落ちる気もサラ
サラないつもりだけど。」

今回は……」

——負けられない。

こんなところで、実力の差を見せられて、折れてやるつもりも、

夢の遠さに落ち込んでやるつもりも無い。

実力が足りなければ、無理にでも鍛える。

努力する。努力する。努力してやる！！

いつか、きつと執務官に、兄さんの夢をかなえるために！

そんなこんなで色々と思われているライナさんなのですが、ここの問題です。

不幸な不幸なライナさんは、普通に羽毛布団を買ってもらえるのでしょうか？

正解は――

「……なに、これ？」

「何って、里香ちゃん人形のベットの布団や。

一応羽毛布団やで？」

はやては、何食わぬ顔で、そういう。

「……いや、口をヒクヒクさせ、笑いをこらえていた。

そのはやての後ろで、フェイトがあはは……困ったように笑って

「ど、どんまいライナ。流石に羽毛布団は高いから買ってあげられないけど……枕くらいなら買ってあげるから……ね？ その……元気出して？」

フェイトは、ライナにそう元気付けるが、当のライナは。

「……はあああああああああ！？ おまつ！ ちょ

つとふざけんなよ!？
えっなに？ ちよつとわかんない。俺、お前がなにいつてんのが分かんない!？」

「痴呆？」

「やかましいわ!! この狸!!」

「あはは、フェイトちゃん、ライナ私のこと狸やって！
凄い可愛いって言ってくれたで？」

「この女^{あま}あああああ。ってかもうなんなの？ こいつ今すぐぶつ殺したい!!」

ワクワクして待ってたもんが人形の布団とか……あーもう俺ってば死にたくなってきた……」

ライナはうな垂れながら、絶望の人形布団を手に持ち、地面にたたきつける。

苦労して手に入れたのは実は超ミニチュアなお布団でした。
満足は、そりゃできはなしなのであった……。

ライナはそれはもう、色々とやる気をなくすのであった。
それにはやては

「殺すとか死ぬとか忙しいな。」

まあ今回はがんばったしな。

私も鬼とちゃう。

それはただのギャグや」

「へ？」

はやての言葉に、ライナは固まる。

怒りと、驚愕を混ぜ合わせたような少し面白い顔で、固まる。それにはやては少し吹き出して、言う。

「ライナのお待ちかねのお布団は家に配送しといたから……よかったな」

そう、はやてが、うししと、いたずらっぽい顔で、ライナを見。それにライナが、顔をじわじわと喜色に変え。

「ま、まじで？ これこそドンキリとかじゃなくてまじで？」

「まじや」

「お、おお……よっしゃああああああ。これで羽毛布団でふかふかできっぞー！」

「よかったね、ライナ。お布団貰ええて」

超喜んだ。

——そして正解はライナ、お布団をもらえるであつた。

正解者には足の小指をブツケル許可があたえられます。

という冗談は置いておいて。

ライナは調子に乗ってフェイトノ言葉に

「おう、俺ってば、今なら何だってやってやる！！」

そういった。

そして、そこでカチツと音が鳴る。

まるで、何かのスイッチを押すかのような、スイッチが押し戻さ

れるかのようなそんな音が聞こえた。

そして、ライナはその言葉を吐いたことを後悔する。

もう、ライナは不幸なのだ。

なにが不幸って、運と幸せに極端に恵まれていないのだ。

はやてが、笑みをつくり、言う。

ライナの不幸の言葉を

「その言葉が聞きたかった!!」

はやては、某どこかのブラックでジャックな有名な医者 of 名言を
パクリ、そういった。

それに、ライナは頭に?を浮かべ、聞き返す。

「……あ? なにがよ?」

「ほら、『おう、俺ってば、今なら何だってやってやる!!』つ
て言ったんやで?」

ライナは嫌な予感で包まれた。

それは、まるで、そう、シオンに複写眼持ちの人間だとばれ、弱
みを握られたかのような。

あまりにも嫌な予感。

それにフェイトも気づき。

「……はやて? なにをするの?」

「そら決まっとるやろ、ライナにちよつと、頼みがあるんや……」

「……俺ってば嫌な予感がすんだけど……」

ライナは、心底嫌な顔で、そういう。
それにはやては、人差し指を立てて、ウインクし、

「なに……ちょうお願いしたいことがあるだけや……ちょうライナとフェイトちゃん来てや」

と、二人を集め、作戦会議。

そして

「うえ……まじで？」

「それは……許可が無いと無理なんじゃ……」

「それは大丈夫や！ そのための許可はすでに取ってるんやで？
やから今日の日にした上に、そのために各所を飛び回ったんや。
許可はライナが圧倒的な強さでBランク試験をクリアってことで
降りるらしかったんやけど、

まあ文句のつけようはないやろ」

「……え、ってことはマジですんの？ ってかこれって範囲はど
うなんだよ？」

「それはな、私らが決めるから、ライナは好きなようにしてや」

「ああなら俺ってば適当にすんぞ」

「ダメだよ、ライナ。ちゃんとやらないと失礼だよ」

「うえゝ…… つつても面どくさいもんはめんどいんだよなあゝ良
いじゃんかよフェイトゝ
偶には手えぬいたって」

「ダメ、皆真剣なんだから、頑張るの！ ほらっ、シャキッとし
よー！」

「あはは、フェイトちゃんまるで奥さんかお母さんやなあ」

「うえ！？ ちょっと、はやてゝ」

「あははは、まあ頑張ろっかさ、へりで空飛ぶでー！」

と、ライナを指差し、はやては言う。

楽しそうに、笑いながら。

それにライナは、しんどそうに頷き。

（まあ、羽毛布団あんだし、ここは我慢すっかなゝ）

そんなことを考えていた。

そう、仕方ないのだ。

この話、今日が終わればすぐになくなる安い話。
つまりは後腐れのない簡単な話だ。

そう、はやてがいつていのはつまり、

『今回の試験のラスボスになったってくれへん？
ゴール前で構えててくれたらええわ』

という……え？ なにそれ？ な役であつた。

「……………」

「……………」

ティアナ・ランスターは、デバイスの最終点検を終わらせ、スバルは体を温め終わり、デバイス点検をする。

そして、少しガタがきているのを見つけたのか、今回の試験まで持つように、応急処置をし、気合を入れる。

今回の二人は、心のありようが、冷静で、静かであつた。

それは、ライナの戦いに影響されたというのは、間違いないであろう。

それぞれの想いと、それぞれの胸に持つもの。
それらを、二人は見たのだ。

あの空戦の受験者に。

だから、冷静に、誤りと失敗の無いようにする。

ただただ、合格するために。

すると、二人の目の前にモニターが現れた。

そこには、長い、腰にまで届く銀色の髪をした、スーツ姿の美しい少女がいた。

リインフォース・？と呼ばれる、今回の試験の試験官を勤める少女だ。

その試験官、リインフォースは、胸を張って言う。

……無い胸を張って、受験者に恒例の確認作業をいう。

「おっはようございます。さて、魔道師試験者の受験者さん二名！揃ってますか？」

そう、二人を一瞥して、居るのを分かっている上で確認するように言う。

それに、二人は背筋を伸ばし、

「はい！」

「はい！」

挨拶する。

そして、それにリインフォースは頷き。

二人の所属を確認する。

「時空管理局陸士386部隊所属の、スバル・ナカシマ二等陸士と――」

「はい！」

と、まずはスバルの所属を言い、それにスバルが返す。
そしてもう一人、ティアナへと確認する。

「同じく、ティアナ・ランスター二等陸士」

「はい！」

リーンフォースは、二人の返答に満足し、もう一つ、確認作業に移る。

「所有している魔道師ランクは陸戦Cランク。本日受験するのは、
陸戦魔道師Bランクへの昇格試験で間違いないですね？」

と、今回の受験項目を二人に問う。

すると、スバルとティアナはそれぞれに返す。

「はい」

「間違いありません」

と、緊張しながらも、真面目に返してくれる二人に、満足そうに
頷き。

そして自己紹介と挨拶をする。

これもまあ恒例だ。

「はい。本日試験官を勤めますのは、私リーンフォース・？曹長
です。よろしくですよー」

「はい！よろしくお願いします」

「よろしいです」

と、リインフォースは頷いた。

sideフェイト

今、私達はヘリに乗って、陸戦の子達の受験をモニターで見ている。

今回は、はやてが見つけてきた子達だ。

「うっはーちよう見てみい！ あの子ら、ライナと違って凄い真面目そうやで！

それに、あの子らの経歴みてる、中々に努力家そうやし、伸びしろもありそうやから、中々に期待できる思っよ！」

「はやてが言うならそうなんだろうね。

でも、あの子達、どこまでやってくれるかな？」

「うーん……持って2分……悪くて1分もかからんかもな」

「うん。そうかも知れないね」

そう今回の試験、ちょっとしたものを用意してある。

私の隣の席でのんきに寝ているライナは……まあ興味なさそうだけど……今回ライナ、関係あるんだからもう少し興味を持ってくれないかな……。

それに、今回の試験、ライナの動き方しだいで、あの子達の状況判断力も見れるんだから、頑張ってもらわないと。

そう思っていたら、はやてが言う。

「ほんま、今回は色々と盛りだくさんな試験や。あの子らも、ライナの空戦でガジェットの動き方、強さがある程度分かったはずやし、

今回は試験の大半は楽勝や無いと困る。最後の関門を、どう対処しようとするかで、今回の試験を見るつもりやしな」

「うん。そこに気づけたなら、今回は合格かな？」

「やな」

そう、そこに気づけたなら、しっかりとした戦いに相応しい子達と認めて上げられる。

ガジェットに対する攻撃の速さや、強さに対するヒントはあげた。どうやれば逃げれるのかも見せた。

だから、あのこたちは、後は、やるべきことをやるだけだ。つてああ……ライナったらまた涎が……。

最近忙しかったから、疲れてるのかな？

とりあえず涎は拭いておいて……よし。

毛布でもかけてあげておこうかな。

ふふ、相変わらずライナは気持ち良さそうに寝るな。

「お母さんかいな……」

はやてが何か呟いたけど、いや、流石にお母さんは歳が近すぎるよはやて。

sideティアナ

今回の試験は、少し何か変だ。

というより、おかしい。

というより、絶対におかしい！！

試験が始まる前、

『今回の試験は、仕様が今までと少し違ってしまいまして、ガジェットを必ず全て倒す必要はありません。今回は、いかにゴールにたどり着くか、が鍵となります。所謂撤退戦ですね。』

ですので、今回のガジェットは数が少し多いですけど、好きなように扱ってもらってかまいません』

なんて、あの試験官さんは言ってたけど……。

「ちよっ、ティア！ そっち行っただよ！！ 打ち落として！！」

「任しなさい！！」

ガンッ！ と銃声を鳴らす。

いつものように、腕に魔力を打ち出す振動。

その後に、ゴオン！ という機械の破砕音。

そう、私はガジェットを破壊したのだ。

そして更に私は銃を鳴らす。

いくつも、いくつも鳴らし、ガジェットを破砕していく。

圧倒的な破壊。

圧倒的に私達はガジェットを粉碎し、破壊していく。

スバルも、リボルバーナックルで敵を破壊し、粉碎する。

この程度の敵で、私達が負けるはずが無い。

だけど……

「てい、ティア！ あそこ、あそこに空間が出来たよ！！」

「ええ、分かってる！ 行くわよ！！」

「うん！」

私達は今、猛速に逃げている。

試験官の方が言っていた『撤退戦』

そして、ガジェットを好きなように扱って言いという言葉の意味、

その時点で、私達は気づくべきだった。

もう、なんで、気づかなかったのかしら……いや、気づいたところ

で今の状況は変わらないと思うけど……。

と思いながら、私は後方に向かって銃を撃つ。

もちろん出るのは魔力弾。

それがガジェットを破壊する。

だけど……

「焼け石に水ってこのことね……」

そう、焼け石に水……

一発当てて壊した程度では、あまりに意味の無い――

「うわーんこれって本当にBランク試験なの？」

「煩いわよスバル！ そんなこといって暇があるなら、あの『大群』相手に逃げ切る方法で考えなさい！！」

「無理だよ、数が多すぎるよ」

「弱音吐かない！ というより、本当なんなのよ！ あの視界一杯を埋め尽くすガジェットは……！」

――ガジェットの大群。

それも、数百はいる大群……。

……これは絶対におかしい。

だってスタートしてすぐ、数百もの大群がいつせいに追いかけてくるのよ！？

まともに戦うなんて無理に決まってるじゃない！！

さっき戦っていたのはガジェットに囲まれて、逃げ出すために戦っていたに過ぎなくて、本当に逃げるためだけに全身形を使ってるんだから！

よーいドカンッ！ ってガジェットからの攻撃なんて酷すぎるわよ……！

しかも全然少し多いってどころじゃないわよ……！！

「ゴールまで………あと五百メートル………」

今まで走ってきた道から算出するならそうね。

あとはビルの中に入って敵の数に制限を入れつつ敵の数を少なくして、ビルの中から一気にゴールまで一本道の道路に出る。

なら、あのビルを横に進んで、いけばゴールへ近道できるわね。

「スバル！ あと少しでゴール付近よ！！！！ 頑張りなさい！」

「う、うん。わかってるけど、流石に攻撃を避けるのもきつく――
――ってあれ？」

「頑張りなさいスバル！ はやくあそこを曲がりなさい！ 近道よ！」

「え？ う、うん。でも、ティア……」

「もう、速くしなさいスバル！ もう少しでゴール……る……って
……え？」

な、なんで。

もうゴールも近くって言うのに……これって……。

あまりの出来事に、何もいえなくなつた私の変わりにいうように、スバルが口にする。

「ねえティア。なんでガジェット達が来てないの？」

そう、まるで、消えたかのように、ガジェットが姿を消していた。

s a d e はやて

さあガジェットはさがってもうたで？

あとはゴールするだけ……怪しいな、本当に怪しいな。
怪しいのはわざとや。

緊張感を持たせて何事にも構えさせるためにや。

それで、最後の関門に差し掛かるんや。

その最後の関門は……

「なあフェイトちゃんそろそろ」

「うん分かってる。ほら、ライナ！ そろそろだよ？」

「……ううん……ああ……ふああ……んあ？ そろそろ？」

「うん。一応ゴール付近まで来たみたいだから」

「うーんめんどくせえけど……『最後の関門やってくるよ』」

そう、最後の関門。

ライナ・リユート、軍人さんや。

まあえらい意地の悪いテストやけど……犯罪者を相手にするんや。
これくらいでへこたれたら困るけどな。

さてさて、この関門をどう切り抜けるか、あの受験者らの腕の見
せ所やね。

ライナは、ヘリの扉を開け、下に飛び降りる準備をする。
パラシュートはなし。

当たり前だ。

これからライナはボスキャラとして戦いに行くのだ。

そしてライナは空戦局員。

空くらい飛べなければ困る。

なのでライナは、すでに開け放たれたヘリの扉まで歩く。
そして、

「はあ……俺ってばめんどくさいな」

「今夜飲みにも連れてったるから、頑張つてや！」

「いや、お前と行くと絶対にめんどくさい事になるから余計に嫌だよ」

「どういう意味やねんそれ！」

「あ、あはは……そ、そろそろ時間だから、ケンカは後にしようよ」

「む、そつやな……フェイトちゃんがそついうんなら、我慢してるか……」

なんて、無駄な言い合いをし、ライナはやっぱめんどいなく帰って寝たいな〜なんて思いながらも、ダルそうにゆっくりと体を前に倒し。

ヘリの扉から、頭から落ちる。

最初はゆっくり、そして徐々に加速していくスピード。

風は頬を揺らし、紙を揺らす、ライナの瞳はだるそうに緩められたまま下を見据える。

真下には一本道を走る二人の少女。

短髪のローラースケートを履いた少女と、銃を持ったツインターの金髪の少女が、ゴールに向かい走っている。

もう、ゴールまで100メートルもない。

少女二人は、納得の言っていないような顔と、もうすぐゴールだという喜びの矛盾した顔で、ゴールまで全力で走っていた。

スバルが笑顔で言う。

「ティア、もうすぐゴールだね!!」

そうスバルは笑顔で、もう近くに迫っているゴールの喜びをティアナに言う。

が、ティアナは浮かない顔で、しかしゴールの近さと、タイムの余裕さに喜色を隠しきれない顔で、スバルに返す。

「そうね、でも、気を抜かないこと！ ガジェットが急に引いたのは、たぶんこの先にあれ以上のものがあるからよ。気を引き締めていきなさい！」

「うん、そうだね。私もちょっと気になってたんだ。だから、気を抜かないようにするね！」

「ええ、でも、ゴールは近いわ！ 何が出ても、ゴールを目指すわよー!!」

「うんー!!」

と二人は、数百対のガジェットの大群から逃げ切れて余裕が出てきているのか、ある程度の緊張感を持ちつつ余裕そうに言葉を交わした。

が、二人の余裕はそこまでだった。

ライナは、地面に向かって高速で降り、顔が地面にぶつかるスレスレで、魔法で体を宙にとどめた。

そして、体を正面に戻し、二足でタンツと靴の音を響かせ、地面に降りたった。

そして前を向く、場所は、二人の少女の目の前。

そして、二人の少女にとっては、ライナは異物として現れた。

で、その異物はというと……

「ふわぁ〜……だるいなぁもう……俺ってば戦闘とかやる気がある奴だけやれば言いと思うんだよね〜……」

と、ライナは相変わらず眠そうに言うが、戦闘形状に移行したデバイス、手袋状のエクレールがライナに、言う。

『マスター、それは私も真理だと思いますが今回は頑張っただけ

てみては？

はやて様のためにも、フェイト様のためにも、なのは様のためにも、そして、目の前の二人のためにも、頑張ってみては？』

「ん〜？　なんでよ？　はやてと目の前の二人のためってのはまあなんとなくわかんだけどさ〜。

フェイトとなのはのためってのはどういう意味よ？」

『マスターも聞いたと思いますが、機動六課が設立されます。

そして、目の前の二人がもしかしたらフェイト様、なのは様のチームに編入され、教え子になるかもしれないのです。ですので手を抜くのは、戦闘データにはあまり良くないかと。それに、目の前の少女達の頑張りを侮辱することにもなりますので、あまり面倒くさそうにするのは……まあ直りそうにないので、戦闘は本気を出してあげてください』

「ん〜……面倒くせえな〜……まっ、それなりに頑張るよ」

『はい、頑張ってくださいマスター』

と、異物さん達は、気楽に今後のことを話しながら、なんとかライナにやる気を出させようとする健気なデバイスのお話であった。

して、その異物を見て、スバルは

「あ、あれ？ あの人……どっかで……」

そう、見覚えのある人相に首をひねり
ティアナは

「馬鹿、スバル。あの人、私達を助けてくれた人よ」

「あつ！ そうだ！ なんか見た目が様変わりしてたから気づく
のが遅れちゃった。

で、なんであの人？」

「……たぶん、あれが最後の関門なんじゃないの？」

「えええ！？ そうなの！？」

と、ティアナとスバルは、ライナの顔から視線をはずさず、そう
話す。

彼が最後の関門だとしたら、何故？ とも思う。
だからスバルは、率直に聞いてみた。

「えつと、前に助けてくれた人ですよ……？ えつと……試験
の仮想敵役ですか？」

「つてスバル！　これは試験なのよ！　敵だったとしても、そう簡単に教えてくれるわけ……」

「んあ？　まあ最後の関門？　つて奴だと思っけど……　つてどうしたのよお前」

「……いえ、もう少し自分に正直になったほうが楽なのかしらなんて思っただけよ……」

そう言っつて、ティアナは本気で疲れた顔で、そう呟いた。

「「？」」

そんな言葉にライナとスバルは、二人そろって首をひねった。
なにに疲れているのか、そして何が言いたいのかが分からないからである。

真面目な人間は損をする。

これはそんな話であつた、丸。

「で？ やるの？ 俺ってば遠慮しときたいんだけど」

と、ライナは二人にそう聞いた。
すると、スバルとティアナは、なんだか気が抜けて

「えつと……え？ 戦うの？」

なんて、ティアナに聞く。

まあ気持ちは分らないでもない。

試験最後の関門と自分で言っておいて、しかし本人にやる気がない。

もう、なんなんだと……

「さあ？ あの人に戦う気がないんだからスルーで良いんじゃない？」

「え、えつと……いいのかな……？」

と、スバルはライナを見る。

するとライナは欠伸をしながら頭を？き、

「ああ……ねむ——」

『マスター……先ほど頑張ると……』

「——ああ、そういやそうだった。確か大切なんだっただ
っけ？ ん〜じゃまあやるか」

と、ライナは柔軟をしながら。

「んじややるから、お前ら構えとけよーあ、やっぱいいや、俺が楽だから」

そういった。

するとスバルとティアナは

「ええーやるのかやらないのかどっちなのー」

「はあ……こういうペースの人なのね……」

スバルは困惑しながら。

ティアナはなんだか色々と諦めて、戦闘の構えを取った。
とりあえず、スバルに一つ、耳打ちをして。

sideなのは

あ、あははは……。

ライナは相変わらずだね……。

まさかこんな本番も本番でこんなに気を抜くなんて……。
後で少し怒っておこうかな？

でも、あのライナの地面スレスレで降りるのは、少しヒヤッとしたかな……。

度胸も魔力のコントロールも凄いいけど、ちょっと危なすぎるよね。
……それも後で怒っておこう。

ライナは少し、自分のことに無関心すぎる気がするし……。

…… たぶん、それはライナの過去に関係があるんだろうけど
…… うん、やっぱり怒っておこう。

ライナは、自分の命を大事にして欲しい。

それにしても…… 最近ライナライナって、ライナのことばかり
考えてる気がするな……。……。

手のかかる子供を持つって言うのは、こういうことなのかな？

うーん。

子供を持つときは、ちゃんとそこらへん、教育しないとね。

まあ、私なんか好きになってくれる人が居るとは思えないんだけどね
どねー…… あはは。

sideフェイト

ああやっぱりライナ、不真面目だね。

なんとか戦ってくれそうだけど……

「なんや！ ちゃんとせいやライナ！！ こう、ドカーンってい
ったりやー！！」

はやてがライナの不真面目さに怒ってて手がつけられないよ……。

お願いだからライナ…… 真面目にやってね……。

エクレも、お願いだからライナを何とかしてあげて。

私がいけたら、私が説得するんだけど……試験の本番中に行くわけにはいかないから……。

はあ、ライナと出会ってから色々慌てたり忙しかったり、苦勞してるきがするな……。

まあ最近慣れてきたんだけどね……。

うん。

それにしても、ライナは本気で戦うのかな？

あのときの、シグナムとの戦いで見せた、ライナの強さだと、勝負にならない気がするけど……。

うん……どうするんだろう？

あの二人が気づく前に、倒されたら、それはそれでかわいそうだな……。

sideはやて

やっとライナが構えよった。

ああもう、

「これやから不真面目は!!」

なんやねんもう!!

シグナムと戦ったときみたいな実力だしや!!

それで徹底的に受験者のプライドをぶっ壊したり!!

打っ叩いて伸ばすんや！！

ほんまこれやったら無理やりねじ込んだかいが無いやんか！！

これはライナのためでもあるんやで？

たぶんガジェットだけじゃあ人間を相手にしてないから信用が低い。

やからライナの不真面目さと次元漂流者での信用の無さを、あの二人を倒すことで機動六課含めて内外に実力を知らしめて信用を得させよう言う私の親切心を知っててやってるんやろうな！！

……って、そういえばそういうこと……言っておらんかったわ……。

……ま、まあ気づかへんライナが悪いんや。

ソウニキマツトル……。

……うう、いっとつたらもう少し真面目にしてくれてたやろうか……？

ライナの性格は、どこまで言っても最後は必ず優しいから……ちゃんと私の思いを汲み取って真面目にやってくれてたやろうな……。

……はあ、今更後悔しても遅いかな……仕方ないから真面目にやってくれるよう、祈るだけやな……。

……はあ、ライナが来てから心労とため息が多いわ……。

開発んとこのあの腹黒と繋がりができたせいでもあるんやけどね……。

……はあ。

魔弾がヒュゴツと風をなぎ払いながら二人に迫る。
スバルはその魔弾を拳ではじき、ティアナはなんとか魔力弾をぶつけ、相殺する。

一見してみれば互角のようにも見える。
が、二人には全く余裕は無い。

「ッ……速い!!」

魔弾の正体は、ライナが手の平から生み出す魔力弾。
それはまるでティアナの銃から打ち出される魔弾のごとし速さでせまる。

スバルは、その魔弾を冷や汗を流しつつはじく。
が、一つはじくとその後ろに更に二つになって迫ってくる。
さらにその二つを弾くと3個、4個と増えて、絶え間なくこちらに向かって飛んでくる。

「なんなの、これ!!」

あまりの暴雨のごとく迫る魔弾に、スバルはそう叫んだ。

だが、ライナは眠そうに手の平をスバルに向け、魔弾を打ち出す。
手から、黄色、赤、青、ピンクと色鮮やかな花火のごとく撃ちだされる魔弾。

だが、はたから見れば、まるで花火のマシガンだ。

だが、威力と精度は低い。

弾の一つ一つは拳でぶん殴られるような威力で、そして魔弾はこちらの足元や体の横を通り過ぎていたりしているものがある。

ただの、基本的な威力の低い魔力弾。

それだけなら、やろうと思えば、誰だってできるであろう。

だが、速い。

そして、数があまりにも多すぎる。

高速で迫る魔弾。

絶え間なく撃ちだされる魔力の弾。

膨大な数の魔力弾を維持する魔力量も凄いが、それ以上に驚くものがある。

「なによ、あの見たこと無い魔法陣……」

ティアナが膨大な数の魔弾を何とか打ち落としながらそう呟いた。見えるのは、どこでも見たことが無い魔法陣。

まるで、見たことの無い青色の幾何学模様の魔法陣。

その魔法陣から、絶え間なく多種多様な色の魔弾が生み出される。

「くっ、このままじゃ、やられちゃうー!!」

スバルはそう叫び。あまりの速さで迫る魔弾に冷や汗を流しつつ、幾らか弾を体にくらいつつライナに迫る。

肉を斬らして骨を絶つ。

「あああああああああああああああ」

スバルは雄たけびを上げながら、右腕を前に出し、迫る魔弾をシルドタイプの防御魔法で防ぎつつライナに向かい走り出す。

「うあつ……あああああああああああああああああ
あああ」

あまりの数の魔弾がぶつかって来る衝撃でシールドが吹き飛びそうになるのを魔力で一気に補修し、そのままライナにシールドを維持しつつ、ローラーブーツのデバイスに一気に魔力を流し、高速に強引に突っ込む。

そして拳を、ライナの顔に向けて、

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお」

振りがぶつた。

ヒュゴッ。

そんな風を粉碎するかのごとく音とともに、拳が圧倒的な覇気と闘気とともにライナに迫る。

だが、

「ほい、と」

ライナは、撃ち出している避けるには邪魔な魔法陣を消し、ひよいつと顔に迫った拳を若干屈んで避ける。

そして、スバルが勢いあまって拳を何もないところで振りぬき、ライナの横を通り抜けようとする。

「顔を狙ってんなら視線は顔を狙わないほうが良いぞ？ そんなんじゃコールパンチ、場所を教えてるようなもん——」

と、そう忠告する、と。

スバルはその拳がライナの顔を通り抜けた瞬間、まるで車が急ブレーキをかけたかのようなブレーキ音。

そしていきなりスバルの裏拳がライナの後頭部に迫る。

「——うおっ!？」

と、ライナは驚きつつもそれを更にライナは一気にしゃがんで避ける。

それに、スバルが舌打ちしつつもそのまま叫ぶ。

「ティア!! 今!!」

「分かってるわよ!!」

ティアナは、スバルの大声と同時にライナの体めがけて魔力弾の雨を降らせた。

sideなのは

「凄い……」

見る限り、凄い息の合った、レベルの高いコンビネーションだ。
まず、あの青髪の女の子が高い防御力で突進して、拳を振るう、
そして邪魔な魔法陣を消させて、避けられるのを覚悟でコールドパン
チを放つ。

もちろんライナの実力だと、当然避けるだろうことを、私は知っ
てる。

そして拳を避けさせて、体もライナの横を通り過ぎたところで体
を反転。

ローラーブーツのデバイスを凄い勢いでブレーキと急ブレーキで
反転させつつ裏拳で後頭部めがけて攻撃、と。

この攻撃、最初の拳は当たれば御の字、当たらなくても次の裏拳
につなげる二段構え。

でも、それだけじゃ無い。

これは、更に次につなげるためのコンビネーション。

それは、あの銃のデバイスの子の魔力弾の連続射撃へと繋げる技。
裏拳が当たれば、その上で銃撃のダメ押しを与えられて、裏拳が
当たらなくても、銃撃でノックアウトさせられる三段構え。

よほど息が合っていないければ、できない芸当だね。

これは、凄い有力な子達だよ……将来が凄い楽しみ。

………だけど、それだけじゃダメなんだ。

ライナは、私達の魔法も使えて、その上で、更に素の身体能力が
とても高いんだよ？

……ほら、ライナが動いた。

銃撃は絶え間なく、ライナの居る場所を寸分たがわず打ち抜く。
……そのはずだった。

「うそ！ どうやって!？」

だが、ライナはそばにはおらず……いつの間にかティアナの隣で
「うおっ、あれに当たるといたそうだなあ。俺ってば痛いの嫌
なんだよね」

そんなことを呟いていた。
それにティアナは急いで銃を向け撃とうとするが……。
ライナは、ティアナの足を払い、地面にこかし、更にティアナの
手の銃型デバイスを蹴り上げる。

「——っ！」

カラカラと、銃が、ティアナの手元から地面をすべり、遠くに離
れる。

それをライナはスバルを一瞥し、そしてティアナに向かい。

「んじゃ、俺の勝ちっ」と

と、ティアナに適当に二重にバインドをかけ、縛る。
すると――

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

「――よつと」

スバルがその、ライナがティアナを縛っている隙を突いて右拳を振りかぶって、殴ってきたのを左に飛んで逃げる。

「当たらない！！　こんなにも攻撃してるのに……　どうして!？」

単体で攻撃を当てようとしても無理だった。

だから、ティアナとの連携攻撃をしたのに、それも無理だった。
どうして!？　そう、スバルはライナを見ながら、そう思う。

それにライナは、至極簡単に答えた。

「俺はソニックムーブ使えるんだぜ？　それで実践も積んでるし……　そんな程度体術も使える。普通の肉弾戦で勝てると思ってんの？」

と、答える。

それにスバルは、実践の重さと、経験の大切さが必要だと、言外に含まれた言葉に、気づく。

ただ、ライナは、この戦いで、その大切さを伝えてくれているのだとスバルは思う。

まあ実はライナじゃなくはやてがそう考えていたのだが、今は関係ない。

スバルは、言う。

自分の弱さを、自分の未熟さを、自覚しつつ。

「……強いんだね。ティアナは居ないし……もう、私じゃ勝てる気がしないや……」

「ん？ そう？ なら俺ってばもう帰って——」

「でも……」

「んあ？」

スバルは、拳を握り締め、胸に当てる。
思いをこめるように。

自分の、誰にも負けたくないような、熱い思いを、拳にこめるように、
胸に当てる。

そして

「諦めてやらない！！ こんな所で、諦めてちゃ……私の夢を……
……苦しんでる皆を救ってやるって夢を、諦めることと一緒にだから……
……！ だから……」

「スバル……」

拳を、ずっとライナに向け、圧倒的な力なの差に、へこたれるところか、より熱い闘志を燃やし。

ティアナは、そんなスバルの啖呵に、なにやら、悔しそうに、でも、嬉しそうに笑い。

自分の今のバインドで捕まっているふがいなさに、才能のなさに、
苦悩しつつ。

でも、前に進もうと、スバルとライナの戦いを見届けようと、前

を向く。

スバルは、ライナに言う。

「負けたとしても、悔しさを忘れないために。この戦いを忘れないために……いきます!!!!」

そう、スバルは、ライナに向かい、突っこんだ。

ライナは、そんなスバルの啖呵に、一度ポカン呆然とし。
そして、スバルの夢。
誰かを救うという夢に、少し嬉しそうに笑って。

「んあ……今回はちょっとだけ、本気出してやるか……」

『マスターはお優しいですね』

「ちょっと恥ずかしいからそういうツッコミはいれなくて……」

『スバル様の啖呵に、共感されたのでしょうか?』

「……まあ、いいじゃん。ああいうの、嫌いじゃないよ、俺」

と、ライナは眩きスバルに向かい、構え――

「よっと」

「うわぁ!?!」

——ライナはスバルの拳を最小限の力で受け流し、足を引っかけける。

勢いをつけて突っこんでいていたスバルはそのまま前のめりに倒れそうになるも

「——うぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

なんとか踏ん張り、拳を裏拳の要領でライナに向けて振り上げる。
だが、

「よつと」

ライナはそのスバルの拳が来る前に一步すでに離れていた。
一撃離脱。

今回のライナはそういう構えのようだ。
力だけじゃ受け流される。

でも、スピードで勝負しようにも、あちらのほうが上。
技で勝負しようにもあちらのほうが上。

スバルは、瞬時にそう思い至った。

自分が相手を上回っているのは、おそらく力だけであろう。
そうとも思い至った。

だから、

「だったら、力が無理なら、さらに力で!! いけえええええええええ」

拳に、青い魔力が集中し、瞬時に爆発。

拳の勢いが、速度が、爆発的に上昇する。

足のデバイスは、まるで今にも壊れそうなほどの音を立てながら、ギャルルと音を立て、前に進む。

この、拳の魔法を、必ずぶつけてやるために。

そう、これは魔法。

この拳の青い魔力は魔法。

あこがれでつけた名前。

あの、あこがれた、救ってくれた高町なのはの、魔法——魔
法名。

その名も

「うおおおおおおおおおおおおディバインバスタあああ
あああああああああ」

スバルの魔法は、青い閃光とともに、解放された。

——静かになった。

何も聞こえない。

それは、先ほどまで、激戦を繰り広げていたものたちの戦いが終わった静寂という名の音。

その静寂の中、勝者の声が、その静寂を打ち破る。

「——危つぶね……俺ってばもう少しで当たっちゃうところだった……」

声の主はライナ。

声は、少し焦った感じと気楽さを内混ぜた微妙な感じ。

ライナは、少しだけ冷や汗。

だが、とりあえず足元で倒れている、スバルをライナは見やる。

スバルの靴のデバイスのせいか、熱く熱した地面に横たわるスバル。

状態は、体に大きな怪我は見られないが、集束砲受けたであろう少しの焦げ痕。

そして本人は目を閉じていて——どうやら気絶しているようだ。

腹部になにやら服が擦れたような打撃痕がある。

そこから分かるように、強烈な打撃がスバルの腹部にぶち当たり、気絶しているようだ。

ライナはため息を一つ吐いた。

そして、気絶していないティアナに向けて、右手をダルそうに上げて

「はあ——んじゃ、試験終了ね、ふあ……」

ライナは眠そうに頭をかきつつ試験終了を告げた。

今回の内容。

自分達の拘束と撃墜。

まさしくこの内容はティアナとスバルにとっては大きな敗北だった。

ライナは倒れているスバルをお姫様抱っこで担ぎ上げ

「んじゃ、こいつ医務室運んで終わりね。あゝ疲れたゝ」

そう呟いて、もう一度ティアナを見る。

彼女はまだ、バインドで拘束されていた。

悔しそうに、でも、何か目標と、志と、そして自分の中の壁を見つめるように、こちらを見ていた。

それにライナは、

「んじゃ、お前も一応医務室な」

といって、バインドをとく。

それにティアナは腕の調子確かめるように動かして、そしてライナに聞く。

「……………どうして？」

「んあ？ 何がよ？」

ティアナの質問にライナは首をかしげる。

それに、ティアナは首を横に振って。

「……………いいわ、大体分かってるしちゃんと見たもの」

「？」

ライナは本気で分からないかのように首をかしげて、

「まあいいか一応ついてきたくないってんなら場所言っとくよ。
本局の第二医務室ね、んじや」

そう呟いて、スバルを抱えてよいしょと一言言って医務室に行った。

それに離れていくライナの背中を見てティアナは、

「……………負けない」

何かを決心した後、涙を流して空を見た。

何もできなかった自分の弱さに、心が折れないように、嗚咽を漏らしながら。

s i d e スバル

意識がまどろんでる……………。

体が揺れている……………。

……………誰かに担がれてる感じがする。

……………何でだろう？

ああ、そう言えば私、確か……………戦ってたような……………それで……………

「あ……負けたんだ」

口から、声にならないような掠れた声 leaked out.

でも、**事実は分かってるから、別にいいんだ。**

そう、私は戦って負けた。

本気の本気をこめた拳で殴りかかって負けたんだ。

後悔なんてないし、それに、まだ私が強くなる可能性を、大きく
なる可能性を見つけた。

あの人、
凄い。

寝そうな顔して、でも、何か大きな、悲しいことを抱えたような瞳をした人。

拳をあわせるたびに、感じて、一撃を受けた時に確信した心の弱さ。

でも、前に進もうとする今にも崩れ去りそうな心の強さを持った人。

ああ、そう言えばまだ名前を聞いてなかったけ？

一体なんだろう？

あの人の強さを知りたいな……。

そうすれば、私は、心も身体の強さも、成長する気がするんだ……

□
□
□
○

どうすれば、あそこまで強くなれるんだろう？

——
——
——
——
——
——
つてここまで考えて状況を放置しといてあれだけど、

今私は誰に担がれてるんだろう？

そう思って、私は瞼を薄く開いた。

「んあ？　もう起きたのか？　でもまあ一応もう一回寝とけ。俺も疲れてすんげえ眠いの我慢して運んでやってんだ。今は寝とけよ」

……なんで目を開けた瞬間にこの人が私の目の前に居るんだ

なんか力が入らない……。

「はあお前無茶しすぎ……。全魔力あリンカーコアの拳に集約してたる？ 俺
つてばあれ防ぐのに反則使っちゃったから無理やり魔力が発散され
ちまって体に変調来してんだよ。今はあんま無理せずねとけて」

「え？ 反則？」

体の変調のことも気になったが反則って言葉に私はつい反応した。
だ、だって目の前で使ったからソニックムーブ使う暇も無かった
だろうし……。それに勝負事に反則なんて嫌だよ！ だから、私はす
こしうたがった目で見ると。

「ああ……。めんどいなあ……。どう説明すりゃ角が立たねんだ……。
？ えっと……。ほら、俺ってばお前の魔法を解除しただけぜ？ じ
やダメ？」

なんて、苦笑いで自分のこととこっちを案じたように悩んだよう
に、でも気安く言ってくる。

その言葉に、うそは無いように思う。
何故だか私はそう思っちゃった。
何でだろう？

「……あ」

そっか、この人の苦笑い、なんか嘘はついてないような不真面目
だけど、それでも凄く純粋な、そんな顔してるんだ。
だから、なんだか納得しちゃった。

……まあでも、

「えゝなんか意味分らないよゝ」

結局意味が分らないよ……。

結局反則って何？

「だよなゝでもいつちゃダメだろうしなあゝってことで内緒ね」

「えゝ」

……結局教えてくれなかった。

それに、その後問い詰めようにもすぐに私は疲れが出たせいで、意識を落としちゃったんだ。

……あ、また名前聞くの忘れてた。

こんど目覚めたら、絶対聞いておこつと。

あ、でもティアが聞いているかもしれないし、ティアにあとで聞いておこつと。

それに、最後の止めを刺した魔法。

正直、まあちよつと嬉しかったかな？

……ってあれ？ そういえばティアどこに居るんだろ？

sideなのは

「すごいね。レイジングハート」

『はい。予想以上だったと思います』

予想以上。

それは、バトルに関してのこと。

あのバトル。あのライナへの最後の攻撃。

あれは、少し凄くて。無謀な攻撃。

あの場面で使うべきじゃなくて。

そして、

「彼女は逃げるべきだったね」

『はい。マスター』

そう、逃げてゴールに向かうべきだった。

彼女の最後の攻撃。

拳に青い魔力を集束型の私の魔法の名を冠したディバインバスタ
！。

……彼女、ちゃんと頑張ってたんだね。久々に見て、少し嬉しく
て。成長してて、もっと嬉しくなっちゃった。

でも、失敗は失敗。

彼女はミスしたの。

そう、彼女の最後の攻撃。

「デインバスタアアアアアアアアアアア！！！！！！！！」

スバルの拳が青い咆哮を上げライナの腹部を狙う。

顔は狙わない。

顔は、恐らく避けられるだろうから。

目の前のこの寝癖でばさばさの人は、もの凄い体捌きだ。

顔なんて小さな的是狙えない。

だから、大きなガードを許してでも、腹部を、ガードごと貫く！

!

スバルは拳をライナの腹部に、叩き落した。

「うえ！？ や、やべえ！？ エクレ！ 障壁障壁！ シール

ドタイプ！」

了解ですマスター

だが、その拳は、シールドタイプの障壁で防がれた。

一方向に向けて強力な魔力障壁を張る、全方向を守るバリアタイプとは違う、一点特化のバリアー。

ライナは、その障壁をエクレールに目の前に張るように命じた。

だが

「うええ！？ やべ、貫かれる貫かれる」

ライナはガードを、もう貫かれそうになった。

「あああああああああああああああああああああ
あああああ」

もう、すでにシールドを貫かかっていた。
だが、ライナは少し冷静になる。

と、ライナは一つ弦き、

と、一つアイディアを思いつく。

……いや、魔法とは厳密に違うが、これは、魔法に関連する技。
ライナは片手を目に当てて、指の隙間から見る。

「んじゃ、解除解除つと……うえええ。すげえ魔力が……えつと、ここをこうして、これがこうだろ？　そんでこれで魔力が外に暴走するようにして……よつと」

魔法解除。

ライナは魔法陣の配置。魔力の書き換えが複写眼無しで得意だ。だが、それでもじつくり見て魔法陣を組み立てればの話だ。

しかし、今は速さが求められる、そう、実践には速さが求められる。

だから、ライナは瞳を隠し。複写眼を発動させ。スバルの放つ拳の魔法の構成を全て読み取る。

そして、ライナはスバルの拳の魔法をコピーしてその上でその拳の威力を圧倒的に下げる、いや、スバルから吸い出される魔力を外気にもらす術式をその場で編み出し、その指でスバルの魔法構成を書き換えた。

今、見たばかりの魔法だというのにだ。

そして、それにスバルは障壁を抜くのに夢中でいたのか、違和感に今気づいた。

「な、なんで抜けないんだよ!? この障壁!」

そう、もう一つの違和感に。

ライナの障壁が、中々に抜けないのだ。

もはや10秒はたっている。

急遽出した障壁だ。

持って3秒だと、スバルは思っていた。

この最後の切り札を切るために、スバルは自分のブーツのデバイスを壊す勢いで無理やり今まで以上の速度を出した。

だから、不意を撃てて、油断させた。

だから簡単に抜ける。

そうスバルは思っていた。

だけど、目の前の男は、そうはさせてくれなかった。

同じ条件なら、なのはさんの障壁でも、抜ける。

そう思ったほどの、でき。

なのに、目の前の障壁は。

「くっくっくっくっくっくっくっくっくっく障壁が……伸びる……」

風に吹かれるクモの巢のように柔らかく押し込まれる障壁。普通の障壁なら、ひびが入って割れるだろう。

だけど、目の前の障壁は、割れない。

むしろこれは、おそらく切り裂く（・・・・・・）障壁。いや、破る障壁か。

糸のように粘着質な。

そんな、破るのに困難な、力を柔軟に受け流す障壁。

厄介な障壁を相手したスバルは無理に抜こうと奮闘する。

そのかいあってか、徐々にその障壁は押せている。

だから、いつか抜ける。そう思って更に障壁を押し込む。

だが、スバルに不調が来た。

それは、先ほどのライナ構成変化。

「な、なんで!?! 魔力が急に抜けて……力が入らない……」

構成を書き換えられた魔法は、威力をどんどん下げていつていた。

それは、そんなことが可能とは知らないスバルには思いも付かない、まさに未知の魔法。

スバルは焦りと、緊張で、パニックを起こす。

「なんで！？　こんな時に、あと少しで届くの！！　早く、とどけええええええええ」

スバルは、悔しそうな声で、更に力をこめて拳を前に押し込む。
だが、力はいらない。

ディバインバスターはどんどん力を失い。魔力はどんどん枯渇す

る。

その上で最悪なことに

「く……押し返される……」

障壁が、スバルの魔法に力が無くなつきて魔力をうまく循環させ始めたのか、どんどん押し返し始めた。
その上で最悪なことに。

「あ……」

ライナが、桃色の集束砲を放とうとしていた。
その名は、スバルが今放っている魔法と同じ名前。
その名は――

「お前はちゃんと頑張ったよ。結構やつほうだと思っぜ？　まあ、次は俺はやんねーけど次は頑張れよんじゃ」

――ディバインバスター。

ライナはそう言葉を残し、怪我をしない程度に弱めたディバインバスターを放った。

そうしてスバルは敗北した。

sideなのは

最後の攻撃は攻撃すると見せかけて大技をフェイントにあのティアナってのを助けて逃げればよかったんだよ。

この試験。

ゴールまで逃げれば勝ちなんだから。

本気で攻撃に行く必要はなかったんだよ。

撤退戦だもんね。

でも、

「凄く二人とも才能はあるね。ティアナってこの状況判断。スバ
ルの突破力と格闘術^{ストライクアーツ}。うん。将来有望」

『嬉しそうですねマスター』

「うん。もちろんだよ。教えがいがあるね！」

『ライナさんにしたような砲撃を放つような特訓はしないであげてくださいね』

「あれはライナがサボるから悪いんだよ？ 何回バスター当てても言うこと聞いてくれないし。教えることがなくなってきた最近では、アクセルシューターつきでも避けるし」

『……別に良い気がしてきましたマスター』

「でしょ？ でも、新人達はそんなことしないだろうからそんな

ことはしないよお」

『そうですね。ライナさんがかしいんです』

と、そんな世間話をデバイスとしながらなのはは勧誘をの準備を進める。

新機動六課への、新人勧誘を。

もちろん相手はスバルとティアナだ。

こうして、今回の試験は終了した。

ちなみに

「うわぁ〜最後に大技ぶち込むとかライナえげつな〜」

はやては若干引いていた。
しかしフェイトは

（なのはから聞いたことあったけど。あの子かぁ……。ふふ、ライナ、最後にディバインバスターで決めてあげたんだね）

と、若干感じ方は違ったようだ。

Bランク試験 後編（後書き）

答え それなり

ライナさんの立ち居地は普通の職員の立場です。

ライナの能力も、力も、そして異色さも誰にもばれていない状態だから。

ただ、モテル腹立つ人間。という立場ですね。

まあ人脈に関しては一目置かれているようですが。

あとがき

今回はそれなりに長かった。

そして更新が遅い。

なんてこった。

ごめん。全裸で土下座しているから勘弁して。

PCに向かってただけ。

次

最近三国志にはまった。

面白い。

恋姫じゃないほうね

次

最近戦国関係にはまった。

戦極姫じゃないよ？

次

戦国と三国が合体した小説を考えた。

でも、どう考えても難しすぎた。
保留。

次
おわわ

番外編 ライナの仕事 (フェイトルート) (前書き)

さてさて、蒼天航路が面白いよ！

皆も読もうぜ！

あと、Bランク試験後編。

中編だった後半部分にぶち込んでしまったのでややこしいけど見てない肩はそちらでご覧ください

あと、このSTS正直どでかいものを持つてくる気満々なので…。

STSの原作と乖離するんだろうな。

それでもいいなら見続けてね

問い 恋姫の曹操って霸道じゃなくて王道じゃね？

番外編 ライナの仕事（フェイトルート）

——時系列。ライナ、仕事一ヶ月目

ライナは、仕事で適当にPCを打ち込んで立ち上がった。
目はうつろで、まるで幽鬼のような顔。

何故そのような顔になったか、それはただ仕事が嫌だから。

……あまりに突っ込みどころは多いが、そんな顔で、すぐ隣のデスクにいるフェイトに、言う。

「……俺ってばちよつと飲みもんでも」

「だめ、そのまま逃げるでしょライナは」

ピシャッとフェイトは言う。

今までその言葉でなんどもライナは逃げてきたのだ。

もはや言い訳は通用しない。

フェイトは心を鬼にして、ライナに仕事するように命令する。
だが、

「うう……眠いだるいしんどい俺ってば一日50時間寝なきゃいけないんだから家にかえりたい」

ライナはそんな様子でデスクに突っ伏す。

本気でやる気がないようだ。

なんというか、本当にやる気が無い。

フェイト以外の職員が、そんなライナを見て苦笑いして「またか」

と笑うが。

フェイトはそんな周りを置いておいて。

「だめ、この後無限書庫に行つて調べ物するんだから、ライナにもちやんと付いてきてもらわないと」

「うう……」

そんな、幽鬼のような顔で突つ伏したライナに言う。
まるで気にしない。

始めてあつた頃の……いや、初めて一緒に仕事をしたときならあわわとしてライナに「大丈夫？」などと心配しただろうが、もはやそんな心配をするようなフェイトではない。

なんだつてライナは寝たいだけなんだから。

どんだけ疲れた顔をしていても、それはただ寝たいだけという、
なんというか、仮病に近いことをフェイトはこの一ヶ月でいやでも分からされた。

だつて寝たいがために仕事を逃げ回るわ、自分の仕事をほっぽりだして寝たり、喫茶『メリーナイトメア』でご飯を食べながら寝ていて仕事に來ないなど、ライナ関係には『寝る』ということが嫌でも付きまわる。

だから、フェイトももはやライナノ扱いにはなれたようだ。

「もう、いい加減仕事しようよライナ。終わつたら一緒に帰る？」

車で送るという意味合いでフェイトは言つたわけだが、この台詞は他の職員の、主に『男子』職員の額に血管を浮き上がらせたが、その言葉が自分の勘違いだということをこの一ヶ月で分からされているので、すぐに落ち着く。

なんというか訓練されてきたのだ、男子職員どもは。

それに、ライナがなのはとフェイトに手を出すことが無いのを知っているのか——この一ヶ月全くの進展が見られることが無いので——安心して仕事に戻る始末だ。

どれだけ訓練されてんだよ、という思いである。

だがまあ、訓練されているのはこの課だけなので、他の課の職員だと勘違いして殺意を向けるのは換わらないようだ。

なんというかご愁傷様である。

ライナはフェイトの言葉を少し考えて、答える。

「……車かあ、まあ中で寝ていいんじゃないか」

ライナノ心情そのものであった。

その言葉にフェイトは

「だめ、後で夕飯買いに行くんだから、荷物持ちお願いするつもりなんだから」

「うえ、嫌だな……。てかまだ夫婦に勘違いされてんだから勘弁してくれよ……」

「あう、それは……。うう……。確かにあれは恥ずかしいんだけど……だ、大丈夫だよ！ 誤解だっすぐに解けるって！」

とかそんな会話がされた。

そのセリフに男性職員はビキッといろんな意味奇音を立てるが、落ち着く。

大丈夫だ。ただの勘違いだ。落ち着け。と、訓練された職員は浮きあげかけたケツをなんとか落とす。

女性職員はきゃーとなんだか声をあげて、ヒソヒソ話をしていたが、まあこの一ヶ月で定着したいいつもの光景だ。

なんせ、くつつく気配が無いのだ、だからなのか、何か裏があるのでは？ と、好きなだけ噂を立てるだけ立てているらしい。

「でもさあ、この前なのはと買い物行くと浮気？ なんと噂立てられたんだけど確実に捻じ曲がってきてんだけど」

「うわぁ……どうしよう……。な、なんとか誤解とかないと……」

バキビキと音がした。

内容的にはなんでこいつはこんなに美人と買い物行ったりしてんだようらやましいいいいい。

だそうだ。あと浮気？ とか噂立てられてえええええとか思う男性職員の思いも混じっていた。

だが、噂を立てられている本人達にとっては、ある意味世間的な問題というか。

「おまえら有名なんだから雑誌記者とかにあることないこと書かれるかもなあ。まあ俺ってば本当はどうでもよかったんだけど、なんか最近その手の視線の意味に気づいてきたから、嫌って言うか、しんどいんだよねえ……」

「その手の視線？」

「……勘違いだったら恥ずかしいからいいや」

「？」

ライナは頭をかきつつ、

「んじゃ、まあ仕事一段楽したし、無限書庫にいこうぜ？」

そんなことをいった。

それにフェイトは「え？」となる。

「え？ え？ どういう意味？」

と驚いた表情でライナノディスプレイを見る。

すると、PCの画面には確かに終わった仕事があった。

さっきまで話していたのにどういうこと？ とフェイトは思うが、ライナは言う。

「話しながらやったからじゃん」

どうやらブラインドタッチアンドマウスで画面も見ずにやったらしい。

……どうやってだよ！？ という突っ込みはどうやら置き去りのようだ。

だがまあ仕事はとりあえずは終わっているらしいので、フェイトは。

「えっと、うん。一応私も終わってるし一緒にいこっか」

と、ライナの手をとり書庫に行った。

そのあまりの自然さに、女性職員は言わずもがな、男性職員は「ちくしょおお（ry」

うん。この癖はただ単に中々朝起きないライナの手をひっぱることで付いた癖なのであまり気にする必要は無いのであった。いや、ある意味では外堀より内から築かれつつあるので危険かもしれないが……。

「んで？ なんの本がいんの？」

「うん。教導の本かな？ なのは本職だし聞けばいいんだろうけど……あまり頼りすぎるのもだめだし」

「ふーん。それってあれ、機動六課の？」

「うん。そういうこと。私も小隊持つことになったから」

それにライナはふーんと納得して。
そして気づく。

「……………それって俺がついてくる必要あんの？」

その言葉にフェイトはうーんと考え。

「あれ？ ない……かな」

「ないんかい！？」

「あはは、ごめん。ついライナ付いてこさせるの癖になっちゃって」

「どことなくせだよ！？」

「……………ライナが中々言うこと聞いてくれないせいかな……………」

「あう、謝るからその殺意のこもった視線をやめてください」

「うん。分かれば良いよ」

「……………今回俺ってばなんにも悪くないよな？」

そんなことをライナは呟いて無限書庫に向かった。
そして、お目当ての本を数冊もち、

「以外に分厚いね」

「てか、ネットで調べたほうがいいんじゃないの？」

「うん。本で読んだほうが覚えやすいというのかな？　なんだ
か、ちゃんと読ンでる気がするんだ」

「ふん」

そんな他愛も無い会話をし、そのまま無限書庫を出た。
しかし、一つ、ライナノ背中を怨念めいた視線でみていた存在が
居た。

「あれが…………ライナ・リユート…………」

その存在が表に出てくるのは、まだまだ後だ。

というか影は薄いので答えてあげるとするとユーノだったりする。
…………さて、本編に出てくるかどうか…………。

さて、買い物。

ここはアストラル。

本局の職員もよく利用するデパートだ。

「うん。今日はオムレツにしようかな？」

「別にいいんじゃないの？」

「うんじゃあそれにしようか」

と、フェイトはライナに笑顔で言う。

それにライナは一瞬——寒気がした。

なんというか、噂話の気配。

「あれよ、あれ、あんなに優しそうで綺麗な彼女さんをお持ちなのに、他の女と浮気してる男」

「まあ、なんて不真面目そうな男。奥さんがかわいそうだわ」

「本当よね、髪の毛なんかぼさぼさだし。目元なんか死んだ魚のよう」

なんて、噂がひどいことになっている。

なんというか、

「きつとあのこの優しさにつけこんだのよ」

「でも、あれでしょ？ 浮気相手ってテレビで見るのはって人
なんでしょ？」

「確かそうだったわ」

「あのこもテレビで偶に見るフェイトッてこでしょ？」

「ええ」

「なら、どうやってのかしら？」

「なにがよ」

「だから、浮気とか付き合つとかよ」

「うーんそこらへんはわかんないわね」

まあ色々と不安定で酷い噂であつた。
その噂話に気づいたらライナは

「はあ、俺ってば主婦とか嫌い」

なんだかしんどそうにため息をした。
フェイトは気づかず。

「どうしたのため息なんかついて。大丈夫？」

噂話の格好の的の優しい笑顔をライナに向けるのであった。
まあ、笑顔に関しては、ライナはそこまで悪い気はしなのだが、
周りがしんどいのであった。

そんな普通じゃない普通の日常。

番外編 ライナの仕事（フェイトルート）（後書き）

答え いいえ、時代開拓者です。

部下に時代先取りの発明品つくる奴が居たり。

本物の曹操を持つてくると音楽とか文学の開拓したりと色々して
るね。

まあ霸王というよりはそっちのほうがあうね。

本物のように民を虐殺してないしね。

んじゃあとがき

最近マジコイの発売日が楽しみ！

次戦国恋姫（正式名所忘れた）

が12月に発売だね。

買おうか悩み中。

次

光宙

次

ライナ「んあ？ ここつてどこよ？」

トーリ「ねーちゃん！ なんか俺に似てる声の奴がいるー！」

ホライゾン×伝勇伝

以外にいけるかもね。

次

ライナ「めんどくせえってかここどこよ」

銀さん「だりーチョコパヘエ食いたい」

なんか性格にてる。

次

銀さん「あいたた、ここどこだ？」

トーリ「ねーちゃんこんどはテンパがでてきた！」

銀さん単体でも武神倒せるんじゃない？

以上

おわえ

過去：シグナムとの戦い（前書き）

今回はあれですね。

回想で語っていたシグナムとの戦いですね。

問 俺ってばもう

過去：シグナムとの戦い

宴会である。

そう、宴会。

それは試験終了祝い。

主にライナがBランクへの昇進祝いだ。

「やっと昇進しおったな」

はやては「はあ」と酒臭い息をライナに吹きかける。
すさまじく喜んでいた。

なんて言っただけでライナはめんどくさがって試験に出てくれないんだ。

ほんと、やっと昇進した！ と、はやては少しだけため息とみだ目だ。

ライナは、はやての息に「うっ」となりながらも

「俺はちょっと疲れたよ。なんせ意外にうごくんだよねえあの青髪はやっ」

と、ライナはスバルを思い浮かべる。

格闘術は一級品で、コンビネーションも良かった。

ただ、スピードがもう少しあればよかったとライナは思う。

だがまあ、あれは中々に才能のある少女である。

そして金髪の少女。

あの子も、相当に精密な射撃に、指揮能力であつた。

おそらくだが、狙ったところにはほぼ確実に当てるだろう射撃能力は有していると思う。

それに最初るとき耳打ちをしていたが、あれには相当な情報量が

あつたのだらうことは想像に難くない。恐らくあの耳打ちは、拳から銃撃へのコンビネーションに関しての作戦だったのであろう。
ライナはそれを考え、

「ねむ」

どうでも良くなった。

正直疲れたのである。動きすぎて。
とりあえずは居酒屋の焼き鳥とか色々食べて、酒飲んで寝たいのが本音である。

しかし、ライナは、酒を少しだけちびり、思う。

（ここの酒はうまいよな。向こうとは大違いだな）

そうローランドで作られる酒とは大違いなのだ。
なんというか、口当たりは良いし。なによりうまい。
そう普通にうまいのであった。
それにライナは気を良くし、焼き鳥を食おうとしたら

「ライナか、試験はどうだった？」

隣にシグナムが来た。

少し顔が赤い。

どうやら酒を少しだけ飲んでいるらしい。

「んあ？ まあ楽勝だったよ。んで？ シグナムはどうなのよ？」

と、ライナはシグナムに言う。

昔とは違って今では普通に仲が良い。

どうも、過去のシグナムとの模擬戦でそれなりに仲直りしたらし

い。

シグナムは言う。

「ああ。こちらはいつも通りだ。なにも問題はない」

「そう?」

「ああ」

「……」

「……」

「……」

なにも語ることが無くなった。

シグナムはそんなに喋るたちでもないし、ライナは暇さえあれば寝る人間だ。

両方とも、自分から喋るつもりはないらしい。

てか今はライナは食うのに忙しいらしく焼き鳥をほおばっている、そりゃ喋らない。

そんなライナを見、シグナムは一つ笑う。

「くく」

「んあ? どうしたんだよ? いきなり笑って」

「いや、な。私達がこつも肩をそろえて食事する。というのは、最初の頃を考えると笑えてきてな」

「ん?」
「そっぴゃお前と仲良くなったのってあの模擬戦だっけ」

か？」

「とライナは焼き鳥を頬張りながら言う。
それにシグナムは「ああ」と頷き。」

「確かにあの模擬戦からだ。そうだな。あれはしていて良かった
と私は思う。そうでなければ、私はまだ貴様を嫌っていただろう」

とシグナムは言う。
それにライナは

（ん〜？ でもあれってどうやって仲直りしたんだっけ？）

と、思う。

戦って、そこで、なにしたっけ？
ライナはそう思うも、とりあえず頷く。

「まあ仲直りできたのは良かったよ。嫌われたまんまじゃ色々
面倒くさいしな」

「ああ、その通りだな。ふふ」

とシグナムは笑い。
少し、目を細め、思い出す。

「あの時は、なんと浅はかであったか」

と、シグナムは思い出すように無理やり回想を入れた。

——ガイン！

そんな、刃を地面に叩き落す音が聞こえた。
場所は闘技場。

内装は天井まで50メートル。そして縦に200メートル。横に200メートルといった。

少し、魔道師としては手狭だが、戦士としては十分に広いフィールドだ。

そして離れたところに、強化ガラスの観客室。

なのは、フェイト、はやて、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ。そうそうたる面子だが、それ以外には居ない。

どうやらここは貸しきり状態らしい。

だからか、シグナムは他の局員には決して見せないような不適な笑みを浮かべ、

「どうした！ 避けているばかりでは攻勢には転じれんぞー！」

シグナムは吼える。

心から歓喜しながら、恋焦がれながらやっと、やっと叩き伏せれると。

目の前の男に――吼える。

「ライナ・リユート!!」

そのいつもやる気もへつたくれも無い眼をした男、ライナを叩きのめせることを喜びながら。

シグナムは笑顔だった。

反してライナはいやそうな顔でぶつぶつと呟きながらシグナムの頭上を横薙ぎする音速に迫る剣を避ける。

「はあ俺ってばこういう戦い嫌いなんだぜ？ だから王様の軍にも簡単に捕まっただし。ああ王様って言えばシオンのやつ大丈夫かな？」

なんて、昔の思い出に耽りながら現実逃避していた。

シグナムはライナにお前は攻勢には転じれない、と言うが、いや違う。

ただ単に攻勢に転じるきなど最初から無いのだ。

理由は

「めんどくせえ……」

その一言に凝縮されている。

今の戦いはそう、シグナムからのしつこい挑戦の申し込みを仕方なく受けてしまったから、仕方なくいるだけなのだ。

負ければシグナムは満足するだろうし勝てば勝負をしないよう言うことを聞かせるだろう。

そう思っ受けたがまあ本番になれば面倒くささのほうに勝った。

「はあ……なんでこんなことしてんだろ？ 俺ってば……よつと

……仕事もしたくないのにさせられて……おおっと……こんな面倒くさいことさせられてんだろ？」

そういいながら、シグナムの剣をよけていく。
すさまじく余裕で、だるそうだ。

本当に戦闘にまで怠情を持つてくる男である。

七大罪で言えば間違いなく『怠情』代表であろう。

それを見て、シグナムは怒る。

「貴様！ もつと真面目にやれ！！」

「うえー……めんどくせえって」

「くっ、ならやる気を出させてやる——ハアツツツ！！！」

やる気の無いライナを見て、シグナムは憤る。

が、ライナは頭上、唐割りのごとく縦に振り下ろされる剣を横にひよいと動くだけで避けた。

それによつて、標的を失った剣が地面に甲高い音を震わしつき立つ。

シグナムは、いまや無防備だった。

ライナが攻撃すれば必ず当たる位置と、隙。

シグナムは、「くっ」と悔しそくに息を吐きながら、攻撃が来るのを覚悟した。

が、

「……………」

攻撃が来ない。

目を開ければ、ライナは遠くにいる。

それに、シグナムは怒った。

「何故攻撃しない！！ 騎士の戦いを愚弄するか！！」

烈火のごとく怒るシグナム。

が、怒られている張本人のライナはどこ吹く風で。

「えゝだつて殴ると痛いぜえ？ 俺の拳も———そんでシグナムさあ、凄い太刀筋だけどさあなんか高揚してんのか知らないけど大振りすぎねえ？ まあ俺ってばそっちのがいいんだけどさ」

そう、ライナは、シグナムに適当に助言する。
それを見て、観客は言う。

「ライナ余裕そうやねえ……シグナムがあんなに押されてるとか………凄いわあ」

「うん。でもやる気なさそう」

「まあちよつと無理やりすぎたからね………にやはは」

と、はやてとフェイトとなのはは言う。

ライナが相当凄いことは分かる。

シグナムを圧倒しているのだ。

しかしライナはやる気を出さない。

まあそれも分かる。少し強引過ぎたのだから。

と、それぞれライナに驚きつつも、戦闘からは目を離さない。

正直、やはりライナがここまでやるとは思っていなかったのだ。
それに対し、騎士達は。

「すげえなあいつ。シグナムの太刀筋を見切ってやがる……」

「うむ。確かに多少は高揚しているのだろうが、それでもシグナムは歴戦の武人だ。太刀筋にそのような些事は乗らないだろうが……」

「でも、あいつにはそれが乗っているかのように見えるほど簡単に避けれるってわけか……」

「アイツの過去を聞いた限りでは、術師としても軍格闘としても破格の存在だったな」

「ああ」

と、ヴィータとザフィーラは何かとライナの体術に驚愕していた。だが、ライナが何故こんなにも剣を避けれるか、には理由がある。地獄の訓練場に、幼き頃から雷、稲光という音速に迫る魔術を避け。

炎の壁を避け。水の洪水を避け。

ナイフ、格闘、剣、鞭、弓、乱戦というあらゆる攻撃を避け、感知する訓練をしてきたのだ。

ライナは、点と面の攻撃を、幾度も、何年もをほぼ毎日避けてきたのだ。

そして一人、フェリスという女がいる。

彼女は『腕』を手元から地面に落とす一瞬に、細切れにしてしまうという音速の剣技を持つ。

それを、本来なら進む未来にあるその女との出会いで、その剣を幾度も避けるライナだ。

音速に近い程度の剣は、恐れるには足りない。

むしろ、魔法を出して音速に到達してくれなければ、戦うにして

も物足りない。

まだ出力任せの力技剣技のほうがマシだ。
シグナムも、それにすぐさま気づいた。

「ほう……ただの怠け者とも思ったが……やるな」

「ん……俺ってばもつと寝てたかったんだけどね。まあそうはさせてくれない世の中だったんだよ」

「……ふむ」

シグナムは考える。

ライナが従軍していたのは知っている。そのような過去を主はやてから聞いていたから。

だが、いつものライナを見て、怠惰なライナを見て、実力はいしたことはないと勝手に決めつけ、甘く見そして指摘される、私人性根が曲がっているからと無理やり叩きなおそうとした。

……これでは。

「いやな上司ではないか!？」

考えてみるとそうだ。

仕事は……なんと怒られながらもきつちりと済ませている。
それに、怠惰でやる気のない姿は、反面教師になっていて、それでいてなんと課内のマスコットキャラ的な立ち居地を獲得しつつある。

……これでは

「狭量な上司……」

そして実力を甘く見る騎士としてあるまじき行動。

シグナムは、少しの間自分に絶望した。

あまりの自分のふがいなさに。

そして

「……すまなかった。ライナ・リユート」

「んえ？ なにが？」

「いや、不躰にも実力を甘く見、そして無理やりの挑戦に応えてくれたその尊大な心に、謝罪する」

「へ？」

何かを勘違いしている。

ライナはそう思った。

（尊大な心って何よ？ 俺ってばなんか謝られることしたっけ？）

実力を甘く見る、その程度で謝るのなら、それはシグナムが寛大だと思う。

が、尊大な心？ なにが？

え、俺？

ライナは不思議な謝罪にMPを持ってかれた。

なんて冗談は置いておいてライナは本気で頭に？ を浮かべる。

それを置いてシグナムは言う。

「私は自分が恥ずかしい。人の真意を見ず、頭ごなしに否定する。こんなもの、騎士失格だ！！」

「ええ〜……」

なんだか騎士失格とか自己否定をし始めたシグナム。
なんだか

（余計面倒くせえことになったような気がする……）

ライナはそう思った。

そんなライナと同じように、

「なんか、シグナム変に考えすぎてるような気がするんやけど…

…」

「……考えすぎじゃないかな」

「私も頭ごなしにライナのこと否定してたよ！ 私も、ライナの
保護者として失格だよ……」

『え？』

なのはの言葉にはやてとフェイトは振り向かざる得なかった。
そして騎士たちは。

「すげえ。ライナの奴、精神攻撃もすんのか」

「うむ、きっと幾度も戦ってきた悲しき過去を持つのだろうな」

なんか勘違いしていた。

ザフィーラの言葉は以外にも当たっていたが……。
そして先ほどセリフの無かったシャルは

「普通にライナさんが訂正しただけにしか見なかったんですけど……」

普通だった。

「普通って……」

なら老けていた。

「……」

あつ、やめて、ごめん、痛い。

そして、シグナムは落ち込んだ。

……落ち込んだ。

それにライナはなんか面倒そうな顔で

「ええと、そんなに気にしないでいいんじゃないの？ ほら、人間間違える時だってあるしさあ」

とりあえずそれっぽいことを言って慰める。

もうなんだろう、騎士様って面倒くさい種族なの？ とライナはしんどそうな顔で思いつつも慰める。

それにシグナムはライナに、しかも攻めていた本人から慰めの言葉が来たのにより落ち込んだのか。

「慰めの言葉などいらん。私は狭量な上司で騎士だ……。私など蚊にも劣る」

凄くへこんでいた。

キアラが崩れるほど、体育座りで顔をひざに埋めてへこんでいた。これが外ならきつとそれ＋草をむしっているだろう。

ライナは、これは相当人格が壊れてきてんなあ……。とちよつと危機感。

なんか知らんうちに人格を壊してました。

など後味が悪いにもほどがある。

なのでライナは更に慰める。

ライナは近づき肩をぽんとたたき。

「ええと……。ほら、お前は真面目な分。周りが見えてないだけだよ、だから、ほら、今から直していけばいいんだよ——お前はちゃんと前を見て歩いてきたんだろ？ なら、他のものだって見れるよ」

とりあえず慰めれるだろうという言葉を羅列する。

いつものライナなら、こんな言葉、恥ずかしくて言えたもんじゃないが。

ライナがかつこいい言葉を吐くのは、シリアスモード限定なのである。

それ以外は弄られるだけだ。

主にシオンとか未来ならフェリスとか。
今ならはやてか……。

だがまあ今は急務なのできにしない。
人格崩壊の危機なのだ。

すると、シグナムはライナの言葉を聴き

「貴様は、こんな私を、こんな器量の狭い私を慰めるのか？」

涙目で上目遣いでライナを見る。

ダメだ。壊れている。

どこにもあの厳格なシグナムさんが存在しない。
なんてこった。

だが、ライナは諦めず言う。

「あ、ああ……えっと、まあそう……よ？」

ダメだ。うまく言葉にならなかった。

だが、シグナムはライナの言葉に、一つ涙をぬぐい。

「ありがとう。貴様の慰めを一度は否定しておいて、それでも慰めてくれる貴様に騎士を見た」

「へ？」

ライナは不思議な言葉に混乱した。

何故いきなり騎士？

どういう意味？

俺ってば言葉の意味がわかんない。

と、真面目に混乱し、そしてまだ壊れているんじゃないのかと、
疑う。

だが、

「すまなかった。そして、すまないが、もう一度、私と試合をしてくれないか？」

「ん？」

「いや、私は私の騎士道を見つめなおしたい。それは、貴様と戦って見つめなおせると思うんだ。だから、頼む」

と、シグナムは頭を下げる。
それに、

「よくいったぜシグナム！！」

「うむ、プライドが高い身でありながら、よくそのプライドを捨てた」

と、ヴィータとザフィーラはもう腹立つほどシグナムと同じように勘違いし。

「なんか知らんけど盛り上がったけ！ あははは、異空間や！
もう話の流れが見えへん」

「ああはやてが壊れちゃった……」

「うう……よく言ったねシグナム」

「こっちはもうだめだよ……」

一番の苦労人はフェイトであつた。
そして一般人代表シャルさんは。

「代表つて……うおほん。えっと、盛大な勘違いですね」

普通意見ありがとうございました。

「ええ！？ 酷い！！」

では老けた——ぎゃ！

そして、シャルは頭を下げたまま、だ。

どうやら、ライナが何か言うまで頭を上げないつもりだろう。
だからライナは——諦めた。

もう、これは戦うしかない。

ライナはため息一つ。

そして

「もう頭上げろよ。分かったよ戦うよ。はあめんどくさい」

そういった。

もう、状況のほうが面倒くさくなったのであつた。
すると、ライナの言葉を受けたシグナムは

「本当か！？　ありがとう、ライナ！」

と、笑顔でライナの手を取り握手する。
どうやら相当に嬉しいらしい。
それにライナはため息をつき。

「んじゃ、やるか」

「ああ。行かせてもらおう」

二人は距離をとり。

ライナは相変わらずだが、シグナムは真剣な顔で剣を構えた。
こうして、戦いの火蓋がやっと切られる。

……長い前座であった。

そして、戦いは、シグナムが先に動いた。
先手を取るためだ。

そして彼女は烈火の将。
それは彼女の二つ名だ。

それは、烈火のごとく攻める剣戟から生まれた異名。
彼女の剣は、まさに激しい炎であった。

「——ハッ！　ハッ！　ハアアアッ！……」

縦、横、斜め、様々な角度からの攻撃。

手は緩めない。攻撃の隙を与えようとは思わない。

敵は、ライナ・リユートは軽々と避けるのだ。

体力はこちらのほうが上。

避けるのと攻撃に移るのでは、大きなラグを生む。

避けるからの攻撃では、攻撃への体の移行に時間がかかり、剣の餌食になる。

それほど回避と攻撃は違うのだ。

先手を取るというのは、それだけで有利だ。

だから、体力で優れる自分は、ライナが避け疲れるまで攻撃を続けるのみ。

そう思っ、ライナに攻撃を続ける。

魔法はあるが、下手に使えば隙を生むだけであろう。

魔力の溜めから構え、そして攻撃では隙が大きすぎる。

（あれは、空戦でこそ使える間合いの大きい場合の技であろう。
そしてシュランゲフォルム。あれもダメだ。あれは、恐らく奥の手になる。ライナは私の魔法を、デバイスを知らないだろう。なら、意外な一手として置いて置きたい）

シグナムは、シュランゲフォルムの間合いを奪う特性を奥の手として考えた。

この狭い闘技場だ。

シュランゲフォルムは十分に使える。

だが、最初から出して慣れられても困る。

だから、ここぞというときに出したい。

そうシグナムは考え、目の前の敵に攻撃を繰り返す。

それにライナは

（うええちよつとしんどいなあ。すんげえ猛攻。攻撃する暇がないって。はあもう嫌だ　こんなワイルドな生活……）

なのはと付き合う（無理やり）飛行訓練ではバスターぶっ放され。仕事サバると飛行訓練のときバスターとアクセルシューターをブラスでぶっ放され。

朝寝坊するとぶっ放され。

ワイルド、というか惨めな生活を送るライナだ。

そしてその上でこの戦い。

やってられんが、まあ今回はシグナムのためと割り切る。

本当は超嫌だが割り切る。

だからライナは剣の機動を見る。

その太刀筋に迷いは無い。

が、迷いが無さ過ぎる。

まるで、奥の手を秘めているような、あせりの無い太刀筋と体力の消費の仕方。

ライナは、斜めに切り落とされる剣筋を頭と腰を下げ避ける。

紙一重、とは言わないが、それでも完全に見切った避け方だ。

だが、攻勢には移れない。

二年の牢獄で衰えた体だ。

筋肉が衰え過ぎないよう少しは鍛えていたが、それでも衰えは隠せない。

隙は見えてもそれを付けるような加速を出せない。

それに、本局の書類やPCでの仕事も山ほどあった。

もう全然体とか動かしてない。

ああ空戦の訓練は会ったけどあれは筋肉を動かすようなものじゃなかったからパス。

と、ライナは思いつつも、現状の打破ができない。

だが、と思う。

エスタブルの魔法が使えれば、と思う。

それにはシグナムの隙を突く必要があり、その隙は存在しない。存在する隙は全盛期の力があればつける隙のみだ。

距離をとろうとすれば肉薄され、責めようと思えば剣が来る。

ライナは、面倒くさそうに顔をゆがめる。

「ちょっとしんどいなこりゃ……」

せめて、シグナムが大きな隙を作れば、そうライナは思いつつ避ける。

互いに切り札を隠し持ち、互いに切り札を出せずにいる。

これは真面目に接戦であった。

それを、観客は、先ほどまでのふざけた前座との差に

「……ライナほんまにすごいな……。ばんばん避けとるやん」

「うんそうだね。シグナムも、魔法を出し惜しみしてるんじゃないかって出せないでいる。多分空戦でなら出せてるんだろうけど。ライナが空戦が不得手つてのもあって、空からは使ってないんだね」

「うん。それに、なんだか互いに切り札を持ってるように見えるね。ううんライナに関しては持つてるんだと思う。この貸しきり状態の訓練場で何でもありの戦いだもん。多分、前の世界の魔法を、使ってくるんじゃないかな？」

と、はやたとフェイト、なのはがそれぞれに意見を交わす。

手に汗握る戦い。

目の離せない戦い。

これは、魔道師の戦いではなく。

原始的な。戦士の。騎士の戦い。

そして決めては魔道師としての決着。

そうとうに面白い戦いであつた。
そしてヴォルケンどもは

「……すげえ。シグナムの攻撃をあんなに避けるライナもすげえけど、シグナムも、全く手を休める気が無え」

「うむ。おそらく、ライナの体力が切れるまで粘るつもりであろう。……しかし」

そう一つ問題がある。

「ああ、ライナの体力を読み違えたら、シグナムの自滅だぜ？」

ヴィータがそういった。

例えばライナが疲れて避ける体力がなくなっても、シグナム自身の体力まで切れたら、本末転倒であることを。

攻勢に転じる弱点とは、体力の消耗が早いということ。

守勢の利点は、体力が長いということだ。

だが、攻勢のほうが有利なのだ。

それはやはり、主導権が握れるからだろう。

ザフィーラは言う。

「このままシグナムの思うとおり順調にいけばいいが」

そう言つて、戦いを見た。

普通さん世界代表シャマルさんは

「ついに世界代表まで……ええと、上記の通りで……」

……ありがとうございます。

「うう。喋りたいことを全部言われました……」

老兵は黙ってさるも……………

ヴィータ達の懸念は、しかし、的中はしなかった。

シグナムの攻撃はうまくいっていたのだ。

「ハアッ！！ ハッ！ ハアアアア！！」

ライナは剣をよける、が、シグナムは追い詰めながら剣を振る。
ライナが攻撃をよけ、シグナムはそれを追いかける図は、まるで闘牛士だ。

だが、しかし、避けるのにも体力が要り、そして、体力のなくなった闘牛士は刺されるだけだ。

ライナは、少し体力がなくなってきた。

「ああもう俺ってば疲れてきた」

そう、愚痴る。

シグナムの猛攻は攻撃に転じる暇を与えさせてくれず、避けるのに専念しなければいけなかった。

こんな攻撃のしかた、シグナムじゃないとできないだろう……と、ライナは呆れつつも策を練る。

本当に、体力がまずくなってきたのだ。

「……んじゃちよつとしんどいけど」

と、ライナは、奥の手とは違う奇策一つを使うことにした。

そしてライナは、今にも切りかかってくるシグナムを見る、タイミングを合わせる。

シグナムが袈裟懸けに攻撃する。

それにあわせてライナは

「よっ、ほっ、はっ、と」

と、バク転からのバックステップ。

もちろんそれにあわせてシグナムが迫るがそうはさせないと、ライナが宙に魔法陣を半瞬で書き上げる。

それは、ライナが一番速く書ける魔法。

そして一番愛用している魔法。

その名も稲光。

だが

「させるかああああああ」

シグナムがその魔法陣を叩き斬った。

「ウソオオちよつ、ま。マジでえ！？俺ってばもうちょい警戒するとか思ってたんだけど……」

「お前の技は聞いている。警戒するよりかはたたき切ったほうが

安全だ」

「うえ。そんなんありかよ」

ライナは、面倒そうにため息をつく。

そして、少し息切れをしてきた。

体力がピンチなのだ。

先ほどの奇策は、体力がまずいと思い、放ったものだ。

だから、余計に体力を持っていかれるであろう奇策を破られると、本気でやばい。

後一つ策はあるが、さて、今どれだけ来ているのか……

（ちょっとマジしんどくなってきたな……。この体力馬鹿め……）

ライナは涙目になりつつそう思った。

シグナムは剣を振る。

ライナはシグナムの攻撃を避けるために更にバック。

もはやこの動作が当たり前になってきた時。

——どん。

「……お？」

背中に固い感触。

それは、壁であつた。

200メートルあつた室内は、しかし、すでにさがる距離は無く、目の前に剣鬼。後ろには壁という。少々まずい状況。

それにシグナムも、少し戸惑う。

（壁か……シユランゲフォームを使うのは、この状況だと最適と

はいえないな)

シュランゲフォーム。

連結刃れんけつじんと呼ばれる刃を備えた鞭だ。

そう、『刃』のついた『鞭』。

これが少々厄介だ。

ライナに避けられたときが前提だが、これが壁に突き刺さりでもすれば、大きな隙になる。

少し、まずいことになった。

そうシグナは思う。

体力は、まだあるが、このまま同じように攻撃を続ければ、おそらくこちらが先に根を上げるだろう。

ライナも相当に体力を消費しているようだが、まだ飄々と動くだけの体力はある。

これは――

(少し、いや、かなりまずいな)

地理の読み違い。

これは、戦士として初歩的なミスであった。

だが、ライナも、避けるための後ろへの回避ができなくなったのだ。

これは、同じくライナもピンチであることだろう。

そうシグナムは考え、ライナの顔を見る。

しかしライナは――

「よし」

「む」

——むしろこの期を待っていたとでも言わんばかりの、

「俺の勝ち」

笑顔。

シグナムはその笑顔に一つあっけに取られ、しかし冷静に

「なにを言っている！ お前が追い詰められているんだぞ！！」

「ん？ じゃあ攻撃してみる？」

と、ライナはシグナムを挑発する。
するとシグナムは

「ほう。ならお望みどおりやってやろう！！」

挑発にあえて乗った。

どう見てもライナに策は無く。

どう見てもライナはピンチだ。

おそらくライナはこちらを油断させるための言葉を吐いたのだろう
と、シグナムは判断した。

——しかしライナにとっては、攻撃しようとしまいと同じ
ことであつた。

それは、

「よつと」

ライナはシグナムの攻撃を避け、そして——

「――な」

――壁を蹴った。
ただの壁蹴り。

しかし、状況を打破する天井への『跳躍』の壁蹴り。
ライナは軽々と状況を打破し。
真下のシグナムに、

「『求めるは水雲>>>・崩雨』」

半瞬で完成させた魔法陣で、水の洪水を起こした。
そしてそれに――

「ぐああああああ」

――シグナムは飲み込まれた。

これにて、勝負終了。

シグナムは気絶し、ライナは地面に降り立った。
お互い切り札を隠したまま試合は終了したのであった。

ライナは、シグナムに声をかける。

「おい大丈夫か？ 骨は折らないように手加減したんだけどな

……」

と、シグナムのほほをツンツンと触る。
そして、後ろから声が来た。

「シグナム！！ 大丈夫！？」

はやてだ。

強化ガラスの向こうに居たはやては、しかし、波に飲み込まれたシグナムを見てすぐこちらに来たようだ。

そして、はやてはシグナムに触り、顔をのぞき見る。

「……はあ。大丈夫や。気絶しとるだけ見たいや……もう。あんま心配させんといてえな……」

と、はやてはほっと息を吐く。

それにライナは頭を少し気まずそうに？きながら。

「いや、俺ってばちゃんと手加減したぜ？」

「当たり前や！ ってか、まあシグナムのために付き合ってもらってごめんなライナ。なんかシグナムも満足そうな顔で気絶しとるし。怒るに怒れへんわ」

「んあ？ 満足そう？」

と、ライナはシグナムの顔を今度はちゃんと見る。
すると。

「なんか笑顔だな」

「そやね。ライナが真面目に勝負してくれたんが嬉しかったんぢやう?」

「いや、俺はもうああいうのは勘弁したい感じ?」

「あはは、まあそうやろうね。でもまあありがとうな。多分シグナムも言うやろうけどな」

と、はやてはシグナムを抱えて笑う。
それにライナは一つため息をついて。

「ま、いいか」

と、笑顔を甘受するのであった。

おまけ

その後のなのはの訓練は凄惨を極めた。

「ほらほら。ライナ凄いでしょ!! もっと訓練訓練!!」

「ぎゃああああああああお前絶対後でぶっ殺つてああごめんなさい。だからバスターああああああああああ」

「ちよっ、なのは!! やりすぎだよ!!」

フェイトが止めに入るほど凄惨だった。

「たたか」「おうぜ」

ヴィータと犬が挑戦状を叩き付けてきたのであった。

「犬!？」

ライナは

「もう勘弁してくれええええええええええ」

嘆いた。

で、一般人次元世界代表は

「次元世界代表って……もうなにも言うことがないですね……二つの意味で……」

痴呆か……ぐぶ。

こうして。ライナに深い爪あとを残し、自体は収束した。

「あの時貴様の本気を感じ、そして私は貴様に感謝したのだああああ！！！」

そんなことをシグナムは大声で言った。

……え？ 大声？

あの静かで真面目なシグナムが？

ライナは、ブリキのように首を動かしてシグナムを見た。
するとそこには

「酔ってない！ 酔ってないぞ！！！」

トナカイの鼻も真っ青な……言っててへんだが。

真っ赤な顔したシグナムがいた。

しかも相当に酒が回っている。

「うええええ！？ な、なんで？！ おい、はやて！？ お前酒
飲ましたろ！？」

「へ？ 飲ましとらんよ？ ってシグナムできあがっとなるやん！

？　なんで！？」

「しるかあああああああ」

「しねえええええええええ」

「ぎゃあああああああ」

何故かはやても巻き添えな感じでシグナムは酒乱した。

さてはて、シグナムは何故酔っ払ったのだろうか。

これはそんな命題を解くお話。

まあ正解は思い出して色々恥ずかしかったただけなのだが。

過去：シグナムとの戦い（後書き）

答え いや、なんでもない。

あとがき

さてさてやってきたねドウデモイコーナー
俺の日常。
んじゃ語るよ？

一つ

いや、別にそんな語ることとかないな。

二つ

だからそんなかたることとか……

三つ

な（ry

四つ

マジコイ欲しいなあ

発売まで後何日ボイスが意外に楽しみ。

語ることあったあああああああああ

おわり

悲しき終わり（前書き）

ライナの命的なものが

問 昨日何食べた？

悲しき終わり

——雨が降っていた。

雨が地面を叩き、少し、不安にさせるような、落ち着かせるような、矛盾を孕んだ音色。

人は雨音に癒しを求め、人は雨音に不安を募らせる不思議。きっとそれは、水というものが利にも害にもなるものだ、母親の胎内にいるころから本能で知っているからだろう。だからきつと、これも

「ぎゃああああああああああああああああああ」

……雨のせいなのだろう。

今、ライナは研究室にいた。

そこは雑多とした部屋で、まるで整理のされていない不正書類の山がある部屋。

研究員は風呂に入る暇もなく研究研究で偶に変なものを作るという不規則な生活習慣。

……人はそこを、「黒の狂団」と呼ぶ。
そんな所にライナは、拉致されていた。

——拉致されていた。

「な、なんだよお前ら！？ 俺になんのようだよ！？」

寝ているところを強襲、され、バインドの嵐を食らい、逃げられなくなった。

という悲しい展開で連れてこられたライナは叫んでいた。

それに仮面の男、「零」と呼ばれる男は少し不機嫌そうに息を吐き、肩を下げて、言う。

「一昨日いったらう。そろそろ開発の次回案を出すために何らかの面白い意見を出してもらうと。なのに貴様遅刻するところかおそく来る気などないだろ？ だから拉致した次第だ。ふはははははは」

平気なのはの家から誘拐をした「零」だが、別になのはに許可を取っていないのではなく、普通に取っている。

零はなのはから許可を取るために直談判しに行き、なのはは

『あはは、まあいかないでしょうから好きにしていいますよ？』

と、昨日書類仕事をしながら言っていた。

「わけだから私は朝駆けで捕えさせてもらった」

「捕えさせてもらったじゃ無えよ！！ 俺まだ、服も着替えてねえよ！」

そう言っただけに帰ろうとするライナだが零は

「それはなのは二等空尉から制服を預かっている、これで今日も

安心」

「帰らせろおおおおおお」

基本この研究所には知識をゲットするために出入りするだけなので開発とか原案とかにはかかわらない。

いや、むしろ面倒くさいので関わりたくないのだが、

「ふむ、折角面白いアイディアが出れば最高級ベットを贈呈しようとしたのだが……」

「あゝなんか俺ってばちょっとやる気が出てきちゃったな」

現金だった。

ライナは報酬のでかさに涎ものの笑みを出しながら、そこらの椅子に座る。

さつさと意見出して帰って寝たいのだ。

あつ、仕事があった。

少しやる気をなくしたライナだった、

「さて、今日の題は『破壊』だなんでも良いから意見を出せ」

と、零はどこから取り出したホワイトボードを叩き適当に言う。一応ここに努めている研究員は少し頭がアレなやつばかりだが天才ばかりである。

なのでそれなりに期待はしているのである。

適当に言っても大丈夫だという自負はあるのだ。

が、そこはあれ、頭が色々アレなので出てくる案は。

「大量破壊兵器とかがいいと思います！！ アルカンシエルより

強い次元破壊級の！！」

「あほか、私たちの課が吊るしあげ食らうわ。あれ以上はさすがにやばいって」

「じゃあ女の子の貧乳を破壊するものがいいと思います！！」

「誰が言葉遊びをしろといった！でも私の妹も貧乳を気にしていたな……よし、それは別プロジェクトとして並行ですすめるぞ！！」

「あつしはカップルを破壊する兵器を！」

「もてる男破壊兵器を！！」

もう色々カオスであった。

もはやみんな悪ノリで意見を出し、それに零が乗っかったり否定したりの大騒ぎ返し。

なんとアットホームな馬鹿の集まりなんだろう。

さて、そのなかでライナは

（最高級ベットののためになんかアイデア出して、確保しないと）

欲望全開に考えていた。

そして

（お！　なんかこれはいいんじゃない？）

思いついた。

ライナ考え込んでいて眉間によっていた眉を柔らかくし、なんか

ナナリーとか叫んでいる仮面の馬鹿に向かって言う。

まあ、馬鹿を見たライナは少しいやそうな顔だったが

「あれはどうよ？ 魔力を円滑に滑らす、節約型のデバイスプログラム

一応構想とかあるぜ？」

『破壊』はどこ行った。

と言いたいが、これは中々のアイディアだとライナは思う。

一般職員はまず、魔力が少なかったり、無駄な魔力を注ぎ込んで魔法を放ったりする。

そしてデバイス自体が、魔力の吸い上げを得意としすぎているのだ。

威力は高くなるがその分すぐに魔力が枯れる。

一般職員には力での攻撃より確実に連射性が高いほうが合うであろうことから、ライナは考えた。

本局の方ではカートリッジシステムというのがある。

それは魔力の補填として機能しており、無理矢理の魔力増強剤みたいなものだが、それは地上本部では本局との確執のせいか、技術公開されていない。

だから、これは、ある意味では地上本部のためのデバイスであり、本局にとっても魔力の少ないものにカートリッジシステムを組み合わせて使うものというものだ。

つまりはこのデバイス。

得意の魔力吸い上げに調整を加え、改造することである。

そうして、少しでも魔力運用の無駄を減らすプログラムを作ろうというのだ。

まあリンカーコアのレベルがA以上のものには必要のないものかもしれないが。

それに零は言う。

「ふむ、職員の魔力の無駄を破壊するプログラムか。面白い」

零はうんうんと頷き。

頭の中で計算する。

とりあえず開発費とか、人員とか、その他色々考えてから。
親指を立て。

「アリだ。その路線でいこう」

零は許可を出した。

それと同時にライナは立ち上がり。

「んじゃ俺帰るな」

「アホかお前は！！ 計画立案者が構想とか告げずに帰るな！！」

「えゝ俺ってばめんどいの嫌だしこれから仕事場で寝るって仕事
が」

「いいからこい！！」

と零に襟首つかまれライナは引きずられた。

地面をズルズル引つ張られるライナはほかの職員たちに白い目で
見られ、ケーキ食いながら苦笑いしているタップは。

「とりあえずベットののために頑張ってみれば？」

と、諭された。

「うゝめんどい」

ライナはそれでもダルそうに言い。
零にため息をつかれていた。

「で、ライナの構想を聞かせてもらおうか？」

と零はほかの職員と同じ席、につき話を即す。
席といってもただのパイプ椅子に座っているだけだが。
それを見てライナはあゝとため息をつく。

この三カ月、ライナは凄まじい吸収力で技術を覚えていった。

その速さといえは、

一か月でP Cを組むかのごとくデバイスを組めるようになり。

二か月で適当にプログラムを開発できるようになり。

三か月で飽きた。

やはりライナは魔法の方が好きだったらしい。

が、そのとび抜けた才能と、発想力は零の目に、素晴らしいものとして焼きつき。

こうして

「さあ、説明をしてもらおうか!!」

期待されているのである。

エクレールの人格プログラムを作ったのはライナだ。

それも、ただの人工知能ではなく、魔法陣を複数所持することが可能でその場にに応じて使い分けれる知能。

そこまでならまだ大したことはないのだが、ここからが問題。

『マスター。いい加減説明したらどうですか？ 私は面白くないのでネットの海にダイブしてきますが』

「あつ、お前ずっこいぞ」

『いえ、マスターたちのこっちの話は私にはつまらないので』

そう、マスターに対しての忠誠心の低さ。

というかとても自由な性格。

これこそ一番難しいものである。

自由な性格ということは人格データが膨大であるのと同時に、人に近いということだ。

というかもはや会話が人である。

普通のインテリジェンスデバイスの受付のねえちゃんが喋る硬さ

とかそういうのが無く。

普通に人間くさいのである。

最近、高町なのはのデバイスが人間臭くなったとかいうが、絶対にライナの手が入っている。

そう零は睨んでいるが、まあ今はそんなことはどうでもよく、ライナの発想力は中々に侮れないということだ。

だから、零は言う。

「いいからお前ら喧嘩ばっかしないで喋れ！ 私は今か今かと待っているのにいい加減にしろ！！」

まあ、説明しろ二回も言っただけで流石に全部無視とか聞き流しは泣きそうになる。

零は手をプルプル震わせて怒鳴ったのだった。

それにライナは「え」とか言いつつ仕方なしに喋ることにした。

「ん」と、つまりはあれだよ、デバイスの魔力制御にちゃちゃいれりゃいいんだよ」

という。

それに、零以外は沈黙した。

零は言う。

「それがどれだけ難しいか君は分かっているのかね？」

「ん？ 何だよ？ デバイスのデータに今ある全部魔法のデータ入力して、使用者のリンカーコアの大きさを見極めさせて、どんなレベルで吸い上げればいいのかを判定できる程度のもん作ればあとは自動で魔力制御させりゃいいじゃん」

なんでそれくらいできんのよ？

と不思議そうにライナは首をかしげる。

それに零は

「君はそれができるというのか？」

「んあ？ できるだろ？ 普通に今あるデバイスと同じ程度の値段と増産スピードで作れるんじゃないかね？」

それに零は啞然と言うか絶句する。

おそらくライナはマジでいっている。

データに関してはまず楽勝だろう。

今あるデータすべてを入力すればいいだけだ。

そしてリンカーコアの大小は、インテリジェンスの見識を使えばいい。

つまりは知能だけをデバイスに作り。

職員の魔力をその場で測定し、その場で改善するデバイス。

そして仕事が終われば自動で初期化。

そうすれば前回の所有者の癖も残さないこともできる。

が、そのあと自動で魔力制御。

無茶だ。

なにが無茶って今のデバイスはインテリジェンスでも本気でぶっ放すくらいのことしかできないからである。

つまり全力の魔力の吸い上げ。

それしかできない。

魔力制御部は緻細で緻密だ。

そしてなによりデバイスコアにブラックボックスが多い。

そのブラックボックスをブラックボックスそのままに開発してきたのだ。

今までだれも手が出せないでいるからこそ、デバイスの開発は―

——実は遅れている。

多種多様な装備や、形は存在するが、コア以外は外付けにすぎない。

つまり魔力制御部は、デバイスのコアにあり、それをいじるとい
うのだ。

ライナは真剣とかいてマジだ。真剣で私に恋しなさいだ。

零は、プルプルと震えて人差指でライナをさし。

「で、ではどうやって作るというのかね？」

「ん？ そりゃデータ入力は今あるデータをやって、リンカーコ
アの測定は——精密検査のあれを小さくしたものを外付けるだろ
？」

「ん？ 今何といった？」

「んあ？ 外付け？」

「その前」

「精密検査のあれを小さく？」

「それぞれ」

「ああ、別に簡単だぜ？ あれ、精密検査のやつ魔法に依存して
んだろ？ だから魔法陣弄ってそれに適応させんだよ」

それに、零は頷きライナの耳元で

「ああ、お前の家系はたしか魔法陣を組みかえられる一族だったな

……というよりそういう話は気を付けたまえ。ここの職員は色々と秘密主義だからばらさないがほかの職員だと厄介事になるぞ」

「んあ？ …… ああそうか…… あっそっかごめんごめん」

零が一瞬だけ何を言っているのかわからなくなった。

魔法陣を組み替える一族のことで。

しかし、一瞬で分かった。

脳裏にタヌキが浮かんだ。

あれだ。外への隠蔽のやつだ。

とライナは即座に理解し、同調した。

つまりレアスキルというよりレア技法の一族だ。

しかし、これもいつかは零にはばれるだろうということではやてが考えた。零対策の嘘だ。

ライナがい世界から来たとか言えないのでついたものだ。

しかし、これ自体も本局に、というか上にバレルと不味いので内緒にしておくという方向でいたのだ。

まあライナがばらしたせいで職員にその秘密が波及したが。しかしまあ零も納得したのか。

「まあそれなら確かに大丈夫か。ではコアのほうはどうする？」

「んあ？ そりゃ決まってるじゃん」

「？」

零と職員は首をひねる。

どういつことだ？ と。

それにライナは言う。

「精密検査でどんなレベルかわかるんだったらそれに合うように魔法陣を小さくできるようにすりゃいいじゃん」

魔法陣がでかければでかいほど大魔法だ。

それは魔法陣に大きな魔力が循環するせいだ。

なのはのバスターなどは確かに威力は高いが、あれはどちらかというとリンカーコアのレベルが高すぎるせいだ。

なんというか……ごり押し？

だから魔法陣を大きくして、魔力循環炉を大きくすれば、さらに大きなバスターが撃てるであろう。

超怖いが。

だから、節約するなら小さくすればいいとのことだ。

零は思った。

「……ああ。盲点じゃん」

まあ確かに魔力制御だ。

魔法陣の大小で確かに大魔法と魔法の差は魔法陣の大きさにもある。

魔法陣を大きくすることで威力を上げるということに目を向けるのでなく。

小さくして節約する。ということに全く目を向けていなかった。

ライナはそれをリンカーコアのランクで大小を判別できるようにし、最適な魔法陣を展開できるようにしろということだ。

零は言う。

「うむ、開発資金は微妙にかかりそうだがそれ以上にメリットは大きそうだな。売り文句はあれだ。『あなたにあった最適な魔法を』だな」

こうして開発は始まった。

ライナはこのまま帰ろうとしたが魔法陣を作れと無理矢理また拉致られ、椅子に縄で縛られ、自動人形スパフェリちゃん——眠ると刃物を振り下ろす——を置いて、作らせたという。

……魔法陣の開発には研究者をたくさん集めて、短くて一週間。長くてもうん十年とかかるのだが……さて、ライナはどうなるのだろうか？

「ねさせてええ ええええええええええええええええええ」

狂団は今日も元気。

ちなみにライナの開発期間全てが雨だったという。

おまけ

死に物狂いで貫徹5日で魔法陣を作り上げたライナはふらふらになりながら家に帰った。

すると

「ライナ？ 五日間無断欠勤扱いで仕事が山ほどあるけど大丈夫？」

なのはの死刑宣告で逃げだしたライナはさらに3日間帰ってこなかったという。

まあ本当は一週間逃げ出したかったのだが山狩りならぬ街狩りにより、ライナは捕獲されたのであった。

そして仕事の山に殺されかけたのであった。

さらにおまけ

新作デバイスは一般職員にそうとう売れたらしい。

学校の子供たちにも評判はよく。

これからすべてのインテリジェンスデバイス以外に同様のものを付けていくことになるだろうことは想像に難くなかった。

おわり——ライナの命が

悲しき終わり（後書き）

答え覚えていない

うん何食べたっけ……？

どうでもいいね！！

あとがき

さてさて、境界線上のホライゾンが超面白いぞこのやろっ！！
原作買ってすごいはまった！！

アニメも超面白い！！

でも、分厚い！！！！

なげええええええええ。

たけええええええええ。

次

まあ古本市場で最近67冊買った俺に死角はなかった。

次

ああ、輪廻転生してえええ

次

ああ死にてええええ

次

そう思っていた中二病な時期が僕にもありました。

次

ああ、母の胎内からやり直したい。

次

今の記憶のまま子供のころに戻って色々無双したいと思うとき
あるよね

おわれ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7306v/>

リリカルなのは伝勇伝StrikerS

2011年11月3日01時57分発行